不死者と踊れ

それは由緒正しきご職業

Dance with the Undead

Tokuma Books presents

かいとーこ

Illustration おかざきおか

一迅社文庫アイリス

不死者と踊れ

それは由緒正しきご職業

かいとーこ

TŌKO KAI

一迅社文庫アイリス


不死者と踊れ
それは由緒正しきご職業
Dance with the Undead

不死者と踊れ

それは由緒正しきご職業

かいとーこ

TŌKOKAI

一迅社文庫アイリス

CONTENTS

序章　死霊術師と不死者　8
1章　理不尽な取り立て屋　17
2章　吸血鬼の事情　61
3章　死霊術の使い方　163
4章　吸血鬼狩り　231
終章　楽しい対話　268
あとがき　284

不死者と踊れ

それは由緒正しきご職業

Dance with the Undead



リザイア

戦死して屍食鬼（グール）になってしまった青年剣士。不死者を浄化する聖光水晶（プレス・クオーツ）を食料としているため、いつもぼんやりしている。

キルス・エルヴァン

死霊術が苦手な、自称・死霊術師。呪いにかかった品物をこよなく愛する蒐集家だが、光の使徒であるため、呪いを浄化してしまうことが悩み。

死霊術師

死霊や不死者と対話し、成仏させる術師。

死霊

死後、現世に留まっている魂の総称。
力が弱いため、巧みに人を騙そうとする。

不死者

死後、成仏せずに肉体に宿った死霊の総称。

屍食鬼（グール）

肉体に宿る生命力を取りこむ不死者。生者を襲って生命力を得ようとする。

吸血鬼

日の光に弱いが魅了の力が強く、血の交換で生者を吸血鬼にしてしまう感染型の不死者。血に宿る生命力を取りこむことに特化している。

呪物

強い思念や魂が宿り、力を得た意思のある物質。魔力と引き換えに物質に宿る力を発揮する。

聖光水晶（ブレス・クオーツ）

強い魔力を秘めた、清浄な力を持つ高価な石。死霊や不死者を撃退する武器となる。

使徒

神の加護を授かっている人のこと。不死者は神聖な魔力に引き寄せられてしまう。

人物紹介

ルフィアス

あまりに美しかったため、女吸血鬼に襲われて吸血鬼になってしまった青年領主。
エルヴァン家の取りなしで領主を続けている。

ルグラス

ルフィアスに少年時代から仕えている執事。

ユシェール

ルフィアスを吸血鬼にした女吸血鬼。美男子好きで非常に残忍。

イラストレーション◆おかざきおか

Dance With The Undead

不死者と踊れ　それは由緒正しきご職業

序章　死霊術師と不死者

ゆらゆらと揺れる炎に照らされ、鈍い輝きを見せる薄刃の刀身。
角度を変えれば妖しい光が切っ先まで走り、彼の赤い前髪と琥珀色の瞳が、磨かれたその刃にぼんやりと映る。
姿形に品位はないが、その何とも言えぬ妖しい輝きはたいそう美しく見えて、彼は片笑んだ。
「なかなか、いい買い物をしました」
彼は恍惚と短剣を手の中で弄ぶ。
仕事先で、何となく惹かれる物を感じて手に取った。そのとたんに店主の顔色が変わり、その直感の正しさに確信を持った。
由来など知らない。そんな物は必要がないから聞かなかった。
手にするだけで心を掻き乱す。艶めかしい柔らかな肌にそっと滑り込ませたい、そんな欲望を掻き立てる。それだけで十分だった。
これには人の強い念がこもっている。歪んだ愛情であったり、怨嗟であったり、不思議で複雑な念だ。

触れても、力を込めてもそれは消えることなく、彼を引きずり込もうとてぐすねを引いている。

これがいい。押さえつけようとする力にも負けぬ、この禍々しい妖しさ。これが曰く付きの醍醐味だ。

「お兄さま」

声がかかり、彼は顔を上げた。

「ご満悦のところ、ごめんなさい」

少女がわずかに開いた戸の隙間から、彼を覗き見ながら言った。

「何ですか、そんなところにいないで入ってきなさい。ここにお前の害になるような物は何一つありません」

「うそ。また呪われた異物を拾ってきたくせに」

「触れなければ、彼らはどうしようもありません。思念や物というのは、離れている者に対しては干渉すら出来ない、とてもか弱きものです」

彼女はもじもじとした後、部屋にそろりと身体を滑り込ませた。わずかに気味が悪そうに、置かれている怪しげな装飾品の数々に視線を走らせる。

しかしすぐに視線を真っ直ぐに向けて、安楽椅子に座る彼を、彼と同じ琥珀色の瞳に捕らえた。

「キルスお兄さま」
まだ幼い彼の妹は、もじもじしながら、黒いワンピースのスカートをわしっと掴んだ。
キルスはゆったりと大祖父の遺品であった安楽椅子から立ち上がると、短剣を鞘に戻して棚に置いた。
「それで、なんですか、僕の可愛い妹よ」
妹の前に立って尋ねると、彼女は可愛らしく微笑んだ。
せっかく可愛い女の子なのに、彼女は喪服のような印象を受ける暗い色の服を着る。おしゃれをしたい年頃なのだから、華やかな色の服を着てもいいと両親は言っているが、彼女は自分の立場を弁え、暗い色を身につける。おしゃれらしいものと言えば、赤毛を彩る黒いリボンぐらいだろう。
「わたしも、お兄さまのように拾い物をしたの」
彼女は珍しくまごついて言う。
猫なら既に一匹いるから、猫と相性の悪そうな動物を拾ってきたのかもしれない。
「アリーサ、生き物でも拾ってきたのですか？　でも毒蛇は飼えませんよ」
「違うよ」
「動物の死骸でも拾ってきたんですか」
彼女は少し悩んでから、首を縦に振る。悩んでいる様子から、あまり安全とは言えないもの

を拾ってきたと見て間違いない。
「何を拾ってきたんですか。飼えそうなものなら、一緒に頼んであげましょう」
多少無理があったとしても、我が儘など滅多に言わない妹のお願いだ。押し通せそうなら手を貸すつもりだった。
「本当？　じゃあ、おいで」
アリーサは扉の外へと手招きした。すると、姿を見せたのは人だった。
ぼさぼさの灰色の髪と薄汚れた鎧を身につけ、腰には立派な剣を佩いている。これぐらいなら、珍しい事はない。問題は、男の視線は定まっておらず、今にも発狂しそうな引きつった顔つきをしている事だ。
キルスは思わず後ずさる。
その男の全てが、危険だと警告を発しているようにすら見えたのだ。
「お仕事先から帰る途中で拾ったの」
「な、なぜそんなものが……落ちていたのですか」
拾ったというのなら、おそらく落ちていたのだろう。
「知らないおじさんたちが殺されていたの」
「どういうことですか」
キルスはちらりと男を見る。武装しているから、殺したのは彼なのだろうか。

「リザイアは子供は無事かとしか言わなかったからわからないけど、きっとおじさんは悪い人たちで、リザイアはよその子を助けようとしたの」

キルスはリザイアとかいう男を見た。小刻みに震え、がちがちと歯が鳴っている。狂気に染まる寸前の、青い瞳がキルスを射る。

そこには確かに理性があった。しかし、それはいつ切れてしまってもおかしくない、とてもか細い物に見えた。

「屍食鬼（グール）が生者を前に、よく正気を保っていますね。生前はさぞ強い意志を持っていたのでしょう」

屍食鬼、死体――人を喰（く）らう者だ。不死者の種類の一つで、他者を喰らってその者に宿る生命力を取り込み、生きているかのように動き回ることが出来る。

殺してからの方が生命力を奪いやすいため、動かぬ死体を喰らう場合もあるからそのように呼ばれているが、新鮮で、腐っていない肉であればいい。生きているなら襲いかかって殺し、新鮮なうちに喰らう。

おそらく彼はそういう存在だ。今は気力で抗（あらが）っているが、近い内に人を喰うだろう。

キルスやアリーサのように、若く生命力に溢（あふ）れた新鮮な肉体を前に、理性で押さえ込むのは大変だろうから、その精神力には驚歎（きょうたん）させられる。

「いいこ」



「そうですね。彼はいい人なのでしょう。ですが、とても辛そうです」
アリーサは振り返り、怖い顔をしているリザイアを見上げた。
本能に理性が打ち勝っている。ここまで理性を保てるのは、生前は本当に良い人だったのだろう。子供を心配して、子供に手を出すぐらいなら自分を犠牲にするような。
「称賛に値する傑物ですね。彼のような者には、このように存在することが辛いでしょう」
「うん」
「父様に安らぎを与えてもらいましょう」
「パパに？」
アリーサは不思議そうにキルスを見上げ、そしてもう一度リザイアを見上げた。
そして言った。
「つらい？」
リザイアはこくりと頷いた。
「聖光水晶がほしいの？」
リザイアは再びこくりと頷いた。
その言葉を聞いて、キルスは首を傾げた。聖光水晶とは、強い魔力を秘めた清浄の力を持つ石だ。彼のよう不死者にとっては、触れるだけで痛みを伴うだろう。武器に組み込めば肉体を持たない死霊すら切ることが出来るようになり、魔力を込めて衝撃を与えれば、その清浄な守

りの力をまき散らして強く光る。その光は害のある力や、この世ならざる存在にのみ力を発揮し、人間に対しては精神を落ち着けるなどの効果があるのみで全くの無害だ。

そのため一部では不死者に対する武器としても使われている、とても高価な石だ。アリーサは家業柄、聖光水晶をいくつか父に渡されている。

「はい、どーぞ」

アリーサは聖光水晶をリザイアに渡した。受け取ったリザイアは、それを口に含んだ。

キルスは信じられない光景に、我が目を疑った。

聖光水晶とは、不死者にとって触れることすら痛みを伴うはずだ。嚥下などしたらどうなるか、想像もつかなかった。

しばらくするとリザイアの目から力が抜けて、呆けたように壁を見つめた。

「ああ……いきかえる」

けろりとしてそう言った前代未聞の不死者の姿を見て、目眩を覚えた。

予想していた全ての可能性から、大きく外れた恐るべき反応だった。

「いいこ」

アリーサは呆けた不死者に手を伸ばし、不死者は身を屈めてアリーサを抱き上げた。

「よしよし」

「ありーさも、いいこだな」

それは信じられない光景だった。まるで、夢を見ているような――

キルスはこれが現実とは信じられず、己の頬を平手で打つ。痛いし、現実だ。曰く付きが見せる幻ではない。幻にしても、こんな突飛な幻など見せられるはずもない。

「あ、アリーサ、それは？」

「リザイア。名前以外は忘れちゃったんだって。だから連れてきたの。リザイアはとても強くて、危ないから」

リザイアという不死者に抱き上げられた妹は、無邪気に答えた。

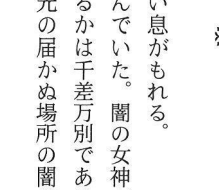
キルスは慌てて地下室を出て、死霊術師である父を呼びに階段を駆け上がった。

1章　理不尽な取り立て屋

暗闇に支配された寝室で目を覚ますと、ルフィアスは息を吐いて身を起こす。
慣れた寝室の慣れた匂い。そして慣れ親しんだ夜の気配。しかし、妙に気分が悪かった。体の調子は悪くない。悪いのは心地の問題だ。
気怠さを何とか振り払おうと、這うように広いベッドを抜け出し、水で顔を洗う。顎を伝いぽたぽたと落ちる水滴を拭って着替えると、闇に包まれた寝心地の良い寝室を出た。
続き部屋の窓辺に寄ると、分厚いカーテンを開いて窓の外を見る。小高い丘の上にあるここからは、ダヴィトの街とそれに寄りそう川が見える。昼間なら街の様子や、川辺から続く斜面にある葡萄畑で働く人々を見るのがルフィアスの日課だった。夜は夜で、歓楽街の明かりを見て、心を和ませる。
しかし今夜は空には不気味なほど赤い月があるためか、街の明かりはほとんどなかった。この地域では、赤い月は不吉だから外に出てはいけないという迷信があるのだ。
ルフィアスの不幸もこんな日に始まった。この嫌な気分はこの月のせいに違いない。
あの不幸から何十年の月日が流れても、どうしても忘れることが出来ないでいた。普段は忘

れるように心がけていても、時折はっと思い出す。
あらゆるものに怯え、目覚めるたびに、彼は自分がここにいるのだと安堵する。
死は恐ろしいものではない。恐ろしいのは、他のものだ。
例えばそう――
「旦那様、何者かが屋敷に接近しております」
ノックもなしに現れた、年老いた執事に声をかけられ、彼は眉根を寄せた。
恐ろしいものの一つ、それは他所者だ。彼の不幸はいつも他所者が原因なのだ。
安心出来るのは見知った者達だけ。他所者はどんな厄介事を運んでくるか分からない。この執事は代々ずっと仕えてくれている、誰よりも信頼できる人物の一人だ。
昔は見事な金髪であったが、今では白いものが目立つようになってきた。その変化は緩やかな時の流れを感じさせ、ルフィアスにとっては何よりも心地よいものであった。
「ルグラス、客人か？」
「はい。二人組でございます。身長差があるようでしたので、お一人は女性やもしれません」
それを聞き、ルフィアスの身体が強張った。
「招かれざる客であれば、穏便に帰っていただけ。顔見知り、もしくは正当性のある客人であればもう一度呼べ。くだらない用事であれば、正式な紹介状を要求しろ」
「かしこまりました」

ルグラスが去ると、緊張をほぐすように何度も深呼吸し、椅子に深く腰掛けた。
最も厄介で恐ろしいもの。
それは好奇心旺盛な、女である。
この城を訪ねてくる女は、いつも災難を呼ぶのだ。



わずかに開いた唇から白い息がもれる。
日はとうに山の谷間に沈んでいた。闇の女神が支配する時間。闇がもたらすのは、安らぎと恐怖。人によってどう感じるかは千差万別であるが、人は何も見えぬ事に恐怖を抱く。小さな明かりがあったとしても、光の届かぬ場所の闇がさらに深くなり、暗闇に対するのとは別の恐怖を抱く。
多くは不毛な恐怖であるが、稀にそれが正当な恐怖であるため、人々は闇に怯える。だからこそ人は家を建てて、そこに住まうのだ。外界と隔絶された空間があって初めて闇は安らぎとなる。
しかし今夜は不吉とされる、不気味な赤い月が空にある。この地方は特に赤い月を恐れているらしく、そのおかげで街の店はほとんど閉まっており、温かい食事を諦めなければならな

かった。

そんな外出すら控えるような日に、曲がりくねった木々に囲まれた、人を狂わせてしまいそうな赤い月の光さえ届かない濃密な闇に包まれた人気のない道を歩くのは、実に愚かで、恐ろしい事だろう。

それでも人は、危険があると分かっていても、必要であれば夜道を歩かねばならないのだ。

たとえ殺人鬼がいようとも、人を喰らう動物や化け物がいようとも、そうしなければならない時がある。

そういった人々のいくらかが犠牲となり、人々はさらに闇を恐れる。

ベッドの中で邪魔をされずにぬくぬくと眠る幸せという、闇の恩恵も忘れて。

「はらへった」

突然、背後から声が上がった。

「煩い、黙りなさい」

キルスは薄汚れた連れの男の呟きを一蹴した。

「はら……へった」

「それは空腹ではありません。錯覚です。お前が満たされたいのは腹ではないはずです」

「でもはらへった」

ぼけっとした顔つきの連れは、ただひたすら同じ言葉を繰り返す。

「不死者とは、死を越える代わりに、永遠の飢餓感に苛まれるものです。お前が現世に留まる限り、永遠に続くのです」

「はらへった」

キルスは諭すことを諦めた。不死者とは、理不尽なものである。まともに会話しては、おかしくなるのは生きている人間の方だ。

それと向き合う死霊術師は、その理不尽を打ち破って人間の道理を通させるか、彼らに合わせる必要がある。

力が足りれば前者を、なければ後者を選ぶのが定石だ。危ない橋だが、意志をしっかり持っていれば大丈夫だ。

キルスが選んだのは、今回の場合は後者になるのだろう。人間の間でも頻繁に行われる、妥協というものだ。

葛藤の末の妥協ではあるが。

「見えました」

街外れの小高い丘の上にある古城の入り口。近づけば騒がしく蝙蝠が飛び立ち、不気味さを演出する。

暗くて全貌は見えないが、赤い月の夜にはあまり来たくない場所だ。

ここにはこの地の風変わりな領主が、老いた執事と二人で住んでいるらしい。領主の名はル

フィアス・レヴィル。
噂ばかりが先立ち、本当はどんな人物であるかは分からない。
「きるす、ここ、くいものあるか？」
「あるのではないですか」
「はらへった」
キルスは小さく息をもらす。中途半端に知性と理性があるこの男とは、理解し合える日は来ないのではないだろかと、不安になった。
ただでさえ、キルスには彼らの飢えは理解出来ない。彼らの飢えは、どれだけ食べようが、満たされた気持ちになるのはその瞬間だけだ。
刹那のための欲望であれば、本当の意味で一蹴していた言葉だが、彼の場合は切実である。
「リザイア、黙って歩きなさい。口を開けばそれだけ力を使います。何も考えず、僕に従っていれば、一時の救いを与える事は出来ます」
それが脆弱なる人間にも可能な、唯一の平和的な救いの手立てだ。
「根本的な救いは、お前の心次第です」
「しだい？」
今まで生気を感じなかった目を光らせて、リザイアは首を傾げた。その首には、首輪がついている。

目がぎらついて少し危なそうだが、危機的状況というわけでもない。眼球が揺れてきたら、いよいよ危険だ。その時は首輪を鎖で繋いで、少なくとも一般人に危害を加えないようにする。そこまでするには、まだ時間がある。

キルスは古い錬鉄の門を開け、厳めしいガーゴイルが見下ろす古城の敷地内に足を踏み入れる。ガーゴイルとは悪魔を模した雨樋のことだが、その恐ろしい姿で弱い魔を払う力がある、合理的な飾りだ。

見える範囲に人気はなく、明かりのついた部屋もない。ノックすれば誰かが出てくるだろうか。誰かと言っても、主と執事の二人しかいないらしいが。

そう思った矢先、玄関の扉が内側からゆっくりと開いた。

「でむかえー」

「黙りなさい。失礼ですよ」

騒いだリザイアを叱りつけ、キルスは明かりを掲げた男を見た。歳老いた男だ。古めかしいが品の良い上着を羽織り、口髭を立てている。これが執事だろう。

「きるすー、ほらーの、さしえみたい」

「だから黙りなさい。お前が言っていい言葉ではありませんし、そこまでくだらない事を思い出すぐらいなら、もっと大切な事を思い出しなさい」

「おもいだせないー」

何度目か分からない叱責も、リザイアはどこ吹く風で、仕方なく前に進み出る。
「失礼ですが、どなた様でしょうか」
事務的な口調の執事に誰何され、キルスは杖に引っかけていたランタンを外してリザイアに持たせ、杖を見せるように前に出た。
「僕はルフィアス・レヴィルの保証人である、エルヴァンの死霊術師です」
悪魔の如き角の生えた髑髏を戴く、禍々しい姿の杖を見せる。
「レヴィル卿はご在城でしょうか」
執事はしばし悩み、キルスとリザイアを見比べた。そして納得したのか、軽く首肯する。
「旦那様は先ほどご起床されました」
「ああ、それは良かった」
キルスは笑みを浮かべて見せた。叩き起こしてもらうのも気が引ける。
「お入りください、ご案内致します」
キルスはリザイアからランタンを受け取り、古城に足を踏み入れた。暗くて、内装もよく見えない。しかし光を向ければ、古びた家具は艶やかに光を反射させ、入念に手入れされていることが分かる。
「はらへった」
「だから黙っていなさい」

「何かお持ちいたしましょう」
「お構いなく」
リザイアは何を食べても意味がないし、キルスも多少腹は減っていたが我慢できないほどではない。
いかにも貴族が好みそうな談話室らしき場所に通された。広く、椅子とテーブルが何組かある。しかし分かるのはそれだけだった。明かりは手元にあるランタンが一つしかなく、室内の全容すらはっきりと分からない。
「こちらでくつろいでお待ちください」
執事は主を呼びに部屋を出て行った。
キルスは人目がなくなり、好奇心のままランタンを掲げて部屋を見回す。
壁に飾られた肖像画は、明るい場所で見れば美しい婦人なのだろうが、この暗さでは不気味なばかりだった。キルスが腰掛ける椅子も、繊細な細工が施され、いかにも貴族の持ち物といった雰囲気だ。
ただ、普通の貴族の持ち物とは言えないような物もある。部屋の片隅にある長椅子や、上の方からも特異な気配を感じた。
「くらいな。けちか？　こどもがいるのに、だんろもつけない」
子供扱いを受けて、キルスはため息をついた。確かに寒いが、風が吹き込んでこないから凍

えるほどではない。
「お前は見えるでしょう」
「みえるけどくらい。きるす、さむくないか？」
心なしか、リザイアの発言が安定している。キルスは再びため息をついた。
「僕は寒さには強いんです。僕の蒐集部屋は地下室にあって寒いですが、よほどの事がなければ暖炉は使いませんよ。それに不死者は火を嫌うものです。火には魔除けの効果がありますから」
「そうか」
そう言って、リザイアは退屈そうに立ち上がり、レースのカーテンを開いた。
古めかしい様式の透明度の高いガラス窓からは、あの赤い月が見える。ガラス窓は財力の証だ。澄んでいればいるほど高額だ。古い物は特に貴重である。
「割ったら承知しませんよ」
「わらないぞ」
不安で窓から引き離そうかと思った時、ドアが開いた。
リザイアはぱっと振り返ってキルスのもとに走り寄る。キルスもほっとしながらやって来た人物を見た。
黒いマントを羽織り、フードを被っている。口元も布で覆っており、暗い城内で見ると、ま

るで盗人のような装いだった。黒い布の隙間から見える、赤い瞳が不気味に輝いていた。不気味だが、まるで曰く付きの宝石のように美しい瞳だった。

「初めまして、レヴィル卿。死霊術師のキルス・エルヴァンです」

キルスは恐れる事なく、杖を見せつつマントの端を手に一礼し、城主であるルフィアス・レヴィルに笑みを向けた。

「不死者……本物か」

彼はちらりとリザイアに目を向けて言った。リザイアの存在が、キルスが本物である証明になったようだ。

まだ年若いキルスは、証明するのにいつも苦労するため、今回は少し助かった。

「もちろん本物です。間違いなく、あなたの無害保証を引き受けた死霊術師の一族の者です」

彼はそれを聞くと、フードを外し、口元を覆っていた布も外した。

そして気障ったらしく腕を広げた。

「私のアウロザ、私にお前の美しい姿を見せておくれ」

甘く歌うように呼びかければ、暗かった部屋が昼間のように明るくなった。

天井から下がるシャンデリアが、炎の光ではなく魔力の光を放っている。その強い光に目が眩み、目を押さえた。

「アウロザ、客人が驚いているから、君の輝きを少し控えてくれないか」

ルフィアスが頼むと、光はずいぶんと落ち着いた。薄暗くなった室内を見回し、落ち着いてもう一度シャンデリアを見る。

「呪物の照明ですか」

キラキラと輝く姿は美しい。その美しさを自慢げに見せつける女性のようだった。

「そうだ。アウロザは城内全ての照明で一つの呪物だ」

「それはなんて珍しい」

「これほどの美女はなかなかいないぞ」

「確かに」

キルスはゆっくりとルフィアスに視線を下ろした。

闇を紡いで糸にしたかのような黒髪の、たいそう美しい男だった。

すっと通った鼻筋、アーモンド形の赤い目、血のように赤い唇。蒼白なまでに白い細面に、それらが作られたかのように完璧に配置されている。

その少し下、胸元にある月長石のブローチも、呪物特有の強い魔力を感じる。

彼は目を細めて艶然と微笑み、マントの端を掴んで優雅に一礼する。わずかに開いたその唇から、鋭い犬歯が覗いていた。

「失礼した。私がこの城の主、吸血鬼のルフィアス・レヴィルだ」

世にも美しい男、と彼は評される。そう呼ばれるのも納得がいく、気障で妖美な男だった。



人外であると言われればその美貌にも納得がいくが、吸血鬼は生前と同じ姿を保つため、彼は生きていた頃から、このように現実離れした美貌の持ち主だったのだろう。

美男美女揃いだと言われている吸血鬼の中でも、彼は特別だ。これを基準にしてしまえば、美男美女だと思われていた他の吸血鬼は、実に平凡だと思われるに違いない。

「きゅーけつき？　こいつ、きゅーけつき？」

「そうです。ずいぶんと昔、あまりにも美しすぎるため噂になり、吸血鬼に襲われてしまった絶世の美男子として有名な男です。現存する伝説の美男子です」

「おー、びだんしー。でんせつの、びだんしー」

リザイアはパチパチと手を叩いた。

それには意を介さず、ルフィアスはキルスの手を取り、匂い立つような甘い笑みを浮かべる。

「我が城にようそこ、可愛らしい乙女よ」

「誰が乙女ですか！」

キルスは反射的に杖で吸血鬼の横っ面を殴りつけていた。

「でんせつのびだんしの、かおにー！」

ルフィアスが倒れ行くさなか、リザイアが緊張感のない声で言った。

「黙りなさい。吸血鬼など、顔を抉ろうが魔力があればすぐに戻ります」

キルスは煩いリザイアを叱りつけ、乙女のように頬を押さえて倒れているルフィアスを見下

ろした。
しかし吸血鬼である彼を保証しているとはいえ、一応相手は貴族である事を思い出し、少しまずかっただろうかと考えた。
だか、いきなり乙女扱いされれば、誰だって怒るに決まっている。
「失礼ですが卿、僕のどこをどう見たら女性と間違えるのか、教えていただきたいものですね」
「どこをどう見ても少年だ。この私が男女を間違えるはずがないだろう」
返ってきたのは意外な言葉だった。
「吸血鬼と親しくした事はないのか。私達の業界では、歳が若く可愛らしい少年も『乙女』と呼ぶ」
「可愛らしいというのは聞き捨てなりませんが、なぜ男を乙女だなどと……」
「童貞と言うともっと怒るからだ」
キルスは気がつけば杖を振り回し、再び吸血鬼を殴り倒していた。二度も当たるとは、吸血鬼のくせに鈍くさい男だ。
「じゅ、呪物をそのように粗末にするとはっ」
キルスは彼を殴りつけた杖、呪物を見た。
「じゅぶつ？」

リザイアが首を傾げた。剣士が知らないのは仕方がない。ただ忘れているだけかもしれないが。

「呪物とはこの杖やあの照明のように、霊威と意志を持つ道具のことです。この地は呪物が生まれやすい土地なのでしょう。呪物とは、力に溢れた場で、強い念のこもった力、もしくは継続的な愛情などを受けて、意志と力が宿った物をそう呼びます」

「いしー？　これ、いきてるのか？」

リザイアはキルスの杖を指さした。

「生きてはいません。魂の残滓とも言える、曖昧模糊としたわずかなものです」

「ほうほう」

「呪物は意志を持っているので、自分の主を選びます。人間と同じで好みがあるということです」

リザイアは照明を見て、次にルフィアスを見て頷いた。

「その呪物に選ばれ、魔力と引き替えに霊威を引き出す者を呪物使いや魔術師と呼びます」

「へー」

素人は呪物の力を引き出すと聞くと、誰にでも出来ると勘違いする。しかし、魔力と呪物に好かれる必要がある。

「この杖は不死者達を操る力を持つ、我が家に代々受け継がれる呪物です」

「かほうか？　たいせつなもので、なぐった？」
「家宝ではありません。当家にはこの手の呪物はたくさんあります。当家は呪物が出来やすい地にあります。その力を利用して一人一つは呪物を制作しています。先ほどルフィアス卿が口にしたアウロザというのは、この照明が呪物化するきっかけを作った人物の名でしょう。呪物は認めた相手に名を預け、その名で呼ばれる事で真の力を発揮します」
「ちかにある、あやしいの？」
「最近の事は覚えていられるのですか。あれは僕が大祖父から受け継いだ、ただの蒐集物です。曰く付きはあっても、呪物は一つもありません。曰く付きには呪物のような好みはありませんし、力を貸してくれる事もありません。誰に対しても、魔力がなくても、同じように作用します」
「へー、きるす、おれ、はらへ」
「黙りなさい」
彼は納得して再び空腹を訴えようとしたので叱りつけた。
話を続けようとした時、ドアがノックされた。
「失礼致しま……旦那様？」
先ほどの執事が、頬を押さえて倒れているルフィアスを見て眉をひそめた。まだ倒れていたらしい。

「旦那様、まさか襲い掛かって返り討ちに？」
「手に触れて乙女と呼んだだけだ。まだ噛んではいない」
「このような年頃の少年に向かってそんな事をおっしゃれば、お怒りになるのも当然でございます。いい歳なのですから、自重なさってくださいませ」
執事に叱られルフィアスは大人しく椅子に腰掛けた。
「温かいお飲み物をご用意致しましたのでどうぞ。すぐに暖炉に火を入れましょう」
「ありがとうございます」
せっかくなので、キルスは出されたホットワインを口にした。アルコールをとばしてあるようで何とか飲めた。香辛料が効いていて身体が温まる。
ルフィアスはグラスに冷えたままのワインをグラスに注ぐ。
「血？」
ルフィアスのグラスを見て、リザイアの目の色が変わった。
「これはこの地で造ったワインだ。血ではない。ここから見える川沿いから広がる斜面には、葡萄畑がある。川面の光を受けていい葡萄が育つんだ」
「そうか」
血ではないと知り、リザイアが落ち着きを取り戻す。
「きゅうけつきなのに、ちじゃないのか？」

リザイアは本人ではなくキルスに向かって尋ねた。
「吸血鬼に必要な血はそれほど多くありません。それに多少であれば嗜好品を楽しむことも出来ます。あまり香りの強い物だと、身体に毒となるようですが。例えば今僕が飲んでいるこれは、香辛料が効いているので飲めないでしょうね」
キルスはホットワインを軽く掲げた。
「ひつようさいていげん？」
「そうです。彼が吸血鬼になったのは本人の意志によるものではなかったので、当家が無害であると保証して、昔と変わらず領主としてこの地を治めています。ですから、必要以上の血の摂取は、彼にとってとても不利となります」
「きゅーけつきがりょーしゅ？」
「領民達も納得しての事です。皆に慕われていたのか、他にろくな候補者がいなかったのでしょう。もしも人を殺したり、誰かを無理やり吸血鬼化させるようなことがあれば、責任を持って当家で始末をするという契約を交わしています」
吸血鬼になるには、いくつかの方法がある。
吸血鬼に血を抜き取られて殺される。吸血鬼と血の交換をする。始祖の吸血鬼となる。
一つ目の失血で死んだ場合はあまり質の良くない吸血鬼となる。下手をすれば理性すらなく、ひたすら血を求める化け物になるし、必ず吸血鬼化するわけでもない。殺されて吸血鬼になっ

てしまうのはかなり運が悪いと言える。

始祖の吸血鬼もまちまちだが、最も強い吸血鬼が生まれるのがこの場合だ。狙って吸血鬼になったという者もいるらしいが、ほとんどはリザイアのように意図せず不死者になってしまう場合が多い。ただ血だけで存在を支えるのは難しいらしく、不死者のほとんどはリザイアのように肉を求めるようになるため、始祖の吸血鬼はとても珍しい存在だ。リザイアも吸血鬼になっていればずいぶんと楽だっただろう。

そして一番簡単で、生前の姿を完全に保持できるのが、血の交換による契約的な吸血鬼化だ。吸血鬼の血は人にとっては毒である。吸血鬼の血をいくらか摂取すると吸血鬼になってしまう。吸血鬼は奪った血を相手に捧げるため、血の交換の儀式と呼ばれている。最も簡単に、苦しみもなく吸血鬼になる方法だ。

ルフィアスはその血の交換による吸血鬼だ。

本来ならそれは本人の合意の下に行うものだ。なぜなら血の交換をすれば、子吸血鬼は親吸血鬼の下僕となり、逆らうことが出来なくなる。それでもいいと言わせて、彼らは自分の下僕を作るのだ。

その過程を踏むのは、誇り高い彼らが自分達に課した取り決めだ。手順を踏まない者は、下品だと仲間に嘲笑されてもおかしくない。吸血鬼のほとんどは、吸血鬼に狙われるような美男美女が多い上、吸血鬼が魅了の力を持っているため、魅了できなかった相手を無理やり従属さ

せるのは、吸血鬼として負けたようなものだと考えられるらしい。
「ルフィアスは合意も何もなく、女吸血鬼に襲われたのだそうです。自尊心をかなぐり捨ててまでも、永遠に自分の物にしたいとでも思ったのでしょう。そして哀れな犠牲者である彼を、当家で保護する事になったそうです。こういった事件はたまにあります。被害者は女性が多いのですが」
「ほうほう」
リザイアはこくこくと頷いた。
顔がいいというのも、不幸なものだ。美人薄命というが、不死者となってその美しさを残すのだから、実に数奇な運命に翻弄されている。
「リザイア、お前も何があったかは知りませんが、不死者というのは、なりたくてなる者の方が少ないのです。あまり思い詰めない方がいいでしょう」
ルフィアスは思い詰めた様子が見えないリザイアを見て訝しんだように、指を自らの顎に滑らせた。
「乙女よ」
「キルスです。今度言ったら次は顔を潰しますよ」
「ではキルスよ、我が城には何用で訪ねてきたのだ？」
ルフィアスはグラスを眺めながら問う。薄暗くなった部屋で見ると、確かに血のようにも見

えてしまう。心を惑わすほど美しいこの男にはよく似合う色だった。
「何から話せばよいのやら。問題と言えば、大きな問題です。当家が投げ出せば、確実に人が死に、大きな組織が動くことになるでしょう」
「大きな組織？」
「例えば、どこぞの聖騎士団であったり、光聖会であったり」
「そこまで……不死者に関する問題が？」
察しのいい反応に満足し、キルスは頷いた。
「不死者を屍喰鬼（グール）だの吸血鬼だのと便宜上呼び分けていますが、実際のところは人それぞれです。始祖でも似た傾向になる吸血鬼だけが特殊なのであり、卿のように吸血鬼に吸血鬼にされたという、この上なくはっきりとした理由を持つような不死者は稀です」
「そうだな」
「ですから、彼を何と呼ぶべきか、僕らには分かりません。ですので便宜上、彼を『生ける死体（リビングデッド）』と紹介しています」
キルスは目を伏せた。リザイアのような男に対して、あまりひどい呼び名を当てたくはないため、このように呼ぶことにした。
「先ほどの続きとなりますが……レヴィル卿はご存じですか？　不死者とは、一種の呪物だという説があることを」

「呪物？　私が？」

ルフィアスは自分を指さして、驚いたように言う。

「そうです。呪物とは強い思念や魂と呼ばれるものが宿り、力を得た『意志のある物質』です。つまり死体という人間に最も相性の良い『物質』に人の魂が完全に宿り、死体が呪物化したと考えられるのです。その根拠は、不死者の肉体の強さです。呪物はとても頑丈です。骨を組み合わせて出来たこの杖で、殴っても壊れないぐらいですから」

キルスは傷一つないルフィアスの顔をじっと見つめながら言う。

「不死者が生者よりも肉体的に鈍感なのは、当然の事だろう」

「力が強い不死者ほど肉体そのものも強く、蘇生力も高いはずです。一般人の血を吸っただけで、そのような力を得るはずがない。だから呪物と同じような理屈で、不死者は頑丈になっていると考えられます。呪物とまったく同じとは僕も思っていませんが、それに近いという事は、否定出来ません」

キルスはホットワインを口に含む。話している間に、少しぬるくなっていた。

「吸血鬼の場合は自らを呪物化する儀式を行い呪物になった。リザイアの場合は最も呪物化しやすいとされる末期の執着が、肉体に対する執着だった。土地や物に付いている人を祟り殺すようなごく稀な死霊の場合は、彼らが出現する建物、またはその土地そのものが呪物になって、呪物としての力で、己の生前の姿を具現化させて自由に動き回っているように見えている」

キルスはマグを両手で包み、もうわずかにしか立ち上らない湯気を眺める。
「そして、不死者は聖光水晶（ブレスクォーツ）を苦手とします。聖光水晶は呪物の力、つまり害のある魔術、黒魔術とか呼ばれるものに強く反応して力を打ち消すため、魔術から身を守るのにも使われます。つまり不死者が呪物に近い存在だからこそ聖光水晶が効くのでは、という意見があります」
ルフィアスはワインを飲み干し、グラスを置いた。
聖光水晶は荒（すさ）んだ人間の心を穏やかにする効果もあるため、人間にも効いていると言えば効いている。否定されがちな説なのだが、キルスはこの不死者は呪物であるという説はけっこう気に入っている。
「確かに、呪物に近い存在であると思えてきた。彼女達と同じ存在だと言うなら、それは私にとっても光栄だ」
ルフィアスは胸元のブローチに触れながら天井を仰ぐ。
「だが、それがなんなのだ？」
ルフィアスは視線を下ろして、胡乱（うろん）な目をキルスに向ける。
「実は、とても強い不死者がいます。その不死者は生命力に満ちた肉を喰らう、屍喰鬼に分類される不死者です。当家では救うことも、滅ぼすこともしてやれないほど、強い不死者です」
「確かに、それを放置したら大変だな」
「しかしその不死者はとても意志の強い不死者でした。人を喰らう事を拒絶する、恐ろしく意

志の強い不死者です」
「人としての理性があるのか。可哀想に」
ルフィアスのような吸血鬼は、わずかでも定期的に血を摂取すれば理性を維持することが出来るため、人間と共存するのも容易だ。しかし屍喰鬼は違う。飢餓感が強く、本能のままに喰らい続けるのだ。理性を失うことが多いため、恐怖もなく、ただひたすら人に襲いかかる。最も恐れられる不死者である。
「しかし彼にも限界があります」
「当然だろうな」
「そこでその不死者は、自分を殺すために聖光水晶を呑み込みました」
ルフィアスは目を見開いた。彼も聖光水晶に触れたことがあるのだろう。触れる程度なら軽い火傷程度で済むが、もし呑み込んだらその内に眠る力の全てを肉体で受け止めることになる。
「呑み込み!?　それで、まだ存在しているのか？」
「ええ。彼は聖光水晶を呑んでも、肉体的にはぴんぴんしていました」
「化け物か」
そうでなければ、強制的に肉体を滅ぼして、その魂を冥府に叩き込む事も可能だろう。
「しかし、聖光水晶を喰らったことにより、小さな奇跡が起こりました」
「奇跡？」

「聖光水晶は魔力の塊です。摂取方法が違うとはいえ、最終的に不死者が必要とするのは肉体を動かすための魔力です。彼は痛手を受けながらも肉を喰らうことなく腹を満たし、人を襲うほどの飢餓が薄れました」

ルフィアスの顔が強張った。

「というわけで、僕は聖光水晶、もしくはそれを買えそうな金額の寄付を願います」

キルスは笑顔で手を差し出した。

「な、なぜ私がそんな物を」

聖光水晶はとても高価なものだ。そんな物を定期的に与えなければならない存在を飼えるのは、よほどの大富豪だけだろう。多少の金持ちでは、あっという間に家が傾いてしまう。

「俗に言うみかじめ料というやつです。当家が倒れれば、それはつまりあなたの保証人がいなくなるということ。払わなくて困るのはあなた自身です」

だから、なければ何とかなりそうなところから調達すればいい。

それがキルスの出した結論だった。

ルフィアスの顔は引きつっていた。

「彼が満ち足りるほどの聖光水晶を対価もなく差し出し続けろなどとは、もちろん言いません。しかし昔は聖光水晶鉱山で栄えていたこの街の領主なら、聖光水晶をそれなりの数、所有しているのではありませんか？」

ルフィアスは視線をふらふらと迷わせ、最終的に控えていた執事に向けた。
しかし何かを尋ねるより前に、それは起こった。
「キルス、本当に腹が減った」
リザイアが、いつもよりははっきりした声で言った。虚ろだった目には強い意志が宿り、時折その意志がぶれるように、眼球が痙攣する。
「ちなみにその不死者は、聖光水晶を食べた副作用なのか、腹を満たしている間は呆けています」
ルフィアスは美しい顔を引きつらせて、リザイアに視線を向けた。
「聖光水晶を喰らうなどという暴挙に出たのも、彼が子供が好きで、目の前に現れた子供を喰わないためです。喰われる可能性が高いのは、生きのいい大人の男です。僕の父も、囓られそうになり、肩の骨を折られました。幸いにも、怪我はそれだけですんだのですが」
キルスは杖を片手に、ゆっくりと立ち上がった。
「肉体を保持している不死者は、つまり新鮮なまま保存されている死体です」
ルフィアスの口元がさらに引きつる。
「生きた人間には劣りますが、屍喰鬼が喰らうのにまったく問題ありません」
キルスはリザイアから遠ざかる。
「ちなみに僕はまだ子供だと認識されているようです。失礼な話ですね」

ルフィアスはまるで山中でクマに出合ったかのように、リザイアから視線を逸らさずにゆっくりと立ち上がった。その動きをリザイアが目で追った。飢えに耐える、正気の目だ。
「ルグラス、聖光水晶を」
「かしこまりました」
執事はこれ幸いと、颯爽と部屋を出て行った。
「じゃあ僕は両人に任せて、外で待っています」
「ちょ、いや、まてっ、今の話から推測するに、これは死霊術師の一族が匙を投げた化け物なんだろうっ!?」
「必死で耐える若者を目の前にして化け物とは、品性を欠くのではありませんか」
キルスは残念だと、首を横に振った。
「ああ、そうそう。リザイア、この部屋の調度品は、決して壊してはなりません。これらは吸血鬼などよりもよほど価値があります」
金がなくて困っているのだから、他所の家とはいえ金目の物を壊されてはたまらない。何よりも、年月しか作り出せない古い物の風合いは、キルスの好みであった。
「き、君は本当に死霊術師なのか!? 君のお祖父様は、死霊術師とは不死者の話を聞き、安息を与えるのが使命だと言っていたぞ！」
「ええ、死霊術師ですよ。一般的な職業としての死霊術師は、死霊と対話し、可能な限り平和

的解決、つまり成仏を目指します」

キルスは世間では勘違いされがちな、正しい死霊術師について説明した。

「ですから、成仏とは縁のない感染型の吸血鬼に関しては、本来なら管轄外です。たまにこうして保護する程度で」

彼ら自身は人でなくなったという認識はあっても、人として死んでいると自認する者などほとんどいないぐらいだ。不死者の中でも高い知能と魔力を持つ吸血鬼を支配下に置ける死霊術師も滅多にいないのも、その一因となっている。

「リザイアは僕らの価値観からすると、保護するに値する在り方をしているから、可能な限り彼の意志を尊重し、未練を断ち切り、肉体から離れて成仏してもらいたいと思っています。だって可哀想ではありませんか。生きた人間を襲いたくないと、ここまでするなんて、滅多に出来る事ではありません。そしてここまでして、現世に執着するのですから、何かとても大きな心残りがあるのでしょう。見過ごせません」

「だ、だからといって、なぜ私が、こ、こんな目にっ」

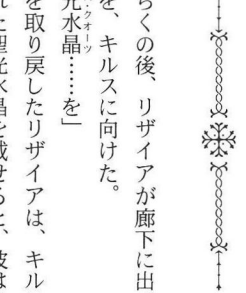
ルフィアスはリザイアと見つめ合ったまま、動けないでいる。獣に背を向ければ襲われるのと同じ理由で動けないのだ。

「答えは簡単です。死霊術師が全て不死者に優しいとは限りません。リザイアの高潔さに感動したから、僕はこの男に優しくしているのです。優しくして欲しければ、こちらの望む物を差

し出すのが筋でしょう」

そろそろリザイアが限界だ。それだけ告げると、キルスも部屋を出た。

執事が間に合わなかったのは、キルスのせいではないだろう。



それからしばらくの後、リザイアが廊下に出てきた。苦しげに胸を押さえ、しっかりとした意志を持った目を、キルスに向けた。

「キルス……聖光水晶（プレスクオーツ）……を」

少しだけ正気を取り戻したリザイアは、キルスに向かって手を差し出した。その手の平に執事が用意してくれた聖光水晶を載せると、彼はそれを躊躇（ためら）いもなく口にし嚥下（えんか）した。わずかに顔を歪（ゆが）め胸を押さえ、息をつく。

「……のど、はら、いたい」

元に戻ってしまった。

彼の場合、この状態が異常で正気を失っている状態だ。先ほど見せたほんの一瞬が、彼の正気だ。正気でいられる時間の、なんと短い事か。

「痛いですんでいるお前の身体がおかしいのです」

自らを傷つけて、それでも人を襲いたくないという気概は見事だ。そうでなければ、もっと別のやり方も考えた。

人に害なす不死者を狩るのも、死霊術師の仕事の一つだ。しかし彼は必死に耐えている。理性をなくして厄災と化した者達と同じように扱いたくはなかった。

死霊術師とは、聖職者よりもよほど聖職者らしい、言葉を伝えられない者達と根気よく対話する術者達である。対話し、解決方法を引き出せそうな相手を滅ぼすのは、死霊術師という存在の否定であり、高潔であった先祖にも申し訳が立たない。

「旦那様、お着替えをご用意致しました」

「ふくより、私の心配をっ」

部屋の中では、執事がルフィアスに声をかけていた。キルスは部屋の中に入ると、血にまみれた、凄惨な姿の美青年を目撃した。しかし、そんな姿も様になっている。

「びだんしは、ちが、にあうな」

「ええ、まったく。なんと美しい姿なのでしょうか。噂など当てにならないと思っていましたが、まさに人外の美しさ。まるで絵画のようです」

美しすぎる吸血鬼の最期を描いたような。

彼は顔を歪めても美しい。

男に向かって美しいなどという感想を抱く日が来るとは思いもしなかったが、噂になるには

理由があるのだと、キルスは感心した。
「私めには手に余りますが、直せば使えそうですな。修繕に出しましょう」
「だから、私の、からだのっ」
肩を食いちぎられても、吸血鬼であればすぐに治る。だから心配する必要などない。
「私にだって、痛みは普通にあるんだぞ!? というか、着替えを用意している暇があったのかっ!?」
「なに、明日は血税の届く日でございます。新鮮な乙女の血を飲めば、消耗した力もすぐに回復致します」
「だから、痛みはあるしっ、そういう問題ではない！」
ルフィアスは涙目で喚き散らしている。
キルスはそんな二人の会話を聞いて首を傾げた。
「……け、血税？」
「左様でございます。この地方では、他にはない血税という税がございます。もちろん、その名の通りの、乙女のみに課せられる税でございます」
「そうですか」
ずいぶんと安直な税名だ。しかしルフィアスが求めているというだけで、ずいぶんと背徳的な響きとなる。乙女達もこの美しい領主に血を吸われるのであれば、いい思い出になるだろう。

「きるす」
「どうしました」
リザイアはキルスの頭に手を置いた。吸血鬼を一噛りし、聖光水晶まで喰らったのだ。今はかなり飢餓感は薄れているはずだ。
「こどもは、ねる、じかん」
予想だにしない言葉を聞いて、キルスは目を丸くした。そんな事を言われたのは初めてだった。
「……正気を失っているのか元から天然なのか」
「てんねん？」
他人の家で突然寝る時間などと、生前の彼はどんな青年だったのだろうか。
「まだ寝るには早いですし、僕は死霊術師の端くれです。夜起きていることに苦痛を感じません」
「こども、よる、ねないと、おおきくなれない。せいちょうき、ねる、だいじ」
キルスは苦笑した。不死者とは、自分の事を訴え話を聞かない傾向がある。こういう時に大切なのは、必要な話以外は聞き流す事だ。全ての言葉を聞いていたら、こちらがおかしくなってしまうから。
「キルス様、宿は取っておられますか？」

執事に呼びかけられ、キルスは視線をそちらに向けた。
「ルグラス？」
ルフィアスが執事の名を呼んだ。
「残念ながら、開いている店が少なくて」
もちろん、最初から泊めてもらうつもりだった。立派な城があるのは知っていたからだ。
「やはりそうですか。赤い月が出ていますから、早仕舞いしたのでしょう」
田舎ほど迷信を信じる傾向がある。この街は周辺では一番大きな街だが、山勝ちな地方にしてはという意味で、人口はさほど多いわけではない。
「では部屋をご用意致しましょう」
「ルグラス……せめて私の了承を得てくれ」
「では、そちらの不死者を街にやるのですか？」
「用意するなとは言っていない」
「拗ねないでください。見た目の年齢的にも、拗ねて可愛い年頃は過ぎ去っておいでです」
「拗ねてなどいない。ただ……」
ルフィアスは怯えの色濃い眼差しをリザイアに向けた。
当のリザイアは、聖光水晶の影響でぽけっとしている。
「部屋を用意してもらわずとも、この部屋の片隅、あのなかなかいい雰囲気の長椅子を貸して

いただければ」
　キルスは部屋の片隅にある、使えないように上に物が置かれた長椅子を指さした。
「申し訳ございません。あれは呪われております」
「ああ、やっぱり！」
　ルグラスの言葉を聞いて、キルスは目を輝かせた。
　一目見た時から、その禍々しさに心惹かれたのだ。
「きるす、いわくつき、しゅうしゅうか。こうずか」
「……蒐集家？」
　ルフィアスが目を細めた。
「曰く付きは、大抵が骨董品だろう。こんな所に来るよりも、それを売った方が早いんじゃ？　死霊術師なら浄化も出来るんじゃないか？」
「きるす、じぶんのこれくしょん、うるのいや。おかね、じぶんでかせぐ。ここにきた」
「まさか、自分の蒐集物を売らないために、みかじめ料などと……」
　ルフィアスが肩を押さえてふるふると震えた。
「まさか。当家にある曰く付きは、手に負えないため譲渡された物か、そこらの露店で見つけた安物しかありません。浄化できなかった物だけが僕の手元に残っているのです。売って誰かが死んだらどうするのですか」

力を込めても消えぬ怨念。それでこそ曰く付きだ。

「もってるだけ、ひとをころしたくなる、ないふをながめて、にやにやしてた。ぶきみ」

「黙りなさい、リザイア」

ルフィアスの顔が引きつっている。キルスは小さく咳払いをして、話を続けた。

「力の強い曰く付きは一部では高値で取引されているので、売ればそれなりの金額になるでしょうが、一時しのぎにしかなりません。聖光水晶は安い物ではありませんからね。どのみちここには来ていました。僕の知る中で、最も聖光水晶と深い関係のある場所ですから」

ルフィアスは額に手を当ててしばし悩み、小さく息を吐いた。

「……まさか、定期的に来るつもりなのか？」

「そうですね。リザイアをこの肉体から引っぺがして成仏させるか、安定するまでです」

「安定？」

ルフィアスはぼけっとしているリザイアを見た。

「このまま力をつけて、より上位の不死者になれば吸血鬼ほどでなくとも、近いぐらいには安定します」

「そ、育てるのか？」

「最悪の場合です。今ここまで不安定なのは、不死者に成り立てでありながら、人を喰わずに聖光水晶で自分を痛めつけているためです。しかしこんな事でも続けていけば、いつか、少な

くとも本能のままに喰らわなくていいほどには、安定するでしょう。彼にはその資質がありま す」

リザイアは自分を見つめるルフィアスを見つめ返した。指をくわえて、まるで食料を見るよ うな眼差しであった。

「……危険が大きくないか」

「下手に対立する道を選べば、彼も本能的に抵抗してしまうでしょう。そうなると当家では手に負えません。彼はおそらく生前から優れた戦士だったのでしょう。恐ろしく強いので、きっと何人も死人が出ます」

「そんなに強いのか？」

薄汚れた鎧を着込んだ、薄汚れた男に疑いの目を向けるのは当然だろう。

「資金稼ぎのために賞金稼ぎのまねごとをしたら、僕が何をするまでもなく自分より大きい大百足の一家をざくざくと、傷一つなく」

ルフィアスが震えてリザイアを見つめた。

外皮が硬く、動きも素早い肉食系の魔物だ。一対一でも訓練を積んだ騎士が負けてもおかしくはない厄介な魔物なのに、補助するまでもなく片が付いたのを見た時は、空寒い物を感じた。彼ならきっと一人で竜も退治出来るのではないだろうかと考えてしまうほどだった。

「それに今のままでは、彼の正気でいられる時間は短すぎます。人の心を維持しようと努力す

る者に、人らしく考える時間を与えるのも、僕らの仕事です。幸い、ここにいれば生きた人間が被害を受けることはありません」

「私は非常食かっ!?」

信じられないと、ルフィアスはキルスを見た。

「僕は外道ですか。この城にある聖光水晶ですよ。聖光水晶の廃鉱山があるのですから、多少は蓄えもあるでしょう。あなたは吸血鬼なのですから」

「はいこうざん？」

リザイアが再び口を開いた。

「そうです。今でこそ葡萄畑に囲まれた街ですが、昔は聖光水晶の街でした。今は取り尽くして廃鉱になっていますが」

「いまはないのか」

リザイアはがっかりしたように肩を落とす。

「邪悪な不死者は聖光水晶を嫌がると言われています。邪悪でなくとも聖光水晶に触れば痛みを覚えますが、邪悪であればあるほど効きが良いというのは事実です」

「なのに、いえにいしある？　なんでだ？」

「元聖光水晶の街の主が、聖光水晶を全て排除するほど恐れるようでは人々が不安になります。だから、聖光水晶は手放していないはずです」

キルスが言うと、ルフィアスは顔を顰めた。
「どうして、分かるんだ」
「この業界の常識です。大祖父なら当然そう助言していたはずです」
キルスが言うと、ルフィアスは頷いた。
「自戒の意味と、万が一の時、生きている者達を助けるために、持っていろと」
「現在は共存して月日が流れています。聖光水晶を多少失ったところで、問題ないでしょう」
キルスがにやりと笑って見上げる傍ら、リザイアはチェストの上に飾られた石を指さした。
「これ、うまそう」
と、見栄えのいい飾りとして使われている聖光水晶を指さす。
「それは高級品なので食べてはなりません。それを売り払って、見栄えの悪い聖光水晶を買った方が数が増えます」
「こうきゅう……ぴりりとうまい……ちんみ？」
「お前はどこのゲテモノ喰いの食道楽ですか」
そう言ってから、キルスはため息をついた。
「聖光水晶を食べて、ぴりりですむのか？」
ルフィアスはリザイアの顔を穴が開きそうなほど凝視した。
「すんでいないから呆けているんです。まったく、いつになったらまともな状態で記憶を取り

戻してくれるやら。この調子だとご家族に連絡することも出来ません」
「家族……そうか。どこの誰かも分からないのか」
ルフィアスはリザイアに初めて同情的な目を向けた。
リザイアは新しい不死者だ。彼が戻ってこないのに家族が気付いて、探してくれれば見つけ出せる可能性もあるが、リザイアは旅装束で、しかも武装していた。流れの傭兵でもしていたのなら、気付かないかもしれないし、家族すらいないのかもしれない。
「きるす、はやくねる。はらへったか？」
「空腹ではありませんし、寝ろと言われても簡単には眠れません」
彼の唐突な発言にはもう慣れた。子供を相手にしていると思えばいいのだ。子供とは、唐突なものだから。
「風呂でも使うか。温まれば眠りやすいだろう」
「吸血鬼が風呂など使うのですか？」
皮脂など出ないし流水が苦手な吸血鬼もいるので、風呂に入るというのが想像出来なかった。
「うちには人間も住んでいるだろう。それに私は湯に入るのが生前から好きだった」
キルスは執事を見た。
「……人間なのですか」
「人間以外の何に見える」

「城に警備も、他の使用人も置いていないのですから、可能性はなきにしもあらず、と思うのが普通では？」

「警備がいないのは、必要がないからだ。侵入者がいればアウロザが知らせてくれるから、知っている者は玄関から以外は入らないし、吸血鬼がいるのに侵入してくるような他所者はいない。街の警備だけで十分だ」

確かに、噂だけ聞けばもっと強そうな吸血鬼だと思い込んでも不思議ではない。忍び込もうものなら、血祭りにされると思うだろう。

「当の吸血鬼が妙に威厳がないので、彼が何か面白い生き物であれば、もっと楽しかったのですが」

「ルグラスにこれ以上楽しくなられても困る」

主を主とも思わないような言動があったから、今でも十分楽しい老人なのだろう。

「では、僕が眠っている間はリザイアをよろしくお願いします」

「え？　わ、私に言っているのかっ!?」

まさか任されるとは思っていなかったのか、ルフィアスはうろたえた。

「念のために、首輪に鎖をつけておきましょう」

キルスは荷物の中から長い鎖を取り出し、首輪に繋げた。彼が身につけている物はほとんど生前から身につけていた物だが、この首輪だけはキルスが与えた物だ。

「い、犬ではあるまいし、なぜ首輪など……」
「子供のように無邪気なので、物を壊しかねません。いつも人が寝ている間に、勝手に動き回るんです。それで家の不死者達が怯えるので、仕方なく僕の蒐集物の中にあった首輪をつけました。よっぽどの事がない限りは、引っ張ればどこにも行けません」
「……最初から、この鎖で繋いでおけば良かったのでは？」
ルフィアスは肩を押さえながら言う。
「鎖を付けるのは、必要のある時だけと約束しましたから。それにここでは繋ぐ場所がないので、飢えている時に押さえつけるのは大変です」
「大変という事は、聖光水晶を用意する間ぐらいは押さえつけられたのでは？」
「僕はか弱い人間なので、必要のない時に命を懸けるのはちょっと……」
それを聞くと、彼は泣きそうな顔をして黙った。キルスが死んだら困るのは彼だ。
「きつく言ってありますが、何かに触れようとしたら叱ってやってください。この呪物は、まあそういった感じの趣味人の念がこもっていて、装着者は逆らう事が出来ないようです。本人が嫌がろうが、引っ張れば止まります。その後に何が悪いのか言ってやれば、不満は待ちません」
「そういった趣味とは……」
ルフィアスは怯えを含んだ声で尋ねた。

「聞かれましても僕には変質者がどのようにして首輪を曰く付きにしてしまったかなど、想像もつきません。他人を拘束する趣味はありませんから」
「確かにそうだが……変質者の物だと分かっていて持っているのか」
「曰く付きの持ち主の半数はそういったろくでなしです。気にしていては蒐集など出来ません」
大切なのはその念と効果だ。それはキルスの力とは相反する物で、それに触れる事によって得る物があるような気がするのだ。
「聖光水晶を食べたばかりなので、少なくとも一週間は襲われません。それだけは安心してください」
「い、一週間しか持たないのか。なんて燃費の悪い」
ルフィアスはリザイアの脅威の回復力を知って、やはり怯えた目をリザイアに向ける。彼はどうやら、見た目に反して臆病なようである。
「不死者として成長すれば、その燃費も良くなるはずです」
今の倍、いや四倍ぐらい燃費が良くなれば何とか養えるのだが。
「たくさん、ねるんだぞ。きるす、ちいさい」
「黙りなさい。それにまだ寝るには早いと言ったばかりでしょう」
未成年とはいえ、子供子供した年齢ではないのに、子供扱いを受けるのは不服だった。

それでもリザイアには悪気はなく、本心から思っている事なので、強くも叱れない。
だからキルスはふてくされるしかないのだ。

2章　吸血鬼の事情

ルフィアスはため息をついた。

小柄だと聞いて、ルフィアス目当ての女でも訪ねてきたかと思ったが、まさか死霊術師と呆け不死者だとは夢にも思わなかった。死霊術師は幼さの残る少年で、生意気だったが害はない。しかしこの謎の不死者は害しかない。ルフィアスは温厚だと人から言われるが、さすがに一口喰われて笑っていられるほど図太くはない。

ルグラスには安全な場所で休むように命じ、ルフィアスが一晩見張っていることになった。本当は嫌だったが、死霊術師のキルスは本当に呪われた椅子で寝てしまったから、ルフィアスが見張っているしかない。

あの少年を起こさぬよう、且つ自分の身を守れるよう、家具を破壊されないよう、別の部屋に移動した。

ここには物がほとんどなく、不死者の力が弱まる結界を張っている。我を忘れた邪悪な不死者であるほど結界は力を発揮するため、この中で苦痛を覚えないのは、害のない証明となる。聖光水晶（ブレス・クォーツ）を持っている理由と同じだ。いや、自分が無害であると、自分で知るために必要なの

だ。もしも結界が強く反応したら、自分がおかしくなっているのだと分かる。

リザイアという不死者も、この部屋に入って平然としている。つまりキルスが言ったのは、本当なのだ。

条件により豹変する不死者というのは珍しくないと聞いた。ルフィアスが知っているのは、同族を含む有名な不死者だけなので、自分の知識など当てにならないが、この部屋は信頼できる。

「はらへった」

リザイアは呆けた顔つきで呟き、自分の腕を噛り始めた。いや、袖に染み付いた血を啜っているのだ。

ぼさぼさの前髪の隙間から見える、虚ろな青い瞳。顔も服も薄汚れている。しかも血が付いているため、汚らしい。

血が付いている。ルフィアスの血、街の者達から徴収した血税だ。血の臭いに酔いそうになり、ルフィアスは立ち上がった。

「やめろ、品のない。お前にも湯を貸してやる」

「ゆ？　ふろ？」

「そうだ」

「いやだ」

リザイアは首を横に振った。
「その格好で私の城にいるつもりか。靴も汚らしいし、服も一式貸してやる。鎧も物はいいのに薄汚れているじゃないか」
革と金属が使われた鎧を身につけている。部位によってはかなりの硬化処理もしてあり、高い防御力と動きやすさを両立した実用的な良い物だ。腰に帯びた剣も良い物に見えた。キルスの言葉を信じるなら、生前は金に困らないような優れた戦士だったのだろう。
だからこそ、首についた首輪が痛ましい。そして、その鎖を持たされているのが怖かった。
「そのふくか？　うごきにくい」
光を通さない、もしもの時は顔を隠せる格好を見て、リザイアは首を横に振った。
「日の光も通すような普通の服もある。身を清めて着替えろ。その鎧も一度拭いた方がいい。せっかく良い物が台無しだ。拒否するなら、あの乙女が起きるまで城の外に繋いでおくぞ」
ルフィアスに出来るかどうかは別だが、こういった相手には強気で出なければ、いつまでも不利なままだ。
リザイアは自分の服を噛みながら、ルフィアスを睨んだ。
「くさったら、どうする」
「腐る？」
「そうだ」

本気で言っているらしいリザイアを見て、ルフィアスはため息をついた。
「聖光水晶を食べて平然としてるような奴が、たかが湯で腐るか。腐る不死者は力が足りなくて腐るんだ」
すると彼は首を傾げて考え込む。
「そうか。くさると、おもってた」
彼は自分の腕の臭いを嗅ぐ。
「自分で臭いのが分かるか？」
「わからない」
ルフィアスはため息をついて、立ち上がる。
「腐敗臭はしないが、臭い。死霊術師達は何も言わなかったのか？」
「いやがったら、あきらめた」
ルフィアスは立ち上がり、鎖を引っ張った。
「……ついてこい」
「やだぁ」
嫌だと言いながらも、リザイアは引っ張られるままについてきた。
「いいか。明日は血税を納めに乙女がこの城にやって来るんだ。浮浪者のように汚らしい姿を幼い乙女に見せる気か？　臭いと面と向かって言われるぞ」

「んんー」
わずかに嫌そうな顔をして、拒絶するのをやめた。女の子に汚いと思われるのは、彼でも嫌なようである。
脱衣所につくと、もたもたするリザイアから汚れた鎧を引っぺがそうと手を掛けた。
「やだー、へんたい」
「誰が変態だ。男がこれしきのことで騒ぐな。臭いままでいいのか？　乙女は臭いには容赦ないぞ」
「うー」
それ以降は特に抵抗もされなかったため、なんとか鎧と服を脱がす事が出来た。これでも長く生きているのだ。このような若造に舐められてはたまらない。そう、目上の威厳を見せなければならない。
男の裸など見たくはないので、情けで下着だけはそのまま、頭から湯を被せた。彼の自主性に任せていては、湯に浸かるだけ無駄だ。汚れを落とす気がなければ、汚れは落ちない。
髪に指を入れると、どろりとした。手を見ると、黒くなっている。
「どれだけ汚れてるんだ」
「さあ」
ルフィアスは呆れながらも何度も湯を被せ、汚れを落とす。すると、くすんだ灰色だった髪

は、見事な銀髪に変化した。黒ずんで荒れているように見えた顔も、汚れが落ちれば思ったよりもずっと綺麗な肌だった。

年の頃は二十歳ほど。顔つきは甘さがあるが、体つきは服を着ていた時の印象と違い、かなりしっかりした、しかし無駄を感じない実用的な筋肉がついている。

生きている頃は、さぞ女性にちやほやされただろう、なかなか見栄えの良い青年だ。

「キルス達はこれをそのままにしておいたのか」

薄汚れた頭のおかしい青年よりは、容姿の整った頭のおかしい青年の方が、いくらか凶悪さが薄れて見えるだろうに。

「きるすにも、いっかい、あらわれた。すこしだけ。ねことあそんだら、よごれた。ねこ、かわいい」

それで虚しくなって、見捨てられたのだろう。

ルフィアスも世話をするのは一度だけだ。本当に子供ならともかく、図体のでかい男などむさ苦しい。ただ、このように汚らしい存在が城内にいるのは耐えられないだけだ。

引き締まった背中を、ごしごしとこする。

「足は自分で……ん？」

リザイアの太股に、真新しい刺し傷のような物があるのに気付いた。血は出ていないが、治っていないということは、生前に出来て、治らないまま死んだのだろう。

「なんだ、この傷」
「おぼえてない」
「そうだろうな」
聞いて答えられるのは、空腹のあまり正気に戻った時だろうが、その時はルフィアスが喰われてしまう。
これ以外は特に外傷はなく、せいぜい目立たない古傷しかない。
このようになるのだから、死んだ状況などろくでもないに決まっている。普通の死なら不死者になどならない。どんなに力がある者でも、簡単には不死者にはならないのだ。
ルフィアスのように条件を満たすか、強い心残りがあるか、憤死するかしかない。
「とりあえず簡単に汚れは落とした。足を洗ったら、さらに洗ってもいいし、湯に浸かってもいい」
「でる」
「……今着替えを用意してくるから、私が戻るまでは湯につかっていろ。臭いが落ちていないかもしない。乙女は臭いに敏感だ。おじさん臭いとか言われたくなければ、黙って湯に浸かっていろ」
「おれ、わかい」
「子供から見ればお前ぐらいの年頃でもおじさん扱いされるんだ。今時の子供は、それはもう

口が悪い。格好いいお兄さんと言われたければ、黙って言うことをきけ」

「わかった。おれ、かっこいい、おにいさん」

正気を失っていてもおじさん扱いされるのは嫌なのか、リザイアは大人しくなった。

嚙られた恨みはあるが、ルフィアスだって不死者に成り立てだった時がある。

飢えに喘ぎ、それがどれほど辛いものかは理解している。今まで一度も人を襲った事がないのは、街の皆の親切と死霊術師のおかげだ。

だから、無碍にも出来ないのだ。

夜が明ける頃には、ルフィアスは喉の渇きを覚えていた。

いつもならこのようなことはないのだが、昨夜はリザイアのせいで血を流した。吸血鬼にとって血を流すことは、命そのものを流すということだ。

これを放置すれば、やがて強烈な飢餓となり、我を忘れて人を襲いたくなる。そうなったときリザイアのように堪えられるか、ルフィアスには自信がなかった。

幸いにもルフィアスは吸血鬼だ。血だけなら、人々はさして嫌悪感を抱くことなく差し出してくれる。血から力を得るというのは案外難しいものらしく、出来る不死者と出来ない不死者

がいる。リザイアはそれが苦手な不死者なのだろう。血を舐めていたから、まったく出来ないわけではないかもしれないが。

そのリザイアはよく眠っている。動き回ればそれだけ力を使うため、捕食が難しい者ほど、睡眠が多くなるのは当然だ。

この調子であれば、放置しても城内にいる人間を襲うことはないだろう。住み込みの使用人はルグラス一人で、通いの使用人達にも注意するようルグラスに伝えている。何も心配はないはずだ。

ルフィアスは立ち上がり、何かの足しになるか分からなかったが、鎖を柱に括り付けてから、キルスが寝ている応接室に向かった。曰く付きの長椅子で寝るなどという無謀なことをしたのだが、彼は果たして無事なのだろうか。

扱い慣れているようなので認めたが、一般人が同じ事をすれば命も危ないような、強力な怨念のこもった曰く付きだ。命に別状はなくとも、金縛りで動けなくなっているということもあり得る。曰く付きは呪物と違い無差別で、浄化する以外に御す方法がないのだ。しかし浄化してもらうにはかなりぼったくられる。だから誰も使わないように物を載せ、飾りにして放置していたのだ。まさか知って座りたがる者がいるとは思いもしなかった。

ルフィアスはキルスの無事を祈って、恐る恐る談話室を覗いた。

昔は続きの広間で晩餐会を催し、音楽や踊りを楽しみ、ここでくだらない会話をしたものだ。

両親がいて、ルグラスはまだ幼く、ルフィアスが人間だった頃だ。もちろん人付き合いがあるので、今でも晩餐会を催す事はあるが、音楽や踊りはなしだ。それで文句を言う者はいないし、それでも再びルフィアスに招かれたがる者ばかりで助かっている。

朝日が差し込む部屋の中、ぎりぎり日の当たらない場所で、少年は身を丸くして眠っていた。起こさないようにそろりと近づき様子を見ると、金縛りなどにはかかっていそうもない、健やかな寝顔をしていた。

昨夜見た時はいかにも生意気そうな顔だと思ったが、眠っていればまだあどけなさすら感じる、愛らしい少年だ。三つ編みにした赤い髪は床に垂れ、意志の強さを感じた琥珀色の瞳はまぶたで覆い隠されている。血色のいい唇はわずかに開いて白い歯が覗いている。命を感じる熱を持つ息吹は、とても穏やかだ。その吐息が唇からもれるたびに、汚れなき小さな身体が上下する。

寒くはないだろうかと、頬に触れる。表面は冷たいが、その皮膚の下に、生者の燃えるような血潮を感じる。吸血鬼になって以来、人間にとって当たり前のその温かさが、たまらなく恋しいものとなった。

触れた頬は、女がうらやむような白く滑らかな肌だった。夜に行動することが多そうなので、あまり日に焼けるような事をしないのだろう。

年の頃は、まだ十代半ばに届かないぐらいだろうか。起きていると話し方のせいで大人びて

見えたが、眠っている姿を見ると彼はリザイアが言うようにまだ子供だ。大人になりかけた、人生で最も輝かしい時代を生きている。彼の年頃から十年ほどが、人にとっては最も充実した時だ。

横向きに寝ていたキルスは身じろぎをして、器用にその場で上を向いた。椅子の下に腕がだらりと落ち、身体を包んでいた毛布がはだける。

「んんっ……」

キルスが小さく呻き、起こしてしまっただろうかと様子を見る。しかし、再びすやすやと、寝息がもれて胸が上下し始めた。

生命の息吹がもれるたび、あらわになった白い喉も上下する。まだのど仏も目立っていない、柔らかそうな喉。だからこそ、吸血鬼達はこういった少年達を乙女と呼ぶ。

汚れなき喉元こそ、彼らは欲情を駆り立てられる。

喉が渇いた。

子供と言っても、この年頃なら結婚して子供がいてもおかしくはない。

子供と大人の境目にいる。

（少しぐらいならいいか）

いくら恩のある一族とはいえ、ルフィアスも肩を噛られたのだ。リザイアの主である少年に、首筋を差し出してもらっても罰は当たるまい。

人間にとっても、多少の酩酊感を覚えるだけだ。男なら血を流す機会も少なく、血を抜いてもさほど影響は少ない、

起こさないよう、そろりと傍らに膝をつき、その白い首筋に唇を寄せた。

「あっ、危ないっ！」

背後で、少女の声が響いた。

その直後、振り返ろうとしたルフィアスの頭に、鈍器が振り下ろされた。

「ぐあっ」

頭を抱えて蹲ると、ルフィアスの傍らに鈍器を持つ少女が立った。鈍器からは、銀が交じった衝撃を感じた。不死者は総じて金属の武器が得意ではないのだが、その中でも銀が苦手なのは常識として世間に浸透している。

「領主様、強姦はいけません！　畜生にも劣ります！　鬼畜のすることです！」

まだあどけない声が、とんでもない事を口にし、ルフィアスは狼狽した。

見上げると、可愛らしい少女が銀の交じった小さな金槌を握りしめて立っていた。

「ちょ、どこでそんな言葉を覚えたんだ!?　しかもどうしてそんな銀製の鈍器を持ち歩いているんだ!?」

「もちろん自衛のためにって、ルグラスおじいちゃんがくれたんです！」

「る、ルグラスの奴……っ」

孫娘が可愛いのは理解出来るが、何も凶器を買い与えなくても良いだろうにと、ここにはいない執事を怒鳴りつけてやりたかった。

「わ、私はこっそり血が吸おうとした、それ以上でもそれ以下でもない！　これは乙女だが少年だぞ！」

確かに髪は長いし、小柄だから遠目には性別が分からないほどだった。服を着ていると体つきも分かりにくい。顔も可愛らしいから、寝ているとさらに分かりにくい。

誤解を受けても仕方のない状況だと気づいて、愕然とした。

しかしその直後、ルフィアスはさらに衝撃を受ける言葉を聞いた。

「君、逃げて！　領主様の毒牙にかからないうちに！　領主様はこの辺りでは有名な男色家なのよ！」

「はっ!?」

ルフィアスとキルスの声が重なった。

「これは、現実……？　夢ではない？　女にひどい目に遭わされたからと、まさかそのような趣味が……」

目の前で騒がれ、目覚めたばかりのキルスは、困惑した様子で身を庇うようにマントをかき合わせ、長椅子から下りて日の光の届く窓辺に立った。

「そんな訳がないだろう！　私は今も女性が好きだ！」

「火のない所に煙が立つと言うのですか」
「立ってるのだから仕方がないだろう！　なぜそんな根も葉もない噂をこんな幼い乙女が信じているのか、私にもさっぱり分からない！」
そろそろ年頃と言っていい年齢だが、やはりまだまだ幼い少女だ。それが、男色家などと口にするなど、気が遠のいた。
「おれ、むりやり、ぬがされた」
いつの間にか少女の後ろにいたリザイアが、追い打ちを掛ける。鎖は腕に巻き付けており、動くなという意志表示は、まったく通じていなかった。
乙女達の視線は、鋭さが増した。
「それはあまりにも汚らしかったからだ！　私は乙女のような肌触りの少年の血や歯ごたえは好きだが、別に男が好きなわけではない！」
キルスは自分の首筋を庇った。
「血が欲しければ、そう言えばいいではありませんか」
「そうです！　せっかく早めに血をお持ちしたのに、他所から来た男の子に噛みつこうとするなんて、信じられません！　不潔です！」
少女は長い髪を振り乱してルフィアスを罵った。
「そういえば、ラキア、ずいぶんと早いがどうしたんだ？」

「だから、男の子が心配だから、早めに来たんです。男の子が城に向かって戻ってこないから、心配だって宿屋のおばさんが言うから、まさかと思ったら案の定！」
そう言って彼女は籠を差し出した。
「何ですか、それは」
キルスが籠を見て問う。
「街に住む十六歳以下の未婚の乙女から集めた血だ」
「集めた？　彼女の血を吸うのではなく？」
「こんな幼い乙女を噛めというのか？」
キルスはしばし沈黙し、頷いた。
「確かに吸血行為は稀に中毒になります。分別のつかない若い娘は噛まない方がいいでしょう。徴収するなら、一度きりとはいきませんからね」
彼は身体に巻き付けていた毛布と、いかにも死霊術師らしい黒いマントを長椅子に置いた。
内に着ていたローブとゴテゴテと身につけていた呪物などの装飾品を全て外して寝ていたらしく、今はシャツとズボンだけだった。そのため、身に纏っていた死霊術師らしい怪しさは綺麗に消え去り、それどころか差し込む朝日を浴びて光り輝いて見えた。
「ちょっと、ルフィアス様、どこの使徒様を誘拐してきたんですか!?」
「なぜそうなる!?」

「この光輝く神聖な気配、光の使徒様に決まってるじゃないですかっ！」

言われて見れば、日の光の下にいる彼は神聖とも言える魔力を放っていた。どこぞの神の加護を受けた使徒は、確かにこんな雰囲気を放っていた。あまりに美味しそうで、誘われるようにふらふらと喉元に噛みつこうとしたのは、これのせいだったのだ。

使徒扱いされたキルスは不服そうに腕を組んだ。

「ああ、そうだった」

彼は畳んで置いてあったローブの上に載った指輪を右の薬指にはめた。すると今まで放たれていた神聖な気配が、ほとんど消えてしまった。そして次々と、耳に、腕に指に首にと、装身具を身につけていく。さらには袖に隠れてしまう二の腕や、ローブの飾りにしかなっていないベルトも身につける。

全て身につけてしまうと、神聖な少年から、いかにも妖しい少年に化けてしまい、ラキアは目を丸くした。

「きるす、しとってなんだっけ？　きいたこと、あるきがする」

またリザイアがキルスに尋ねた。キルスは彼の首元に手を伸ばし、長い鎖を外してやりながら答えた。

「神の加護を受けた者を使徒と言います。僕にとっては忌々しい蔑称です」

使徒が蔑称などという考え方は、長く存在しているルフィアスでも生まれて初めて聞いた。

「だから、ゆびわしてるのか」
「そうです。この指輪は呪物ではありませんが、とても強い曰く付きで、僕の一番のお気に入りです」
キルスは外した鎖を持つ手の指輪を見ながら言う。
「どうして？」
「神封じの指輪と言われている呪いの指輪で、僕の力すら封じます。この指輪の力を知ってから、僕は曰く付きに興味を持ったのです」
「どうして？」
「もちろん、僕の力を削いでくれるからです。囲まれていると、自分が無力になったようで心地がよいのです。いつか僕の力そのものを消してくれるんじゃないかと、期待してしまいます。もちろん曰く付きの魅力はそれだけではありません。無差別に人を巻き込もうとする力強さにも惹かれます」
「のろいのゆびわなのに、はずせるのか？」
「外せなくなる者もいるようです。どうせなら外せなくなってくれればいいのですが」
二人の会話を聞き、ルフィアスは額に手を当てた。
どうやら心の底から使徒である事が嫌で、使徒の力すら封じてくれる曰く付きが好きになったようだ。

使徒の力を持つのは信心深い者達にとっては憧れなはずだから、毛嫌いする人間がいるとは思いもしなかった。

「……あっ、のろいのいす、のろいとけてる」

リザイアはキルスが横になっていた長椅子を見て声を上げた。確かに昨日はあった不気味さは綺麗に失せて、普通の家具になっていた。

「寝るだけで浄化できるなんてすごい！」

ラキアがきらきらと瞳を輝かせて感嘆の声を上げた。

「思ったよりも大した事がなかったようです。まったく、根性のない曰く付きです。僕を祟り殺してみる気概もないのですか」

「こんじょうのもんだい？」

「そうです。我が家の曰く付きはこの程度では浄化されません。もっと根性があると思ったのに、見込み違いでした」

「きびしい、ひょうかだな」

曰く付きに根性がないというのもおかしな話だが、それ以上に二人の暢気だが明らかにおかしい会話に目眩を覚えた。

「キルス、お前、それで死霊術師などできるのか？」

鎖を荷物の中に仕舞うキルスに、思わず問い掛けた。これは彼等に保証されているルフィア

スにとって、とても重要な事だ。
天性の力を自分から封じているし、光の使徒では死霊術と相性が良いようには思えなかった。
「えっ!?　死霊術師っ!?」
ルフィアスの問いを聞いて、ラキアは驚いてキルスを見た。
「確かに格好はそれっぽいけど……」
ただ一晩寝ただけで、人をじわじわと弱らせていく呪いの椅子を浄化するような死霊術師など聞いた事もないし、もちろん誰も想像した事すらないだろう。
「失礼な。僕は死霊術師です。多少、一族のような死霊術は苦手ですが、この杖も使いこなせます」
「きるす、それつかいこなす、ちがう」
「黙りなさい」
「きるすは、かたちだけ、しりょーじゅつし、だな」
「せめて形から入ると言いなさい」
「かたちだけ、いみある？」
「形からでも夜の女神の加護に入っていなければ、僕はお前を問答無用で浄化する一派に与していたでしょう」
「おお、すごく、それっぽい」

自分の事なのに、まったく意に介さずに笑みを浮かべるリザイア。

「不死者とは心残りがあって現世に残る者が大半です。理想の送り方は、不死者本人の意志で輪廻（りんね）に戻ることです。浄化というのは、魂が疲弊したり、時に消滅してしまう強引で非道徳的な、大変野蛮な手段です。曰く付きに魂はないので問題ないですが、不死者に対して浄化を行うなど、僕には苦痛でしかありません。だからこそ僕はこの力を封じて、曰く付きで力を暴走させないようにしているのです」

「ほぉ、そーなのか。きるすはえらいなぁ」

そう言って、リザイアはキルスの頭を撫（な）でた。

子供に説明するように話していたキルスに、説明を受けていた本人がキルスを子供扱いして頭を撫でる。きっと生前はこのように子供に接していたのだろう。

無害であろうとするリザイアは確かに高潔だ。ルフィアスも不死者だからこそ、強くそう感じる。

頭の痛い会話だが、キルスの言いたい事も多少は理解出来た。正しい死霊術師が、死者の魂を傷つけるなど、そうしなくていい可能性があるのに出来るはずがない。

「まったく、真剣に聞きなさい。誰のせいで苦労していると思っているのですか」

キルスはため息をついた。聖光水晶（プレス・クォーツ）を喰らってこれほどしっかりした自我があるだけすごい事なのだが、あの男を見ていると気が抜けてしまうようで、撫でられるままになっている。

ルフィアは二人から目を離し、早朝から来てくれたラキアに視線を向けた。街の子は全てルフィアスの顔見知りだが、ルグラスの孫娘であるこの乙女は、ルフィアスにとっても特別だ。
この城に、もっとも頻繁に遊びに来てくれる子供なのだ。
「それよりもラキア、私は昨夜血を失って貧血気味なんだ。今日は誰の血だい？」
「ああ、はい。今日の血はパン屋の双子です。今日が初めてですよ。今朝採れたてです」
「ああ、あの二人はもうそんな年頃か」
この前まで赤ん坊だった子供達が、血を差し出すほどの年齢になったのだ。子供の成長は実に早い。
「ところで、おじいちゃんは？」
ラキアはバスケットを差し出しながら尋ねた。
「ルグラスは朝食の準備をしているだろう」
ルフィアスは念のために籠の中から瓶を取り出して確認する。美味しそうな血で満たされている。
「女の子が目の前に来てくれたのに、本当に噛まないのですね」
キルスは靴をはき直しながら、呆れ顔で言った。
「おとこのきるすかむ、おんなのこかまない。あやしー」
正気をなくしているはずのリザイアが、不必要なところで揶揄を口にした。この口が減って

くれればもっと同情的になれるのだが。

「……って、火元はこれかっ！」

ルフィアスは気付いて頭を抱えた。

「ち、違うんだ。私は君のように幼い女の子を噛むわけにはいかないから噛まないのであって、他所者の男なら噛んでも後悔しないから噛むんだ！　決して男が好きなわけではない！　だいたい、いつも誰かに邪魔されるんだぞ！」

ルフィアスは取り乱してラキアに弁解した。ラキアは胡散臭そうにルフィアスを見上げる。まだ疑われているのが分かり、泣きたい気持ちになった。

「旦那様、落ち着いてください」

執事の声が聞こえ、ルフィアスは振り返った。

「ラキア、旦那様が女性を噛まないのには深い訳があるんだよ。旦那様は見ての通り見た目だけなら一級品だろう。この人外の美貌とまで言われるようになった旦那様と、火遊びをしたい女性が群がってきたんだ。吸血鬼にされたばかりで女性が苦手になっていた旦那様は、ついには女性に恐怖を覚えるようになったんだよ」

「うん、そんな事みんな知ってるよ」

ラキアは祖父の弁解を聞くと、当たり前だとばかりに頷いた。

人の心の傷が街中に知れ渡っているという事実は、ルフィアスの胸をちくちくと刺した。

「そうか。ならばもう少し詳しく話さねばならないな。旦那様は最初の頃は火遊びなどしたこともない乙女なら普通に接することが出来たし、そんな乙女達の喉から血を分けてもらっていたんだよ」

「そうなの？」

ルフィアスは短い葛藤の後、目を逸らしてルグラスをそのままにした。人に聞かせたくはないが、男色疑惑がそのままになるのはもっと嫌だったのだ。

「吸血鬼の吸血は、血を吸われる者が恐怖を覚えないように、痛みもなく、むしろ気持ちがいいぐらいなんだよ。旦那様の外見で優しく言葉をかけられ、気遣われながら血を吸われるとね、どうにかなってしまう乙女が出てきてしまったんだよ。子供でも女は女。分かるね？」

ラキアははっとして、目を見開いた。

「まさか、お、襲いかかったの？」

ルフィアスは手で顔を覆った。ラキアのようにまだ胸の膨らみもない乙女でも、そのような発想が出てくるのだ。

「旦那様は吸血鬼のくせに乙女のようにか弱いからね、乙女にも押し倒されてしまうほどのヘタレなんだ」

追い打ちをかけてくる執事を睨み付けた。

そんな言い方をしたら、また変な噂をされてしまう。男色疑惑よりは、はるかにいいが。

「それで、どうなったの？」
「旦那様の悲鳴を聞いて、私が助けに行っていたよ。まだ年頃だった私は、当時憧れていた街で一番綺麗な女の子がそんなことをして、それはもう深く傷ついたものだよ」
「それで、ルフィアス様は女の子を噛まなくなったのね」
「そして徐々に怯えない許容範囲が狭まってしまってね。平気だったのは旦那様を男だと思っていなかったお前のばあさんぐらいだったよ。お前もあいつに似ているから、ひょっとしたら大人になっても怯えられないかもしれないな。これからもどんどん殴り倒してあげなさい。旦那様のために」
「うん、分かった」
主を主とも思わないこの一族は、ルフィアスにとって心の支えで救いなのだが、たまに複雑な気分になる。
「ところでルフィアス、僕は喉が渇きました」
靴紐を結び終えたキルスは、立ち上がってルフィアスに向かって言った。
「そ、そうだな。ルグラス、朝食を……ん？」
今、呼び捨てにされたような気がした。昨夜は確かに『卿』と呼んでいたはずだ。
「ん？　そういえばリザイア、綺麗になっているじゃないですか」
「るふぃあすに、ゆで、あらわれた。ゆでも、くさらないって」

「湯でお前をどうにか出来るなら、弱らせるために誰かがとっくに試しています」
「あ、そーか。ふくも、るふぃあす、かしてくれた」
清潔な白いシャツを着る彼は、黙って立っていれば眠たげな好青年にも見えるため、その残念な話し方に、ラキアが不思議そうに見つめていた。
「ルフィアス、ありがとうございます。僕が洗おうとしても嫌がって」
再び、呼び捨てにされた。しかしルフィアスを卿などと言うような者はこの街にはいないので、気にはならない。もちろん呼び捨てにする者はいないが、死霊術師は死者と対等に話すため、死霊術師が来るたびにそのような事を気にしていてはきりがないだろう。
ただ、呼び方が変わったのが、少し気になるだけだ。
不審に思いながらも、ルフィアスはそれを顔に出さないようにしながら続けた。
「服はルグラスに洗濯させるが、鎧は自分達で拭け。せっかく良い物なのに勿体ないぞ」
「ありがとうございます。しかし、よく脱がせましたね。思い入れがあるのか、なかなか脱ごうとしなくて」
ルフィアスはそれを聞いて思わず苦笑した。
「乙女に臭いと言われたくなければ綺麗にしろと言ったら言うことを聞いたぞ」
「……僕に汚い男と思われるのは平気なくせに」
「おれ、わかい。おじさん、いや」

「おじさん呼ばわりされていたんですかね」
「わからない。けど、いや。おれ、おにいさん」
「はいはい。だったら僕の事を子供扱いするのはやめなさい」
「なんで？」
キルスは肩を落とした。
自分の主張は出来ても、他人の主張を受け入れることは出来ないらしい。

直射日光の入らない、昼間から煌々と明かりをつけた食堂で朝食を取りながら、キルスは食堂の中を観察した。テーブルは一つしかないが、部屋の広さから昔はかなりの客人を招いて晩餐会でもしたのだろう。
今でこそワイン造りが主要な土地だが、かつては聖光水晶の産地であっただけあり、値の張りそうな骨董の調度品ばかりだ。陶器や銀食器もキルスが知っている老舗の名が刻んである。
もちろんエルヴァン家にはこんな高級品はない。魔除けにもなるので銀食器は使うが、地元の職人が作った物だ。
食堂に飾られている絵画も、壁や柱などの随所にある細かな装飾も、使い込まれた滑らかで

艶のある家具も、かつての栄華を思わせる。家具の素材と彫刻で、おおよその年代も予想がつく。

キルスは頭の中で金銭勘定をしているのに気付き、首を横に振った。

古い物に対して、失礼な発想だ。骨董には力が宿る。曰く付きのような悪い力もあるが、ささやかな幸せを呼び込んでくれたり、心を落ち着かせてくれる物も多くある。そのような立派な道具に向けていい目ではない。

古い物ばかりのこの城は、キルスにとってとても居心地が良かった。

成金ではなく、ルフィアスのように見栄えや立ち居振る舞いが最上級の男が所有しているのも好ましい。良い物を良い物だと自慢するだけで日用品なのに日用で使わないような、または財力を見せびらかせるために粗末にするような成金は最悪だ。そういう者ほど、こういった力のある骨董を所有したがる。

骨董品を所有するには、それを普通の物として使える上品さも必要なのに、それを理解していないから最悪だ。

カップの持ち方一つ、置き方一つも品性を問われるというのに。

「しかし、貴族の城としてはとても好みなのですが、吸血鬼が住んでいると思うと、没個性的ですね」

古くて立派という意外に特徴がない。

「没個性的って、一体どんな城なら満足したんだ？　蝙蝠でも飼っていろという事か？」
もらった血を全て飲みきり、それでも物足りないとばかりに朝からワインを飲んでいるルフィアスが、眉根を寄せて言う。
「そうですねぇ……例えば、死した領民達を忘れぬよう、彼らの骨で作った思い出の玉座があったり」
「いやいやいや」
ルフィアスはワイングラス片手に首を横に振った。
「例えば、お気に入りの領民をいつでも愛でられるよう作った、貴石で飾られた髑髏の杯があったり」
「それはただ単に悪趣味なだけだろう！」
ルフィアスはごく普通の美しいワイングラスを掲げながら喚いた。
「例えば本性を見せると化け物に変わる執事とか」
「執事を何だと思ってるんだ!?　面白いってそういう方向なのか!?　もうそれは執事でもインテリアでもないぞっ！」
「狼男とかでもなかなか面白いかと」
「言っておくが、ルグラスは正真正銘人間だぞ」
「それは昨日聞きました」

そのルグラスは共に食卓を囲んでおり、ラキアが持ってきた焼きたてのパンと、飴色に炒めたタマネギとベーコンのスープを堪能している。

彼らは家族のような付き合い方をしている主と使用人だ。ルフィアスが人間だった頃からの長い付き合いなのだろう。

「きるす、あくしゅみ」

腹の足しにならないかともらった、生の魚を食べながらリザイアは言う。

人間相手なら生の淡水魚を喰わせるなど正気の沙汰ではないから、ルグラスは不死者の扱いに慣れているようだ。

「意図して呪物を作る時は、そのようにして作るのです。生前大切にしていた物や、骨や髪を使うと呪物になりやすくなります。呪物は生物の残滓と生者の思い入れで出来ることが多いのです。術師が気に入りの装飾品を身につけ続けるのもそのためです。生涯をかけて呪物化させます。そうやって大切に作った呪物は自分の分身。このアウロザのように、自分の意志が宿ります。きっとこの城を愛していたのでしょう。自分の分身がその城を守り続けてくれているなど、羨ましい話ではありませんか。分け隔てなく作用する曰く付きのような強烈さはありませんが、そういった思い入れで出来上がり使い手を選ぶ呪物も、気品を感じられて素晴らしいと思います」

「そうだなぁ。それはなんか、いいな」

リザイアも自分が大切にしていた物に自分の一部、自分の感情が宿り、使われ続けることの素晴らしさを理解してくれたらしい。

「僕の持つこの杖は、多くの先祖達の骨を寄せ集めて出来ています。死して子孫のために力と意志を残すのです。僕も上手く死体が残れば、何らかの道具にしてもらえるはずです。そしてあの土地に置かれたり、使われるうちに呪物化します。僕の魔力は強いですから、強い呪物になるでしょう」

ルフィアスがグラスを置いて、口元を押さえた。ちらりちらりと、キルスの身につけている呪物に視線を向けている。

「不死者が死体を恐れるとは片腹痛い。その様子では、呪物を作るのはとても無理ですね」

「じゅ、呪物は普通の装身具が多いはずだぞ」

「初めから呪物化を狙い、生きている内に体内に装身具を埋め込んでおくというのは、どこの国でも、どんな流派でも、日常的に行われています。僕としてはそこまでするのは不自然であまり好きではありませんが。やはり愛情を込めて自然に呪物化した物の方が価値がある思うのです」

術師とは無縁の生活を送っている二人は驚いたようにキルスを見た。

「僕のように力が強いと身につけているだけで呪物化してしまうのですが」

キルスはじゃらじゃらと身につけた装身具に視線を落とす。

「それは呪物や曰く付きではなく、呪物にするために身につけているのか？」
「全てではありませんがね。本当は嫌なのですが、僕の力を削いでくれるし、これからはこれを利用してリザイアの食費にする事も考えないといけません。しかし聖光水晶一つで長くても一週間で限界が来るので、とても追いつきません。まともな所から買う聖光水晶は高すぎます！」
聖光水晶は高い。見た目も宝石然としているし、その上、はっきりと分かる魔除けの効果があるのだ。だからこそこの城も、調度品も立派なのだ。
「はぁ……」
ため息をついたのはキルスではなくルフィアスだった。過去の栄光を思い出しているのだろうか。
「旦那様、客人と話している時にため息をつくのは失礼でしょう。いくら嫌なことを思い出す話題とはいえ」
「嫌なこと？」
「旦那様の婚約者は、聖光水晶の枯渇を知って別の裕福な男に乗り換えたのです。清純そうな顔をして、恐ろしく酷薄な女性でした。確かに聖光水晶のない旦那様などただの顔がいいだけの軟弱者。しかし先代が始めたワイン造りを軌道に乗せたのも旦那様です」
ルフィアスはルグラスを涙目で睨み付けた。落とした後に持ち上げたためか、睨むだけで何

も言わなかった。おかしな主従だ。

「そんな折りに現れたのがあの憎き女吸血鬼です。聖光水晶が枯渇したと知って、当時からこの美貌で噂になっていた旦那様を見に来て一目惚れをしたそうです。旦那様はお顔立ちに恵まれた分、女運の悪さで帳尻を合わされているのでしょう。ああ、お可哀想な旦那様！」

ルグラスは熱弁を振るいながら、ぐっと拳を握りしめた。

「かの女吸血鬼の極悪ぶりと言ったら、それはすさまじいものでした。奴は気に入った美男子を吸血鬼にして、飽きれば磔にし、日の下に晒して灰にし、しかもその様を笑いながら眺めているという鬼畜でした」

噂には聞いていたが、恐ろしい吸血鬼だ。そういう吸血鬼がいるから、無害な不死者まで狩られるようになる。不死者は死んでいるから、それを滅しても法に触れることはない。

だから財宝を持っている不死者は、その財宝目当てに狙われるのだ。そしてそれを退治すれば、不死者を非道な吸血鬼であったと貶め、狩人は英雄となる。

人々に愛されているルフィアスは、その意味では恵まれた不死者だ。

執事の孫とはいえ、女の子が気軽に城に訪ねてきてくれるのだから。

「そこまでするとは珍しい。普通は退治されるのを恐れて、隠れ住むものですが」

「あの時は街の若い男達が何人も人質に取られ、残る住民は手を出すことも出来ず、使い魔に見張られて助けを呼ぶことも出来ませんでした。異様な気配を察してやって来た僧侶の一団も、

返り討ちにされて若い者以外は全て使い魔の獣の餌とされました」

キルスはルフィアスを見た。彼はきっと、一番のお気に入りだっただろう。残虐な行いを間近で見せられたから、キルスの杖にも怯えたのだ。

「かの女吸血鬼は力が強く、衣服で直射日光さえ防げば昼間でも外を歩くような化け物でした。か弱き旦那様も、その特性を受け継いでおります」

吸血鬼の城にしては日光に対する備えが半端だと思っていたが、理由があったようだ。

「ルフィアス以外の吸血鬼はどうなったのですか？」

「お気に入りの旦那様がおりましたので、灰にされたのは元々飼われていた吸血鬼がほとんどでした。あまり吸血鬼にしては、餌がいなくなりますので」

つまり吸血鬼にされた者は、ルフィアス以外は残っていない。そしてこの地から犠牲者は出ていないわけではない。

「当時、若くなかなかの美少年であった私も危ういところでしたが、私が吸血鬼にされかけたときにドヘタレの旦那様が立ち上がり、無駄に整ったその顔を初めて有効活用して吸血鬼を退治したのです」

「どうやって？」

生魚の頭を噛んで遊んでいたリザイアは、首を傾げて尋ねた。

「聖光水晶が枯渇しかけていただけで、聖光水晶は売るほどにはありましたから」

「物量頼りですか」

それでも危険だっただろう。吸血鬼というのは、親が絶対だ。親吸血鬼に逆らうのは苦痛を伴う。その代わり親を喰らえば親の力を得る。

ルフィアスを見る限り、そのようなことはしていないようだ。執事にヘタレだの軟弱だのと言われる彼が、親の力を喰うなどという恐ろしい事は出来なかったのだろう。

「旦那様はこの地の英雄なのです。吸血鬼でありながら聖光水晶を恐れる事はなく、適切な距離を置いて、お守りとしているのです。ですから、あまり旦那様を虐めないで差し上げてください」

「なるほど」

長々と語ったのは、その結論にたどり着くためか。

英雄と言って持ち上げつつ、堂々とヘタレと言って落としていたが。

「聖光水晶でしたら、街にはまだ複数所有している者がいくらかおります」

「複数？　売らなかったのですか？」

聖光水晶は高価な物だ。一般家庭ならあまり使い道がないので、売ってしまった方がいいと思うだろう。聖光水晶が出た頃に比べれば、生活水準はかなり落ちているはずだからだ。

「当時は売り物にしていなかった、品質の悪い物です。聖光水晶は澄んでいればいるほどいいと言われておりますので、ヒビが入っていたり濁っている物は売れず、当時はお守り代わりに

していたのです。市場に出ている綺麗な聖光水晶よりは、安く譲ってもらえるでしょう」
「なるほど。その手がありましたか」
ルフィアスは持っているだろうと思っていたが、街の者も持っているのであれば、もう聖光水晶を値切る日々を終わらせられるのだ。
「お守りとして置いているので、お守りになるような物と交換するというのはいかがでしょうか。先ほどの話を聞く限り、キルス様はそのために装身具を呪物になさっているのでしょう」
キルスは身につけた装身具を見た。既に呪物になっている物もある。
「確かに、身につけているだけで身の守りになります」
「さすがは寝るだけで呪いを浄化するほどの使徒様です」
「僕をそれ以上その蔑称で呼ぶなら、あなたの主にこの憤りをぶつけますが」
ルグラスはわずかに目を見開き、顎に手を当てた。
「……ふむ」
「何が『ふむ』なんだ!?　お前は主を虐めて楽しいか!?」
今の間と反応をどう取ったのか、ルフィアスは大げさな反応をした。
「まさか。私は命の恩人である旦那様に、誠心誠意お仕えしております」
化け物ではないが、やはり愉快な使用人のようである。
キルスは苦笑しながら、テーブルに立てかけてあった杖を手にした。



「では、案内していただけますか」
「ええ、もちろんでございます。聖光水晶については、どこに何があるかは、旦那様がよくご存じでいらっしゃいます」
ルフィアスはちらりと執事を見て、諦めたようにため息をついた。
「夕方なら」
「では、御夕食も外で取られてはいかがですか。食べ盛りの少年には、爺の作る料理よりも、クラインの作る料理の方が良いでしょう」
「自分では作りたくないだけだろう。まあ、構わないが。私はこれから眠るから、あまり騒がしくしないでくれ。今日は疲れた」
そう言うと、ルフィアスは部屋を出て行った。

ルフィアスの城は小高い丘の上にあり、夕日を浴びて赤く染まって美しかった。
昼間はリザイアの鎧を磨き終えると、城内を探索させてもらったのだが、こうして外から見るとまた違う感動がある。
ここは都などの要所からは離れている山勝ちな地方だが、聖光水晶を産出していたおかげで

立派な街道があり、交通の便は悪くない。そのため暖かい時季は観光地としても人気があるらしい。確かにこの立派な城と澄んだ川は見応えがある。見晴らしの良い城から見た街並みも綺麗だった。しかも城に住んでいるのは伝説にまでなった美貌の吸血鬼だ。他にはなかなかない、胸が弾む観光地である。

「昼間の城も眺めたいところですね」

「まっか。きるすの、かみみたい」

リザイアの台詞を聞いて、鎧を着た彼の腰にしがみついているキルスは苦笑した。

キルスは借りた馬にリザイアと二人で乗り、ルフィアスに案内をしてもらい街まで下りてきたのだ。

二頭しかいないのでリザイアに手綱を任せていたから、ここまで下りてくるのはずいぶんと楽だった。乗馬が出来ないわけではないが坂道を下るのには不安があった。リザイアは身体が覚えているのか、馬上から弓で鳥を射落とせるような腕前なので、馬にとってもそのほうが幸せだろう。

リザイアも鎧を身につけて上機嫌だ。鎧は部位によって違う手入れ材を使い、使い込まれた革の美しさを取り戻している。特殊な加工をした革製品用の手入れ材も揃っていて助かった。

繁華街までやって来ると、人通りが増えてきたので馬から降りた。

繁華街は日暮れも近いため活気づいている。来る時にも通ったはずだが、昨日は日も暮れて

店が閉じていたので印象がずいぶんと違う。
白い壁と赤い屋根の家が立ち並ぶ、歴史を感じる美しい街並みだ。売られているのは干物と日持ちするような果物が多く、川魚なども売っている。焼いた肉に香ばしいタレを絡めた串物は、キルスの胃袋を刺激した。
「ルフィアス様、こんにちは～」
「ああ、こんにちは」
キルスが観光気分でいた時、ルフィアスは買い物をしていた少女に声をかけられて、親しげに声を返した。
「結婚が決まったそうだね。おめでとう」
「ルフィアス様がもらってくれれば一番嬉しかったんだけどな」
「はは、昔から彼を好いていたくせによく言う。本当におめでとう」
ルフィアスは結婚するらしい少女に向かい、口元を覆っていた布を下げて、フードを被ったまま笑みを向けた。唇だけしか見えないが、それが彼の妖しさをいっそう際立たせている。
「旦那、今日はどうしたんですか。何か足りませんでしたか」
「今日は道案内だよ。古い友人のひ孫さんなんだ」
少女が買い物をしていた食料品店の青年に声をかけられ、ルフィアスは被っていたフードをわずかに持ち上げて答えた。

相手が男だと顔も見せるようだ。

ルフィアスは本当に日光を恐れない。フードがめくれないように飾りのような重りが付いているが、それはつまり、日が沈む前にもよく街に下りてくる事を意味している。

「……可愛い男の子ですね」

「言っておくが、血はともかく、男には興味ないぞ」

「そうなんすか？」

「当たり前だ。ただ、女性の前に立つと頭が真っ白になってしまうだけだ。だが知り合いの女性なら、接触しない限りは平気だぞ。変な噂は否定しておくように」

「女達が残念がりますよ」

「なぜだっ!?」

否定して残念がられる理由が、キルスにも分からなかった。

「怯えられるなら、男に興味があってくれた方がいいって事じゃないですかね。女どもの自尊心？」

「よく分からんが、どんな美女でも無理だぞ。むしろ美女の方が怖い。自分に自信満々で肉食獣のような目をした女性は、目の前に立つだけで身体が震えてしまう」

「恐怖症になるほど俺もモテてみてーっすよ」

「面識のない相手から、呪いのかかった髪の毛入りの菓子が届いたりするんだぞ」

ルフィアスが何気なく言った言葉に、周囲にいた住民達がどよめいた。
「あたしがお持ちする食材はそんなもん入ってませんよ」
青年の後ろから、その青年によく似た少女が顔を出して、ルフィアスはフードを戻した。
「わざと入れられてたら買うわけないだろう」
「そりゃそっか。近くにいるだけでガクブルされちゃって、あっという間にあたしがルフィアス様を襲ったって噂が流れちゃってますね。あははっ」
住民達も揃って笑った。彼は住民達からも分かりやすいと思われているようだ。
「その坊ちゃんはワインでも買い付けに来たんですか」
「今日は聖光水晶を求めにきたんだ。売り物にならないような細かいのや汚い聖光水晶でもいいらしいから、いらない物があったら持っておいで。呪物と交換してくれるらしい。早い者勝ちだ」
「呪物と!?」
「ああ。クラインの店にいるから」
それだけ言うと、ルフィアスはさらに繁華街を進む。
「ずいぶんと、仲がいいですね」
「怯えられないように、住民との距離が離れないように心がけている」
「それは良い事です。偉ぶって上位の存在であると知らしめるか、親しくするか、どちらか一

方しか道はないでしょう」

ルフィアスほど容姿が整っていれば、どれだけ距離が近くとも、人々が彼を必要以上に侮ることはない。どれだけ人は見た目ではないと言っても、美しさが一種の力であることは覆らない。

「偉ぶるのは苦手だ。昔と違い裕福な街とは言い難いしな。疫病神と言われないようにするだけでも大変だ」

きっと他所とは違う、変わった愛すべき領主様、というのがルフィアスに対する皆の認識だろう。

話している内に、貴族を相手にしている気がしなくなって、普通の不死者に対する態度になってしまったが、それも気にしていないほどだ。

少し前を歩いていたルフィアスが足を止めた。

彼が見上げている建物は、他とさして変わらない外観だった。看板からすると酒場だろう。ずいぶんと古ぼけていて、酒場であるのは分かるが、何と書いてあるかは分からない。

「ここだ。この店は私が人間だった頃から通っていたんだ。当時の店主はもう亡くなっているが、孫が後を継いでいる」

「老舗ですね」

ルフィアスは店先に馬を繋ぐと、フードを外しながら店内に入った。店内では、既に数組の

客が席について飲食を楽しんでいた。
「あら、ルフィアスの旦那じゃないかい。いらっしゃいませ。今日はいい男を連れているじゃないですか」
　店内にいた中年の女性が、気さくに笑みを浮かべて言った。いい男とはリザイアの事だろう。髪を洗い、磨いた鎧を身につけた彼は、黙ってさえいれば呆けた表情をしていようとも、いい男に分類される。
　もっと無表情であれば、ルフィアスの護衛騎士のようにも見えた事だろう。
「友人――昔私に良くしてくれた死霊術師のひ孫だ」
　ルフィアスはマントを外して壁に掛けて、席についた。
　ルフィアスが若い頃からあっただけあり、店内に置かれている物も古めかしい。物が良いのか、大切にしているのか、テーブルも椅子もしっかりしていて、その古さが味になっている。この角の滑らかさは、使い込まなければ生まれない。キルスはこういう物が大好きなのだ。
「ああ、祖父に聞いています。ひ孫さんですか。どっから連れてきたのかと、一瞬ひやりとしましたよ」
「ニーゼ、私に男色の趣味はないぞ」
「あ、その噂知っちゃったんですか。泣いてしまいそうだから耳に入らないように気をつけてたんですけど」

「私は小さな子供か。この歳でそんな事で泣くはずがないだろう」
涙目になっていたのは、泣いた内には入らないようだ。
ニーゼと呼ばれた女はけらけらと笑いながら、当たり前のようにワインを持ってきた。
「坊やはホットワインの方がいいかね」
昨日も同じ物を出された。ここでは水代わりに飲んでいるのだろうか。キルスの住む地は葡萄酒（ワイン）より麦酒（ビール）や林檎酒（シードル）を飲む者が多い。
「あまり酔いたくないのですが」
「ああ、分かったよ。長めに温めて飲みやすくしておくね。甘めにするかい？」
「はい」
昨夜飲んだ物もまったく酔わなかったから、そのようにしてもらえるのだろう。
「後はこの子に何か食事を頼む」
ルフィアスは大ざっぱな注文をした。
「坊や、嫌いな物はあるかい？」
「ありません。旅先で色々な物を食べるのが好きで、この地方の料理も楽しみにしていました」
キルスは人に好印象を持たれるような、人なつこい笑みを浮かべて見せた。
愛想は生者、死者を問わず、交渉事には必須の武器だ。キルスは自分が微笑（ほほえ）むと、どんな格

好をしていても、可愛らしいと言われるのをよく知っている。
死霊術師は世間から怪しい奴らだと思われているので、愛想と行儀は良くしておかねばならない。それが一族全体のためになる。
「そっちのおにいさんは？」
リザイアはお兄さんと呼ばれて気を良くしたらしく、嬉しげに頷いた。
「おれ、なまにく」
「あ、彼には何も出さなくていいです」
店に売っているのもほとんど日持ちのする加工品ばかりだった。生肉を仕入れていたとしても、店を開いているからとっくに調理されているだろう。
しかも腹の足しになるかと言えば、家畜の肉ではならない。魔獣の肉というなら別だろうが、リザイアにも好みがあるらしく、百足は不味いからと言って食べてくれなかった。蜘蛛なら美味いらしい。
食べた事があるからこその発言に、その時は身震いしたものだ。
キルスは虫が少し苦手だった。
「じゃあ、美味しいもん用意するからちょっと待ってなよ」
「作るのは俺だろ。ほら、とっとと旦那に肴を出せ」
奥から男が出てきた。

「やあ、クライン」
「よお、旦那。今日もお綺麗ですやね。すぐに坊ちゃんの食事を用意するから、これ食って待っててくださいや」
そう言って、店主らしき男はカウンターに器を置くと、それをニーゼがキルス達のいるテーブルまで運んでくれた。
野菜の酢漬けや鰻の燻製(うなぎ くんせい)など、軽くつまめる料理だ。
ルフィアスはワインを金属製のグラスに注いだ。他の者達は木製の物を使っているので、これはルフィアス専用なのかもしれない。
「ニーゼ。実はここに来たのは食事のためだけじゃないんだ。キルスは聖光水晶を求めてこの街にやって来た」
「聖光水晶を？　なんでまたここに？」
既に聖光水晶の街でなくなって半世紀経つのだから、このように言われるのも当然である。
「このぼけーっとした不死者に喰わせるんだ」
「不死者？　ああ、なんかおかしいと思ったら。そのおにいさんも吸血鬼ですか？」
「いや、生ける死体(リビングデッド)というべき……？」
ルフィアスは言い淀(よど)み、それをどう解釈したのかニーゼは質問を続けた。
「不死者が聖光水晶なんて食べて平気なんですか？　普通、こういうのは苦手なもんだと思っ

てたんですが……」
「もちろん苦手だが魔力の塊でもあるから、喰えば満たされる。ただ、体内で治りにくい傷を負うようだ」
「……へ、平気なんですか？」
「反動で頭が回らないらしい。だが、喰わないと我をなくすから、どうしても必要なんだそうだ。聖光水晶を喰っていれば無害だから安心しなさい」
　人を襲うという事実が、ずいぶんと丸く表現された。
「おれ、むがいだ。おんなのひと、おそうなら、るふぃあす、おそう。るふぃあすよわいし、がんじょう」
「ぷっ」
　周囲の人々が同時に噴き出し、ルフィアスは不機嫌そうに顔を逸らした。
「ああ、ふてくされる旦那も麗しいねぇ」
「ふ、ふてくされてなど……私をいくつだと思っているんだ」
「街一番のお年寄りですよ」
「一番はまだ譲っていないぞ。私をいくつだと思ってるんだ」
「そこまで知りませんよ。見た目変わらないんですから、訳が分からなくなりますよ、まったく。最近は自分の歳も忘れそうなのに」

皆は二人のやり取りを見て失笑する。キルスもつられて笑い、快いと感じた。
彼らはとても快い不死者と人間の付き合い方をしている。
怯えの色は一片もなく、どこもかしこもこうであればと思わせる、微笑ましい光景だ。
ルフィアスの美しさではなく、この気安さこそが人から警戒心を取り除いているのだろう。
そろそろ本題に入ろうかとしていた時、ドアベルが鳴って客が入ってきた。
「ああ、いた」
先ほどルフィアスと話をしていた青年が、ルフィアスを見つけると近寄ってきた。
「旦那、聖光水晶持ってきました」
「ルソ、店はいいのか？」
「兄貴と妹に任せてきました。さっきラキアから聞いたんですが、その坊ちゃん、光の使徒様だそうですね」
「ええっ!?」
散々死霊術師として話していた少年が、忌々しいことに光の使徒であると知って、酒場にいた皆は揃えたように声を上げた。
「キルスは闇の女神の信奉者なのに、光の使徒の力を持って生まれてしまったらしい。本人としては不本意だそうだ」
「はぁ……宝の持ち腐れだねぇ。今は聖光水晶といえばやっぱ光聖会だから……あらあら、光

の使徒様だっけ」

女将の言葉にキルスは微笑みで肯定した。光聖会とは、光の神を主神として崇める宗教団体だ。とても怪しい新興宗教のような名前だが、それなりに歴史はある。

光の神を一番偉いとしているため、他の神に帰依する者達には嫌われがちだ。

光の神が悪いわけではないので光の神は他の神と同じように敬愛したいのだが、光聖会はとても鬱陶しいため、やはり難しい。

他の者達も訳知り顔で頷く。物分かりの良い住民達だ。

「この街も昔は光聖会の連中には儲けさせてもらったらしいけど、横暴だったそうだよ。聖光水晶が枯渇したら、困っていてもそっぽを向くし」

まだ生まれてさえいなかっただろうニーゼが、訳知り顔で言う。きっと過去の栄光を散々聞かされて育ったのだろう。

「僕が嫌っているのも、そういう体質のせいです。それでも凶悪な不死者退治は彼らが最も得意とするところなので、切っても切れないのですが」

初期対応に失敗した個人では手に余るような事例、つまり街一つが全員不死者化して、手がつけられないような場合は頼らざるをえない。

彼らは率先して盗賊退治などもしているから、感謝する者も多い。目当ては溜め込んでいた盗品なのだが、半分でも返してしまえば、残りは盗賊達が使ってしまったと勘違いされるのだ。

だから光聖会には金がある。

「光の使徒の呪物と聖光水晶を交換してほしいんだそうだ。使徒の呪物なんて珍しいぞ。聖堂でしか見たことがない」

黙って飲み食いしていたルフィアスは、グラスにワインを注ぎながら言う。

「それは当たり前です。使徒の呪物が御神体なのですから」

「え？」

ルフィアスは知らなかったのか、皆の顔を見回した。もちろん、ルフィアスが知らない事を、他の者達が知るはずがない。

「神が遣わした特別な存在が作り出した、神との繋がりとして使徒の作った呪物は『聖物』と呼ばれて、その神殿の『御神体』として崇めているんです」

「え……」

ルフィアスはキルスの装身具を見つめた。これが御神体と言われると、ありがたみがなくなるのだろう。

「本来の聖物は神の力が宿っていたり、使徒がずっと身につけて呪物化した一つの特別な呪物の事だったのですが、それだと数が足りなくなるのでただの量産呪物も聖物として『御神体』にしてしまったのです。人間の傲慢（ごうまん）です」

使徒とはつまり、金のなる木だ。自分の宗派に属する者は全て手元に置いておかねば価値が

下がる。だから躍起になって、金に物を言わせたり脅迫も辞さない勧誘をするのだ。
キルスが帰依する闇の女神はそのような事をしない、穏やかで慈悲深い宗派だ。
「だが、そこの聖堂は大地神様を祀っているはずなんだが、光の呪物もあるぞ」
ルフィアスは聖堂のある方を指さして言う。
「おそらく聖光水晶の街であった名残ではないですか。自分の所の神も合祀しろ、的な。じゃないと買い取れないからとか。つまり自分達の同胞から買い取っているという、建前のためではないかと」
大地神も比較的穏やかで、来る者は拒まないからねじ込みやすい。だが、あるのがどの呪物であれ、大地神を崇める者が最も多い事には変わらないはずだ。
「なるほど。それが形骸化して、呪物だけが残っていると。ろくに力のない呪物だから、まさかそのような意味があるとは……」
「そんなに弱いのですか？」
「光るからランタンとして使われている。まあ、蝋燭や油も安くはないから助かっているようだが、はっきり言ってアウロザを見た後だと……」
完全に日用遣いされているらしい。大切なのは大地神の呪物の方だから、それでいいのだろう。
「量産型の中でも粗悪ですね。本当に建前のために渡したといったところでしょうか。ああ、

嘆かわしい。このような中途半端な行いが、組織の評価を下げるというのに。組織が肥大化して末端に対する教育がなっていません！　きっと利益のかなりを横領していたに違いありません」

「いや、昔の話だからな。私が生まれるよりも遥かに前の話だから」

その頃から組織が腐っていたと思うと、余計に嘆かわしい。

キルスは気を取り直して、脱線した話を元に戻す事にした。

「つまり御神体になるようなものが一般に流通しているはずがありません。だから簡単に売り払えないんですよ。もし光聖会の絡まない業者にまとめて売ってみなさい」

「一般人なら殺されるかもしれないな……」

ルフィアスは顎に手を当てて言った。

「僕には苦情が来るだけでしょうが、買い取った方は、最悪の場合、始末されるかもしれません。ですから、そのような物の買い取りは断られます。引き受けるのは悪用しようという者だけでしょう。僕も犯罪の片棒を担ぐのは嫌です。しかし幸いな事に、この街は過去に光聖会と取引していた光聖堂でもある大地聖堂があります。しかも御神体が日用遣いされている。そんな街の住民が、個人的に持っているだけでは光聖会は何も言いません」

「そうなのか？」

「はい。それが当時のものなのかどうか判断がつかないでしょうから、確認に来るのも馬鹿ら

しいですし、遠い昔の不正を暴いても当事者は死んでいるので無意味です」
キルスは低俗な話なので、続けるのを少し迷った。しかし、これを話せば安心して売ってもらえると思い、続けた。
「ぶちあけた話、こういった小遣い稼ぎを一度もしていない使徒などいないと思います」
使徒は神に遣わされた特別な存在とされている。キルスは全くそうは思わないが、信じている者もいるため、口にしにくい話題だ。信心深い人に話せば、殺傷沙汰の口論になる可能性もある。
「……それは言いすぎだろう」
ルフィアスは眉をひそめて使徒達を庇うように言った。聖職者は清廉であって欲しいという願望があるのは当然だ。だからごく一部の清廉な使徒のために続けた。
「善良な者ほど金に困ります。人々に施すにはそのための資金が必要です。そんな時に、寄付への感謝の気持ちで、個人的に恵与するんです。あまり褒められたことではありませんが、ただ突っ立っているだけで、何もしないよりはいいでしょう」
「なるほど……」
どうやら納得がいく説明だったようだ。
そこから腐敗が始まり染まっていくのだが、言う必要はないだろう。
色欲、物欲、金銭欲、食欲、名誉欲。欲を挙げればきりがない。無欲恬淡な者もいるが、そ

ういった者は人を救おうという欲すら薄い。
「ですから個人的に持っている分には大丈夫です。一部の金持ちが自慢げに見せびらかす事もありますからね。独占して大量に持っていない限りは、何も言いません」
「へぇ、だから色々と声をかけてるのか」
「はい。何もされないでしょうが、出来ればそちらの方面の方にはご内密に。欲しがられては厄介ですからね」
キルスは唇の前で指を立てて、笑みを浮かべた。
一人一つぐらいなら、目を付けられる事はない。これでしばらくはどうにかなる。しかも昔裕福だった街だ。持っていても不思議ではないから、疑問に思われないだろう。
「うちだと聖光水晶っていうと、魔除け代わりに吊り下げているあれなんかが、一番マシなんだけどねぇ」
「見た目は汚くても大丈夫です。よほど品質の良い物でない限り、力と見た目はあまり関係ありませんので、見てみないと分かりません。汚らしい石でも力を持っている事があるので、見た目が綺麗なのはとっておいた方がいいですよ」
「じゃあ、こいつでもいいかい」
奥からクラインが皿を三つ持ってやって来た。内二つには料理が載っていたが、一つには濡れた赤い何かが載っていた。

「それは……袋？」
「聖光水晶が入ってる。これを入れてワイン煮を作るんだ」
キルスは我が耳を疑った。
店主が袋をひっくり返すと、皿に細かい聖光水晶がじゃらじゃらと広がった。赤く染まっているから、そうとう長い間このように使われていたのだろう。それでも力が失われた様子はない。一つ一つは細かいが、全て合わせるとリザイアが一月はもつほどの大きさになる。
「水に入れて浄化すると美味くなるというのは聞いたことがありますが……なんて贅沢な」
さすがは元聖光水晶の街だ。リザイアに喰わせるのが勿体ないという気分がほんの少しだけ薄れた。
「でも、こいつを喰うんだろ？　そっちの方が贅沢な気がすんだが」
「そうなんですが……」
やはり勿体ないと、思い直した。勿体ないと思っていなければ、現状の打開に対する意欲が削がれてしまう。
「しかしいくら量産できるっていっても、本当にこんな汚い石と呪物を交換してくれるのか？」
「ええ」
キルスは身につけていた指輪や腕輪や耳飾りなど、全ての自作呪物を外した。

「今呪物として使えるのがこれぐらいですね。もちろん明かり代わりにしかならないとか、寂しい効果ではありませんし、僕の作った呪物はたいていの人が使えるので、試してみてください。全て少しずつ効果が違います」

装身具を見て、女将が目を輝かせた。

「この中の聖光水晶だと、この大きめのが一番力が強いですね。これ一粒で、この中のどれでも好きな物と交換します」

キルスは赤く染まっている、若干湿った聖光水晶を手に取った。

「うまそう」

「これは来週食べるんです！」

手元を覗いてきたリザイアの頭を押しのけた。指をくわえて、しょぼんとされると、与えたくなってしまうので視線を戻した。

「たった一粒でいいのかい？」

「この聖光水晶は光聖会が買い取るような物ではありませんが、ちゃんと価値はありますよ。後で知って後悔されるような取引は出来ません」

キルスの感覚では、これはかなり自分が得をする取引だ。これ以上の事をすれば、物の価値が分かる物が知ったら顔を顰めるだろう。そうなったら信頼を失い、こうして友好的な態度を取ってもらえなくなるだろう。

これから先も可能な限り安く、且つ信頼を維持できる取引をする必要がある。呪物もすぐに作れるわけでも、大量の在庫があるわけでもない。時間をかけて取引しなければならないから、一度の取引で終わってしまったら困るのだ。しかしこちらに有利な取引だと知られても、常識の範囲内だったらいくらでも言い訳が出来る。

ニーゼは小さな貴石がついた白銅の腕輪を身につけ、耳飾りを顔の横にあてがった。

「旦那、どっちが似合いますかね」

「耳につける物は慣れないと痛いぞ。私も皆につけろつけろといわれなければつけなかっただろうな」

ルフィアスは整った爪の先で、自らの耳朶に触れた。

牙のような形をした、血赤珊瑚の耳飾りが垂れ下がっている。

「つけろと言われたんですか？」

消極的なわりにはずいぶんと高級品をつけている。

「服装や髪型で手抜きをすると皆に叱られるんだ。それにこれは贈り物の一つなんだ。私に似合うからと、色んな人から色んな物を贈られる。特にお年を召した方が、遺産に目をぎらつかせる子供達にくれてやるよりはと美しい物をくださる。おそらく美術館に寄贈するのと同じ感覚なのだろう。だからうちには呪物や曰く付きも多い」

ルフィアスは吸血鬼らしい華やかな気品を維持している。これは周囲に促されてのことらし

い。

「旦那は伝説の美男子だからね。服もみんなで用意してるんだよ。旦那に任せて、変な格好をされたらたまったもんじゃないからね。旦那のおかげで、ここは美形の街って言われてるんだ」

いかにもな衣装は、街の皆の目を気にしての事らしい。

言われて見れば、住民達も田舎の割には小綺麗だったり、小洒落た格好をしている。

「なるほど。だから皆さん洒落者なんですね」

周囲の評価が、人々の意識を向上させているのだ。

「じゃあ腕輪にしようかね。つけるのも簡単だし」

「呪物に拒絶もされていないので、大丈夫そうですね。それは熱の呪物です。わずかに魔力を使いますが、冬場には便利ですよ。白銅を使っているので、肌に合わないようでしたら別の物に交換します。一週間して平気そうなら、名前をつけてください。その名を呼んで、温めて欲しいと願えば温めてくれますし、簡単な魔除けにもなります。聖光水晶のように呪いを防ぐ力はありませんが」

呪いを防ぐ効果もあるから、本当の意味では使いこなせないような裕福な人々が、金を惜しまずに聖光水晶を買うのだ。たとえ呪われるような心当たりがなくても、金持ちというのは、命を狙われることがあるから。

「そんな効果が……やっぱり本当は高いんじゃありませんか？」
「この街では光聖会の買い取らなかった聖光水晶は安く見られているのですね。聖光水晶で大切なのは、見た目ではなく効果です。光聖会は武器に埋め込んだり転売するので見栄えを重視しますが、魔除けが必要なだけなら見栄えなど必要ありません。こんな聖光水晶でも正規に買えば、業者の儲けが上乗せされるのでかなり割高になります。その腕輪も効果が分かりやすいので末端価格は高いでしょうが、先ほども言った理由で売る場合は足下を見られますよ」
女将はそれを聞くと嬉しそうに笑った。
「こっちの腕輪についた石の方が綺麗なのに、世の中分からないねぇ。じゃあ、悪いから今夜はおごりだよ。好きなだけ食べていきな。うちの旦那の料理は美味しいよ」
「いいんですか。ありがとうございます」
キルスは何かの肉のワイン煮を見て、空腹を覚えた。リザイアの前で食べて罪悪感を覚えたのは最初の内だけで、今では毛ほどもない。
「他の皆さんも、聖光水晶があればお持ちください。魔力があれば交換します。もしくは曰く付きの呪われた道具があれば、見て差し上げます。持っていると不幸になる人形とか、絵とか」
「キルス……」
ルフィアスが白い目を向けてくるが、キルスは笑みを浮かべて皆の顔を見回した。

「そういうのは旦那のところにあるんじゃないか？」
「浄化してしまいました」
「さすがは使徒様だ」
よく考えれば、そんな物を持っていればルフィアスに預けているだろう。光聖会に浄化を頼めばぼったくられるから。
「使徒様、俺、聖光水晶なら持ってきたんだ」
「使徒とは呼ばないでください。僕にはキルス・エルヴァンという名があります」
「ああ、すいません」
ルソと呼ばれていた青年は、ポケットから小袋を取り出し、テーブルの上に広げた。くすんだ聖光水晶が三粒あった。キルスは一粒選んで、彼に呪物を見せた。
キルスは華奢なので女物のようなものを多く身につけているが、男性でも身につけられる物はいくつかある。
「ルフィアス、ひょっとして、この街ってこんな感じで家にいくつも聖光水晶があるんですか？」
「ある家の方が少ないだろうが、あるところにはあるんじゃないか。当時は売れなかった物ばかりだしな。あまり聖光水晶が出回ると価格が安くなるから、あえて汚いのは出さずに地元で魔除けにしていたのかもしれない」

「なるほど。しかし、今までこれに目をつけた商人は一人もいなかったのでしょうか」
「ひょっとしたら、私がいるから聖光水晶はもうないと商人にも思われているのかもな。キルスがここに来たのは、死霊術師だからこその発想だ」
「なるほど」
キルスは、吸血鬼ともなれば聖光水晶など触れない限りは痛くも痒くもないと知っているが、聖光水晶を扱っていても、そこまで知っている者はほとんどいないだろう。知っているだろう光聖会は興味がなくて放置していたため、このような事になったのだ。
「旦那、これ似合いますかね」
ニーゼは身につけた腕輪を胸の前に置いてルフィアスに見せた。
ルフィアスは見つめられてふいと目を逸らし、小さく頷く。
「ああ、とてもよく似合っている」
「目を合わせようともせずによく言いますねぇ」
いつものことなのか、女将は笑いながら言った。
「目を合わせずとも、似合うことは分かる。君は昔から細く綺麗な手首をしているから。水仕事も多いだろうに、相変わらず綺麗な手だ」
「旦那は相変わらずお口が上手なんですから」
そう言う彼女は、まんざらでもなさそうに笑っている。確かに彼女の手は綺麗だ。

「ところで、これは結局、聖光水晶と同じような効果なんですか？」

呪物を選んでいたルソは、顔を上げて尋ねた。手には先ほどニーゼが選ばなかった耳飾りを手にしている。彼は今も耳飾りをつけており、髪型や服装も洒落ている青年だ。

「違います。呪物は純粋な力では聖光水晶に劣ります。ですが、わずかながら自己を持っているのでもう少し柔軟に対応して、何か悪い事象を違和感として知らせてくれます。それ以外は聖光水晶を身につけているのと、さして変わらないのですが……そもそも聖光水晶にも効果にブレがあるんです」

「ああ、力が強いとか弱いとか？」

「はい。その耳飾りなんかだと、魔除けの効果は下手な聖光水晶よりも高いです。日の光に弱い不死者や、肉体を持たない死霊などは手を出せません。もちろん並みの吸血鬼ぐらいからなら身を守れます」

ルフィアスはぎょっとしてキルスを見た。

「そ、それを身につけた者を噛んだらどうなるんだ？」

「さあ。光を噛んでどうなるかなど、僕には分かりません。人間で言うなら、焼いた鉄を噛んだようになるのでは？」

ルフィアスは金属製のグラスを両手で握り、震えながら呻った。

「旦那、噛もうとしてたんですか……」

「ラキアが殴り倒して阻止したって言ってたぜ」
「ラキアが恩人か……」
客達はルフィアスに白い目を向けた。
あの時は呪物を身につけていなかったから、ルフィアスが怯えたような結果にはならなかったが、口にする必要はない。
「はは、そんなに強い魔除けなら、やっぱこれがいいな。俺は少年って歳じゃないけどさ」
ルソは耳飾りに決めたようだ。
「まぁ、旦那好みの若い使徒の血なんてなかなか味わえるもんじゃないからなぁ。あ、でも使徒の血は飲んでも平気なのか？」
「使徒は人間を喰らうような化け物に狙われるって言うし、美味いんじゃないか？」
「じゃあルフィアス様にはあの坊主が山海の珍味に見えるのか」
「いつもは禁欲的な生活してるから、そんなのが自分からのこのこやって来て、我慢できなくなったって事か」
住人が好き勝手な事を言っている。散々な言われようだった。
ここで使徒の血は力を増大させますとは言いにくいので、言わないことにした。飲めないかもしれないと思われていた方が、キルスの身も安全だ。
「使徒様の呪物はそんなに強いんですか。じゃあ、これがあれば鉱山の中に入れるんじゃない

ですか？」

呪物に触れて浮かれていたニーゼは、ふと思いついたように言う。

「やめなさい。そんな事をしてどうするんだ。あの程度の死霊なら、聖光水晶でも大差ない効果がある。腰を抜かして笑ってすまされるのは子供のうちだけだぞ」

ルフィアスは額に指を当てて、不快感もあらわに言う。

枯渇した聖光水晶の鉱山は、それまで守られていた反動であまり良くないものを招きやすいと言われている。

あの呪物で身を守ることは出来ても、怖い目に遭うのは違いない。身の危険はなくとも、腰を抜かして動けなくなる可能性もあるのだ。

それともう一つ気になることがあり、キルスはルフィアスを見つめた。

彼はさっと視線を逸らし、ため息をつく。

「助けに行く私の身にもなってくれ。子供なら簡単に抱えて帰れるが、大人の女性は厳しいんだ」

子供というのは好奇心旺盛で、出ると言われている、入るのを禁止された場所に行きたがるものだ。そして胆試しをして騒動になることが多い。

この街では、吸血鬼のルフィアスが助けに行っているようだ。吸血鬼は不死者の中でも最上位の存在だ。己の肉体を持たない存在など鬱陶しいだけの羽虫にも等しい。

しかし先ほどのルフィアスは、都合の悪い話を誤魔化すように言った。あまり触れて欲しくない事のように見え、その様子にキルスはますます疑問を深めた。

「旦那、吸血鬼のくせにほんっと力ないですね」

「これだけ顔がいいんだから、これぐらいの欠点必要だろ」

若者達が、ケラケラと笑いながら言う。

普通の貴族にこんな事を言ったら何をされるか分からないが、ルフィアスは肩を落とすだけだった。

「でも旦那はいつまでも若くて羨ましいわぁ。あたしも若い頃は吸血鬼に憧れたもんだよ」

「おめぇは旦那みたいに保存しとく価値のある顔してねーだろ。血が吸えなくてすぐに飢え死にしちまわぁ」

「失礼だねっ！」

ニーゼは夫に揶揄され、ぷりぷりと怒って店の奥に行ってしまう。クラインも聖光水晶を袋に詰め直して、それを追うように行ってしまった。

キルスは思わず笑みを浮かべて、料理に手をつける。

「なかいーなー」

リザイアが奥でまたくだらない口喧嘩をする夫婦の方を見て言った。ルフィアスは懐かしむような顔をして頷いた。

「そうだな。あの二人は隣の家同士に生まれた幼馴染みで、二人とも私が名付けたんだ」
「るふぃあすは、じじいだな」
「私はジジイだから当然だな」
そう言って、彼は切なげにため息をついた。
「じじいになりたかったのか？」
「なりたかったな。普通に結婚して、普通に生きたかった」
「ふつーのころ、ふつーにすてられたのに」
「黙ってくれ」
容赦のないリザイアの指摘に、とうとうルフィアスもこの言葉を口にした。
子供のように無邪気に思った事を発言してしまうため、とても面倒臭い。そのくせ、子供ではなく大人なので、内容が子供以上に面倒臭い。
「そういえば、こいつを風呂に叩き込んだ時に見たが、足に小さな刺し傷があった」
「死因はおそらくそれです。不死者は死後についた傷は戻りますが、生前についた傷は治りません。小さな傷なので、おそらく毒か何かでしょう」
リザイアは脳天気にカウンターに並ぶ料理を眺めていた。生前は彼もああいった物を見れば食欲を覚えたのだろうが、今は何も感じていない。
「こいつは、毒殺されるような奴なのか」

「良くも悪くも、人は恨みを持たれます。彼は剣士のようですから、殺されるのは仕方がありません」

ルフィアスは目を細めた。

「冷たい奴だな。彼は殺されて不死者になったんだぞ」

「人を殺す者は殺されて当然です。人にとって大切なのは、命そのものではなく、命が散るまで何をしたかです。全うに生きていれば、ここまで現世にしがみついたりなどしません」

「確かに、尋常ではないと思うが……」

無理やりとはいえ血の交換で吸血鬼になったルフィアスには、このようになってまで現世に執着するリザイアの気持ちは理解出来ないだろう。だからこそ、吸血鬼は最も高貴で最も人に近い不死者だと言われている。

「彼の正気の姿を見る限り、ただ殺されただけでこのようになるとは思えません。ルフィアスのように契約感染型以外で、生物が不死者になるのは強い感情と執着が必要です。無駄な争いを好みそうにもないリザイアが、なぜこうなったのか、僕にはさっぱり分かりません。それを解決してやれば、執着がなくなって不死者としての力が弱まるかもしれません」

「そうなれば、死霊術師としての対処が出来るのか」

「そうです」

先祖はそのように解決してきた。

「正気を取り戻した時に、死因を聞けないのか？」
「死亡時の憤りが強すぎると、その怒りが勝ってしまうようで死因について思い出せない事が多いのです。このままでは本人も辛そうですし、父が肩の骨を折られたので、本人経由の情報に関しては思い出すまで待つことにしました。このように穏やかにして聖光水晶を喰っている限り、怒りは長くは続きません。聖光水晶には強い浄化の効果があります。つまり悪い感情をも抑え、心穏やかにする効果があり、夫婦仲の円満にも繋がります」
絶望を和らげ、希望を与える。だからこそ神が人に授けてくれた希望の石だと、宗教にも利用されているのだ。
「そうだな。だからここは夫婦円満な家庭が多い」
「素晴らしい」
両親の仲が悪い家よりは、良い家の方が子供は素直に育つ。
しばらくするとニーゼが戻ってきて、チーズを載せたパンをテーブルに置いた。
「これも美味しいよ。近くの集落で美味しいチーズを作っているんだ。ワイン煮と一緒に食べても美味しい」
「ちーず」
チーズを見て、リザイアが反応した。
「おれ、すきだった、きがする」

「おや、自分の事を思い出しましたか。この調子で何をしたかったのか思い出せるといいですね」
「だな。きるすには、めいわくを、かけるな」
「とても迷惑なので、早く思い出してください」
リザイアはふむと頷いた。
聖光水晶など食べて迷惑を掛けているのが分かるだけでも立派だと思わなければならない。
「こっちのお兄さんはぼけっとしてもいい男なのに、死んじまったなんて、本当に勿体ない。これからって時だっただろうに」
「早く土に返してやりたいのですが」
「土に返しちまうのかい？」
「あなたなら、こんな風に死体になって一人で動き回りたいですか？　それとも生まれ変わって新しい人生を始めたいですか？」
「ああ……確かにそれはちょっと」
ニーゼはちらりとリザイアを見た。
「ルフィアスのようになってしまったら、土に返れとは言えませんが」
不死者にも色々と事情がある。個々の事情を見極めて、どう対処するかが死霊術士の腕の見せどころだ。

「対話か平和的解決か決別か。それを的確に判断し実行するのが僕の仕事です」
「……きるすは、まじめだな」
「死者であれど人は人。真剣に向かい合うのは当然の事です。ふざけていては、彼らは信じてくれません」
リザイアは笑みを浮かべた。少し、正気が戻っているようにも見えた。記憶を取り戻すような物を見たせいであって、まだ暴れはしないだろう。
「おれ、はらへった」
いつもの調子でリザイアは言った。この言い方は、まだ余裕がある。
「誰のために苦労していると思っているんですか、この大飯喰らい。これでも食べて、気を紛らわせなさい」
「ん」
リザイアはチーズが載ったパンを口にする。溶けたチーズが糸を引き熱そうだ。キルスは少しぬるくなったホットワインを口にする。料理の味も悪くない。他の席では、このパンの上に鰻の燻製やワイン煮を載せて食べていたので、真似(まね)てみるとそれも美味しかった。
「キルス、リザイアは昨日の聖光水晶でどれだけ我慢できるんだ？」
「一週間と少しでしょう。今日受け取ったこれは一週間は無理ですね」
「やはり厳しいな……」

ルフィアスはカップを見つめ、恐る恐る視線を上げた。
「もし、この街で手放していいような聖光水晶がなくなってもダメだったら、どうするんだ？」
それは、確かに恐ろしい事態だ。キルスは考えないようにしていた事を突きつけられて、ため息をついた。
「聖光水晶は金で買えます」
そう、買えない物なら諦めもつくが、金で買えるのだ。
「しかし、聖光水晶など週に一度消費していては、とても資金が続かないから私の所に来たのだろう。一般家庭にでもあるのは、ここが聖光水晶の鉱山だったためだ。正規の値段で買って寄越せと言われても、私の財力では無理だぞ」
「分かっています。僕はそんな世間知らずではありませんし、そのような外道でもありません」
月に一度ぐらいなら可能だろう。しかし週に一度寄越せと言ったら、破産しろと言うに等しい。
「使いたくないですが、多少のコネはあります」
「コネ？」
キルスは小さく頷いた。

「光聖会の連中は、聖光水晶をしこたま溜め込んでいます」
「そりゃそうだろうが……」
光の神はキルスが信奉する闇の女神の対とも言える神だ。特に不死者に対する考え方が大きく異なる。
邪悪でない者に対しては、本人の意志を尊重しようというのが慈悲深き闇の女神。不死者は可能な限り輪廻に返すべしというのが正義を振りかざす光聖会の考えだ。光の神は邪悪を許さないが、不死者全てを邪悪だと断じた事はないのが笑いどころだ。だから正しい死霊術師は闇の女神の信奉者で、光聖会とは相反する考え方を持っている。
「……キルスは自分の光の加恩を嫌がっていなかったか？」
「僕の蒐集物を守るた……あ、違う。リザイアに安らぎを与えるためなら、僕は何だってしますよ」
キルスはくつりと笑った。
「末恐ろしいな、本当に。なぜ子供がそんな風に考えるのだろう」
「自分が子供の頃を思い出してください。悪知恵は働いたでしょう？」
子供でも、欲しい物を手に入れるために知恵を働かせる。キルスはその手段が特殊なだけで、発想そのものは特殊ではない。
「大人というのは、子供であった時の事を忘れて、子供を侮る勝手な存在です。子供がどれだ

け邪か忘れて、子供は清らかだと思い込むのですから、実に滑稽。光聖会の考えも、それに近い物がありますね。実に独善的で、身勝手です」

　自分の事を棚に上げるのは全ての人間に当てはまるが、宗教団体がそれをして正義を振りかざしているのは、見ていて気分が悪い。

「すさまじく嫌っているが、何がそんなに嫌なんだ？」

「愚問です。この僕に、人の魂を消滅させかねない蛮行を押しつけようというのですから、嫌うのは当然でしょう。不死者になるような心の汚れた者が悪いと、言い切るような外道な連中ですよ」

　ルフィアスは首を傾げた。彼はそのような扱いを受けた事がないのだろう。

「吸血鬼であるお前には理解できないでしょうね」

「なぜだ？」

「吸血鬼は、滅多なことでは粛清対象になりません。なぜなら、理性を維持出来る感染型の被害者には、光の使徒であった者もいるのです」

「は？」

　ルフィアスは目を見張って、グラスを落としかけた。慌ててなんとか立て直し、袖を少しワインで汚した。

「使徒と言えども人間です。間違いや事故はあります。美女にうつつを抜かしたら、吸血鬼に

されたとか。そういった被害者である使徒を、自分たちの教義のために殺すことなど出来なかったという、それだけです。だからルフィアスのように見た目が美しいために被害者になった無害な被害者は退治しません。そういう決まりでなければ、勘違いして暴走した正義漢が、とっくにルフィアスを退治しに来ていたでしょう」

ルフィアスは自分が誰にも退治されない本当の理由を知って、瞬きをした。

「……私は薄氷の上にいたのだな」

「その顔と、街の住民の信頼に感謝しなさい。そのおかげで誰がなんと言おうと、お前が女性を無理やり襲ったなどと言っても、信じてもらえないでしょうから」

住民達は頷いた。深く、それはもう深く頷いた。

「おとこがおそわれたー、っていったら？」

リザイアの鋭い指摘にキルスは押し黙った。

「だから、私は女性にしか興味がないと言っているだろう！　ただ、ちょっと過去の苦い経験のせいで、女性と向き合うのに臆病なだけだ！」

言い切ったルフィアスの言葉を、ニーゼが笑い飛ばした。

「はっ、何をおっしゃってるんですかい。現実を見てくださいよ。これだけ苦手で、臆病なんて言葉ですむはずがないじゃないですか」

「うっ」

「だいたい、直接血を吸いたがるのは美少年だけじゃないですか。美少年だけ！　もちろん無理やり襲うなんてこと、するはずがないのは、あたしらよく知ってますよ。旦那みたいなヘタレが、そんな大それた事できるはずがないって、分かっています。でもねぇ……」

ルフィアスは頭を抱えた。

「ち、違うぞ。若くて可愛い男の乙女は、女性でないから噛みやすいんだ！　見た目が女性的な美少年だと、なおさら噛みやすい！　それに女性よりも頼みやすい！」

人間――おそらく他の吸血鬼ですら理解出来ない発言に、酒場にいた皆は顔を見合わせた。彼の主張は、色々とずれている。

「私の気持ちなど人間には分からないだろう。この噛みつかなければ満たされない飢餓感は」

やはりずれた発言だった。

それを選んだのはルフィアスだ。噛んではいけないなどとは、誰も強いた事はないだろう。

「おれにも、わかるぞ。にんじんを、めのまえに、ぶらさげられた、うまのきもち、てきなっ！」

リザイアは珍しく強く同意した。しかしルフィアスは程度の低いたとえを聞いて、額に手を当てた。

「全然分からん。だいたい、私は食べ物には困っていない」

「ふこーへー」

「私はただ、たまには噛りたいだけだ」
「へんたーい」
「吸血鬼の本能だから仕方がないだろう」
「なんでかまない？　かお、ふくろで、かくすとか。めかくし、するとか」
リザイアが珍しく建設的な意見を口にした。
「別に、目も合わせられないとか、そんな理由で女性を噛めないのではない。女性を噛んだら癖になる者が現れて襲われたと言っているだろう！」
涙目で訴える伝説の美男子の姿に、街の住民達はため息をついた。
色々と、もったいない男だ。
「きるすが、くせになっておそったらどうするんだ？」
「男なら殴っても罪悪感が少なくてすむ」
「……なぐれるのか？　なぐる、むずかしいぞ。けがするぞ」
リザイアはいかにも人を殴れそうにもないルフィアスをひたと見つめ、真剣な表情で尋ねた。
「ルフィアス様、人なんて殴ったことなさそうだよなぁ」
「絶対に突き指して自分の方が痛い思いをするんだぜ」
「か弱いもんなぁ」
「荒事はみんなルグラスじいさんが引き受けてるしなぁ」

「本気で、か弱いもんなぁ」

か弱いというのは、街全体で揺るぎない認識であるようだ。キルスは肉を切りながら、ちらりとか弱い吸血鬼を見た。

ふてくされていても、その伝説にまでなった美貌は健在だ。伏せた睫が影を落とし、これほどくだらない理由でふてくされているようには見えない。

「本当に、顔が綺麗で良かったですね。その顔がなければ良いところがない」

「なっ……」

ルフィアスは伏せていた顔を上げて、泣きそうな目をしてキルスを凝視した。

「かおのせい、にんげんやめたのに？」

「そうでした。この顔が女難の根元でしたね。もう少し控え目な顔ならこんな事にはならなかったでしょうに。美しさは罪とか佳人薄命と言いますが……」

ルフィアスが机に突っ伏した。

「私だって、好きでこんな顔に生まれたわけじゃないんだ。両親だってここまでの顔じゃなかったんだ。たまたま両親のいい部分が出てこうなったんだから仕方がないだろう！」

両親もルフィアスほどではないが、整った容姿をしていたようだ。

本人も顔のせいで大変な目に遭っているためか、自分の顔が美しいのは否定しないが、肯定的ではないようだ。

「そういえばご両親はどうしていたんですか？」
「父は私がこうなる前に事故で亡くなった。母は普通に長生きをしたよ。父が亡くなり、後を継いだからこの顔が噂になったんだろう。あの頃は都にも足を運んでいたからな」
ルフィアスはグラスを眺め、その唐草模様を撫でた。
「どうして人は、面の皮一枚で判断するのだろうか」
「僕は意に沿わない能力で執拗な勧誘を受けていますが」
「執拗なのか……」
「リザイアのことを知られたら、おそらく早く浄化してしまえと心ないことを言ったその口で、僕に光聖会に来るようにと言うでしょう。考え方の違いが大きすぎるんです。リザイアの事を知られたら、また鬱陶しいほど絡まれるような気がします」
キルスは憂鬱な気持ちで肉を口にした。
「やはり食べ物が口に合うのは、喜ばしい事ですね。将来の憂いを晴らしてくれます」
「お、そんなに美味かったか」
キルスの賛辞を聞いて、クラインがカウンターの向こうから身を乗り出した。
「さすがは聖光水晶まで使っただけはありますね。こういうものは我が家では出てこないので新鮮な気持ちです」
何度も足を運ぶことになるのに、食べ物が合わないのはとても辛い。料理が美味しければ美

味しいほど、その土地を好きになる。
特にリザイアの件はどれほど掛かるか、想像もつかないのだ。これぐらいの楽しみは必要だ。
キルスが皆と雑談しながら食事し、ほとんどの料理を胃袋に収めた頃、外が騒がしくなり、ドアを見つめて耳を澄ました。
「おい、喧嘩だっ！　またあいつら喧嘩してるぞっ！」
外から男の声が聞こえ、皆の腰が浮く。
少し離れた所で、喧嘩を仲裁する声まで聞こえてきた。
「近いね。まったく、誰が喧嘩なんて」
「私が見てこよう」
ルフィアスが脱いでいたマントを羽織り、酒場の外に出て行こうとする。
「待って待って、旦那は喧嘩が終わってから行ってください。か弱いんですから」
「か、か弱いと言っても、喧嘩を止めるぐらいはっ！」
「旦那の綺麗な顔に一瞬でも傷が付いたらどうするんですか」
「すぐに治る傷を恐れて、誰かが治らない傷を負ったらどうするんだ」
ルフィアスは止められるのも聞かずに、むきになって酒場から出て行った。外は日が暮れており、気が強くなっているのかもしれない。
「仕方がありません。僕も見てきます」

キルスはパンに最後の肉を載せると口に含みながら外に出た。
「心配だね。あたしもちょっと見に行くよ」
喧嘩の野次馬になるぐらいの事は危険ではないが、女性が夜に外に出るのは危険だ。
「では参りましょう。リザイア、ニーゼさんをお守りするように」
「おう」
三人と食事を終えた何人かが、酒場から出て喧噪の方へと向かった。

「お前達、何を争っているんだ。やめなさい」
ルフィアスは人の合間を縫って騒動の中心へと近づいていく。キルスはその背を見送った。
不安はあるが、あれでも彼はこの地の領主だ。そしてキルスはこの街の住人ではないため、この時点での干渉は無用だろう。
「ルフィアス様、だって、だってこいつがイカサマをっ」
「言いがかりつけてんじゃねぇよ。証拠はあるのかよっ」
よくある喧嘩だった。女を寝取られたなどという理由とは違って、今なら和解も難しくはない。

「落ち着くんだアレフ。前も似たような事で揉めただろう。あれだけ賭け事はやめなさいと言ったのに、また賭け事で揉めているのか」

ルフィアスは喚いていた青年の肩に手を置いて、強めの口調で言った。彼が揉めるのはこれが初めてではないようだ。

「俺の事はほっといてくださいっ」

青年はルフィアスの手を、力強く振り払った。その勢いでルフィアスは押されて、尻もちをついた。

か弱いとは聞いていたが、本当に力が弱いようだ。不死者になると腕力が上がるものだが、人間の男に負けるとは珍しい現象だ。

「ああ、ルフィアス様っ」

その光景を見ていた若い娘が叫んだ。

アレフはその声を聞いたとたん、冷や水を被せられたかのような表情でルフィアスを凝視した。

「ちょっとアレフ、あんたっ！　もしルフィアス様の伝説級の美貌に傷でもついたらどうするのっ!?」

「ご、ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ」

青年は激高していたとは思えないほど慌てふためき、ルフィアスを助け起こしてその顔を確

認する。

尻もちをついて顔を怪我するはずがない。しかも心配されているのは顔だけだった。

「どうなっているんですかね、この街は。なぜ不死者のルフィアスをあんなに心配してるんです？」

キルスは呆れて隣にいるニーゼに尋ねた。

「旦那の美貌は有名だろう。その美貌にあやかって、うちの街のワインのラベルもみんなあの方の顔がついているんだよ。今じゃあ歴史上の美女を挙げる時、なぜかそれに交じって旦那の名が挙がるようになってるぐらいでさ」

キルスは気に留めていなかったが、ここに来てから見たワインの瓶には、確かに人の横顔が画かれていたような気がした。

「祭りの日には、旦那を見に他所から人もたくさん来るんだ。だから観光客を呼び込めるような日だけは、怖い他所者の女にも耐えてもらってるんだよ。言わば、旦那は街の遺産だね」

「はぁ。観光名物みたいなものですか」

「そうそう。それにうちのワインも、飲むと美しくなるとか言われてるんだ。聖光水晶がなくなったこの街が今でもそれなりの暮らしを維持出来ているのは、旦那のおかげだよ。旦那にはいつまでも綺麗でいてもらわないと困るんだ」

元聖光水晶の街の住民達は、とても強かであったようだ。

ルフィアスの美貌が伝え広まったのは、彼らのそういった活動によるものだったのだ。
「そうなのですか。ワインには詳しくないので知りませんでした。伝説が出来るにも、背景があるのですね」
エルヴァン家は社会情勢は常に気に掛けているが、そういった世俗的な部分に疎いところがある。特にワインはさすがに呪物化しないため、興味もなかった。
「ああ、ギーリルは怪我をしているじゃないか。見せてごらん」
起き上がったルフィアスは、イカサマをしたとされる方の男に手を伸ばした。その顔には、引っ掻いたような傷が出来ていた。殴った方の男は指輪をしており、それで傷ついたのだろう。
ルフィアスは胸元にある月長石のブローチに触れて、男の傷ついた頬に触れて魔力を込める。あれは呪物だ。
「大した傷ではないからすぐに治る」
傷を癒している。吸血鬼が呪物を使い、傷を癒しているのだ。
「……何ですか、あれは」
キルスは信じられない光景を目にして、再び隣にいたニーゼに尋ねた。
不死者が生者を治癒するなど、今まで見た事も聞いた事もなかった。
「旦那は吸血鬼になる前から、治癒術師だったらしいよ。だから吸血鬼になっても、呪物に拒絶されなかったんだってさ」

「確かに、魔術は呪物に選ばれれば使えますが……」

不死者は治癒の呪物などとは相性が悪いはずだ。少しでも合わなければ呪物は拒絶する。それを魔力で押さえ込んで無理やり使うことは出来るが、あの呪物は拒絶どころかルフィアスに対してとても協力的だった。

拒絶すれば、術者は何らかの反応を見せる。素直に感情を出すルフィアスが、あのように爽やかに微笑んではいられないだろう。

ルフィアスは治療を終えたのか、ギーリルの頬から手を離した。

「ふぅ……」

「ルフィアス様、大丈夫ですか。この程度の傷に力を使わないでくださいよ」

傷を治してもらった青年ギーリルが、ふらついたルフィアスを支えた。

「大丈夫だ。さっきの傷はそんなに浅くはなかったぞ。そのままにしていたら、きっと跡が残ってしまっただろう。私が治癒するべき傷だった」

治癒術はとても力を消耗する。本来は相性が悪いはずなのに、呪物の協力で術を発動させている彼には、多少の傷を治すのでも疲れるだろう。

自分に何の益がなくとも、他人に施してしまう者がいる。

だから彼は人間達に愛されているのだろう。

か弱くて、女性が苦手で、優しい領主。



それが、キルスの大祖父が彼を保証した理由だろう。
「アレフ、どんな理由があろうとも傷つけ合ってはならないよ。人はちょっとした事で命を落としてしまう脆弱な存在だ。何か事故があってからでは遅い。傷つくのはお互いだけではない。頼むから、そのようなことをしないでくれ」
「……はい」
ルフィアスは青年達へ説教を始めた。
キルスは隣に立つニーゼにもう一度目を向けた。
「ところで、もう一つ質問があるのですが」
「何だい。あれはよくある事だよ」
「そうではなく、廃鉱山についてお伺いしたいんです。廃鉱山には死霊が出続けているのですか？」
「ああ。そうだよ。そういうものらしいね。中に入らなきゃ害はないし、定期的に追い払ってもらってるからね」
「枯渇したのはずいぶんと前ですよね。どうしてその腕輪をつけて入ろうとしたんですか？」
「実は奥の方を掘れば聖光水晶がまだ出てくるらしいんだよ。だから幽霊が出るのは入り口のあたりだけなんだけど、奥に行こうとすると、見えるだけじゃなくて気持ち悪くなってね。坊やなら取ってこられるかもねぇ」

「そうですか。まあ、それを取るとどうなるか分からないので、やめておきますよ。最後の手段ぐらいに考えておきます」
「そうかい。真面目な子だねぇ」
ニーゼはキルスの背を叩いて笑う。
「ニーゼさんもその腕輪は悪用しないようにしてくださいね。邪悪な存在から身を守れても、手も触れず、騙して殺そうとする厄介なのがたまにいますから。もう大丈夫だと気を抜いて外してしまったところで襲われるというのは、昔話の王道でしょう？」
「な、なるほどねぇ。あたしもやめておくよ」
「それが賢明です。危ない場所には絶対に近づかないのが、誰にでも出来る賢い生き方です。僕らはそうやって好奇心で命を落とした魂を、飽きてしまうほど見てきました。肉体を持たない死霊には人を直接殺すような力を持つ存在などほとんどいません。だから人は安心するのです。彼らは大抵、人の弱さにつけ込んで事故死させます。そしてその魂は、自分を死に追いやった存在に取り込まれるようにして新しい獲物を探すのです。子供達が胆試しなどとんでもない」
笑っていられるという事は、胆試しをして事故死してしまうような環境ではないのだろう。落ちて死んでしまうような高低差さえなければ、落盤でもない限り死なない。聖光水晶が残っているのなら、そこまで影響を与える事は出来ない。

それでも、してはならない。

「へぇ、そんなもんなのかい。祟り殺されるとか、そういうんじゃないんだね」

「そんなものです。肉体を持たぬ彼らはルフィアスよりもか弱く、騙したり、脅かしたりするしかない、聞く耳を持たない者にとっては可愛らしい存在です。そして人は、耳を貸さないつもりでも自分に都合の良い情報があると、試さずにはいられないのです」

ルフィアスが説教を終えて、二人を仲直りさせた。仲直りしなければ、暴力事件として役人の世話になるため、彼らは今のところは素直にそれを受け入れた。

「とりあえず解決したようですね。では僕らは帰ります。ごちそうさまでした」

「ああ、夜道には気をつけるんだよ。あんた可愛いから、旦那に噛まれないようにね」

「あのか弱い男が、どうやって僕を噛むと言うんですか」

ニーゼは剣士のリザイアを見た。

「それもそうだねぇ」

このように簡単に納得されてしまう、吸血鬼に対する印象を崩壊させる吸血鬼の存在に、若干の疑問を胸に抱きながらキルス達は帰路についた。

これからやる事、考えるべき事は山ほどある。

未成年であるキルスがすべき仕事ではないが、リザイアの魂のためなのだ。強い意志を持つ魂は、何物にも代えがたい、尊いものだ。

城に戻ると、キルスは客室に案内された。ルグラスが昼間の内に用意してくれていたようだ。
簡単に室内を説明するルフィアスを眺めながら、キルスは椅子に腰掛けて尋ねた。
「ルフィアス、一つ確認します」
「何だ？」
説明を終えて出ていこうとしていたルフィアスは、ドアに伸ばした手を引いて、振り返った。
「廃鉱山にはまだ聖光水晶（ブレス・クォーツ）が残っているそうですが」
その言葉を聞くと、彼は面白いようにびくりと震えた。
「なぜ死霊が出続けるのですか？　聖光水晶の廃鉱山には、確かに死霊が集まります。ただし、それは今まで綺麗すぎたために寄ってくるだけで、一時的なものにすぎません。聖光水晶が少し残っている場合に、入り口にだけ集まることもありますが、それもまた一時的なものです。その残った聖光水晶をどうにかしない限りは、再び死霊が集まるなんて事は、聞いたこともありません」
ルフィアスは形の整った眉を寄せ、困ったように首を傾げた。
「何か、隠しているでしょう」
「それは……君のご先祖は知っていたことだ」

「大祖父は仕事の関係で亡くなりました」
「亡くなっていたのは知っていたが……危険な仕事なのだな」
ルフィアスはちらりとリザイアに視線を向けた。このような事をしていれば、命がいくつあっても足りないと思ったのだろう。リザイアは金銭的な負担が大きいが、気をつけさえすれば命がけというわけではない。
「そうです。ルフィアスのように穏やかな不死者もいれば、リザイアのように厄介な不死者もいるのですから。猛獣を相手にしているようなものです」
ルフィアスはため息をついて、どこか——おそらく廃鉱山のある方を見やった。
キルスにはその表情は見えなかったが、彼の握りしめた手は震えていた。
「きるす、あっちに、なにかいる……」
リザイアの言葉に、ルフィアスは驚いて彼を見た。
穴が開きそうなほどその顔を凝視して、やがて諦めたように目を半分伏せた。
「お前はきっと、生前は敏い人間だったのだろうな」
「あたったー。ほめられた」
リザイアは喜びながら、キルスの頭に手を置いた。キルスは苦笑してその手を払いのけて、促すようにルフィアスを見上げた。彼は観念して、テーブルを挟んだ向かい側にあった椅子に腰掛ける。

「察しの通り、ユシェール――私を吸血鬼にした女吸血鬼を封じている」

可能性の一つとして考えていたが、一番嫌な部類のものだった。

「なぜ、誰が封じたのですか？　大祖父だったら、そのような手は取らないはずです」

「僧侶が一人生き残っていたのは話しただろう。封じたのは彼だ。皆で協力して、騙して聖光水晶の力を利用した結界の中に誘い込んだんだ。鉱山内には聖光水晶以外の宝石ならまだたくさんあって、鉱山内は綺麗だと言って」

自分の美しい下僕に綺麗だから見ないかと言われれば、心が揺れるだろう。しかも聖光水晶が苦手なのは、ルフィアスも同じだ。

どれだけ騙されないつもりでいても、人は自分に都合が良く、信じたい情報には騙される。

「彼女は聖光水晶がなくなったから来たのではなく、ワインと私の噂を聞きつけてやって来たから、土に埋まった聖光水晶には恐怖していなかったのだろう。ユシェールは常に私や何人かを側に置いて人質にしていて、街の者達には何の手も打てないと分かっていたから、のこのこついてきてくれた。結果的に聖光水晶に対する耐性が強かった私だから抜け出せる結界に捕らえられ、さらに強い結界を張った。見習いといえども優秀な少年だったからなんとかなった。それから君のお祖父様を呼び、封印を強めてもらった」

だから彼は聖光水晶を身近に置き続けているのかもしれない。聖光水晶は自分にとって弱点ではあるが、自分を守ってくれた街の宝でもある。

「なぜとどめを刺さなかったのですか？」

ルフィアスは言葉を詰まらせた。爪の先まで整った指を自らの顎に這わせ、切なげに顔を曇らせた。

「それをするには、結界をある程度解かなければならなかった。だから弱ってからの方が安全だと、君のお祖父様が……」

吸血鬼には魅了の力がある。それははまり込むと後を引くものだ。

「では、なぜ大祖父が来ないのに、問い合わせなかったのですか？　当家の者が一度も連絡を取らなかったという事はないでしょう。その時に聞く事も出来たはずです」

「……忘れていた」

忘れるはずがない。

始末していない、しかも手の届く場所にいるなら、後を引いて当然だとも言える。

親吸血鬼に逆らうなど普通なら出来ない。呪いを受けたかのように、逆らうことが困難なのだという。それに逆らった頃のルフィアスは、リザイアと同程度の強い覚悟と意志を持っていたのだろう。

「大祖父はお前達に配慮したのですか」

吸血鬼には魔眼と呼ばれる、人を魅了する力がある。どんな命令にも従わされるような絶対的な力ではないが、人の心を束縛する。恋心を植え付けられるのに近いらしい。

そのように魔眼に魅了されたままの状態で吸血鬼を始末すると、暴れ出す者が出る可能性もあるし、失恋にも似た傷として残る事もある。そのために十分な時間を置いたのだ。忘れるために。

それは、人間には有効だったようだが、人のように変わる事の出来なくなってしまった不死者のルフィアスには、まだ足りていなかったようだ。なにせ相手は親吸血鬼だ。余計に魔眼は効きやすかっただろう。

「……夜に君が来た時は、てっきりとうとう彼女を討つのかと」

「では討ちましょう」

キルスはにやりと笑い、ルフィアスは身体を硬直させた。

当時彼が親吸血鬼の支配を乗り越えられたのは、他の人質にされていた領民がいたからだろう。守るべき者がいれば強いが、いないと弱いという者は多い。ルフィアスはそれが極端なのだろう。

「女性に対する苦手意識も、少しは改善されるのではないですか。いつまでも側にいるから、引きずるのです。思い入れのある物を手元に置いていたら、誰だって忘れられなくなります」

ルフィアスは目を泳がせた。大祖父は時間が解決してくれると考えていたのだろうが、時間は何も解決してくれなかった。なら強硬手段に出るしかない。

「何を迷う必要があるのです？　お前は自分の仇を取るだけではありませんか。お前は人とし

ての幸せを奪われたのですから」

「かたき……」

ルフィアスが呟き、キルスは頷いた。これは仇討ちだ。

キルスは立ち上がり、ルフィアスの傍らに立って、その肩に手を置いた。

「心優しく美しい妻、可愛い子供達、愛する者に囲まれた穏やかな末期。それこそ人としての至高の死。お前は人として有り得たかもしれない至上の幸せを奪われたのです。お前には自分の仇を討つ資格があります」

キルスは強い言葉で過去を引きずる男の背を押した。

誰かに背を押されてしか動く事が出来ない者がいる。特に彼のように慈悲深い性格なら、なおさらだろう。

「我が一族は間違いなくお前の味方です。僕は死霊術士の端くれとして、お前に手を貸しましょう。この悪縁を絶ち切るのです。そうして初めて、お前の故郷は忌まわしき呪縛から逃れられるのです」

力を貸す者がいれば、人は勇気を与えられて動く事が出来るようになる。守るべき民がいる事を思い出させてやれば、活力となる。

それに期待していると態度で示せば、後ろ向きな者を、やらなければならないという心境にまで持っていくことが出来る。

正論と利益と助力。これを与えれば、手っ取り早く人を動かす事が出来る。
「お前のためになら、忌まわしきこの力を使うのも厭いません」
ルフィアスは肩に手を置いて諭すキルスを見上げた。
「君はその力がそこまで忌まわしいのか……いつの間にかお前呼びだし」
「今はそのような事どうでもいいのです。この僕が力を貸す。それはどんな手段も厭わず、確実に仕留められるという事です」
余計な事に引っかかったルフィアスに、叱るような強い口調で脱線しかけた話を元に戻し、説得を続けた。
状況に押し流すだけでは意味がない。彼が自分からやると言って飛び込まねば意味がない。
そうでなくば、血の呪縛からは逃れられない。
「勇気が出ないのであれば、思い出しなさい。お前は何をされたのです。そしてお前の大切な者達に何をしたのです」
ルフィアスは胸元にある月長石（ムーンストーン）の呪物に触れた。
美しすぎる青年は、悩む姿も一枚の絵のようだ。伏せ目がちの瞳は、長い睫が際立ち、その下に隠れて戸惑いに揺れている。切なく息を吐く唇は、血のように赤い。ランタンの光を受けて光る黒髪は、つい触れてみたくなる。
額縁に入れるように閉じ込めてしまいたいと思う者は、どれほどいただろう。

「お前の容姿だけを気に入り、お前の心を無視した女です」
その女の性格は知らない。しかし何を言ったのかは想像がつく。
吸血鬼に狙われ、飼われるのは美しい者ばかり。裏切る気が起きないように、時になだめて甘やかす。
美しい者を囲いたがる、自らの美しさに自信のある吸血鬼などそんなものだ。
「永遠に維持するなど不可能です。何か事故があった時、もし彼女が出てきてしまったらどうしますか」
「そんな事、あるはずが」
長い年月、封印を維持出来ていたから、これからもきっと出来ると楽観視しているようだ。
「僕なら辿り着けます。では、僕のように辿り着ける者がこの街に生まれて、騙されて封印を解いたらどうするのですか」
「それは……」
返す言葉が見つからないようだ。
「お前は長年封じられた心ない吸血鬼がどのような行動に出るか、分からないほど愚かなのですか」
心を優先したのは尊いが、間違った判断だとも言える。
荒療治は必要だ。

「討ちなさい、お前のためにも、次に犠牲になるかもしれない誰かのためにも。それはおそらく、お前の愛するこの土地に住まう何の罪もない若者なのですから」

ルフィアスは顔を歪めた。

ずっと、考えないようにしていた事だろう。人は安定した生活を手に入れると、嫌なことを考えるのを避けるようになる。

「分かった。君の曾祖父が亡くなってしまった今、これはまたとない機会なのだろう」

それを言ってもなお、ルフィアスはほんの少し言葉に詰まった。

「ルグラス達に相談してもいいか」

「るぐらす、そこにいる」

リザイアが指を差すと、ドアが開いた。

「お飲み物をお持ち致しました」

「……聞いていたのか」

「聞いていたのではございません。声を潜めておられなかったので、聞こえてしまったのです。私はまだまだ耳は衰えておりませんので」

執事の言い訳を聞き、ルフィアスは諦めたようにため息をついた。

「相変わらずだな。お前は昔からそういう奴だった」

「いつまでも若々しいという事ですな」

「本当にブレのない男だな」
「お褒めいただき光栄でございます」
キルスは二人のやり取りを見て、くすりと笑う。主と使用人というよりも、友人同士の会話だ。実に愉快な老人だ。
彼は持ってきた飲み物をテーブルに置くと、丸眼鏡（まるめがね）を押し上げて言った。
「旦那様、私は賛成いたします。是非とも、旦那様にあの吸血鬼めを退治していただきたく存じます」
ルフィアスは目を見張る。
「私が？」
「旦那様以外に誰がおりましょう」
「そう……だな。私が討たなければ」
ルフィアスは自分に言い聞かせるように呟いた。
「そうです。麗しき旦那様から未来を奪い、女性恐怖症にしてくれた憎い女です。商人と、あれを追ってきた僧侶の方々が無残な殺され方をされました。あれが存在する限り、同じ事が繰り返される可能性があるのは、私も考えておりました」
「そうか……」
「これだけ時間をおいているのですからさぞ弱っているでしょう。非力な旦那様でもとどめを

刺すことが出来るはずです！」
「そ、そうだろうか」
「そうですとも！」
ずれた後押しは、過去を引きずっているルフィアスのためだろう。
それがただ魔眼に魅了され続けているだけなのか、恋心なのか、分からない。
「では、僕がそれなりの準備を整えましょう」
「準備？」
ルフィアスは身一つで行くつもりだったのか、不思議そうに尋ねた。
「万が一逃がした時に、街で何の対策も取っていなければ二の舞です」
「……逃がすなど、許されない。絶対にそのような事はない」
「あってはならないから、対策をしないというのは暴論です。失敗した時のために、万全の準備を整えるのが、正しい感染型の不死者狩りです。感染型不死者は鼠算式に増やせます。それが一番恐れるべき、あってはならない事態です。逃がしても、身を守る方法があれば、最悪の事態は防げます」
ルフィアスはキルスの言葉を聞いて、甘い考えを持っていた自分を恥じるように唇を引き結んだ。
「僕は正式な吸血鬼狩りの道具を揃えます」

ルフィアスは視線を下げ、自分の両手を見た。

吸血鬼は人の姿をしているから、それを討つというのは人を殺すような感覚がある。

「誰だって、人の姿をした存在を、討つのは楽しくなどありません。慣れている僕だって、毎回嫌な思いをします。それでもそうしなければ被害者が増えるからするのです」

「君は、慣れるほどそのような事を？」

「慣れてはいませんが、汚れ仕事をする者がこの世には必要なのです。だから僕らは気味悪がられようと、先祖代々受け継がれている、呪物を手にして不死者達と対話するのです」

ルフィアスは戸惑ったように、キルスを見つめた。そして問う。

「君達は、そのように仕事をしているのか？」

「そうです。まずは交渉し、完全に決裂すれば敵対します。相手が弱ければ、死霊術師の名に相応しく無理やり従わせ使役します。そうすればそのうちいつか話が通じるようになり、苦しみから解放してやれます。そこまでが平和的解決。それが叶わないなら、完全に敵対して討ち滅ぼします。お前の親吸血鬼は対話する意味もありません」

「意味すら……ないのか」

「人を騙してまた同じ事をするでしょう。更正の可能性を信じて優しくしてやるには、罪を重ねすぎています。対話すらしなかったという事は、大祖父も同じ意見だったのでしょう」

ルフィアスは躊躇いながらも頷いた。当時のことを全く知らないため、予想を口にしただけ

なのだが、やはり対話しなかったのだ。
「もしも自分でやるのが嫌だというなら、僕が手を下しますが」
息を呑んで、ルフィアスはキルスを凝視した。彼の性格では、人に任せて自分が楽をする事を許せないだろう。
「君にそのような事はさせられない。私で彼女を滅ぼせるのなら、私がこの手で彼女を滅ぼそう」
はっきりと口にした。
これを口にするのは、意味がある。そうしなければならないと、思い込む。そして責任感が強ければ強いほど、後戻りできなくなる。
「分かりました。では、一週間ほど待っていてください。僕も吸血鬼狩りなど初めてなので、父にも相談しなければなりません」
「父君が来てくれるのか？」
「そんなはずがないでしょう。相手は封じられている吸血鬼ですよ。子供でも滅ぼせます」
「子供にそんな事が出来るはずがないだろう」
「ふふっ、たとえか弱いド素人にも扱える道具を用意すればいいのでしょう」
問題は道具ではなく、槌を振り下ろせるかどうかなのだから。
「そうか。私にも使える道具は必要だな」

吸血鬼とは思えない、自分を信じていない台詞を口にする。
「その代わり、リザイアを頼みます」
「こいつだけは連れ帰ってくれ！」
「僕は道具を借りに行かなければならないのです。リザイアなど連れていたら道中が大変でしょう。さすがに町中で鎖を引っ張るのは恥ずかしいですし」
「……た、確かに頭が痛い旅になりそうだが」
「そうです。黙らせるのにどれだけ苦労するか」
キルスはそれだけ言うと、ルフィアスに鎖を渡して皆を部屋から追い出した。
明日は早いから、早めに寝るのだ。

キルスは家に帰ると、思わず舌打ちした。
家には生きた人間が誰(だれ)もいなかった。家にいるのは、キルスの足下をうろつく生きている飼い猫と、死んでいる人間だけだ。
「皆は？」
じゃれついてきた猫とは対照的に、キルスの姿を見た瞬間に物陰に隠れた留守番の不死者に問う。しかし彼は周囲を見回すだけで、警戒して出てこない。
「リザイアは置いてきました」
彼はリザイアに捕食対象として見つめられて以来、彼の事が苦手になったのだ。
すると、留守番の生ける死体(リビングデッド)が、おっかなびっくり姿を見せてくれた。
「急遽(きゅうきょ)大口の仕事が入り、皆様で向かわれました。もしもキルス様がお戻りになったら、ゆっくり休んでいなさいと」
この生ける死体はリザイアと違い、並の力しかない無害な不死者だ。リザイアのように、何が心残りか分からないため、ここで思い出すまで保護している。代わりに家事の手伝いをして

もらうなど、使用人のまねごとをしてもらっている。
「そうですか、困りました」
リザイアのせいで金欠気味だから大きな仕事があれば受けるのは当然だろう。
「仕事が終わったら戻る前に使い魔を寄越して連絡するとおっしゃっていました。それまでは連絡も取れません」
キルスは悩み、腕を組んだ。キルスには使い魔のような存在がいない。適性があれば簡単に契約できるのだが、キルスには適性が全くないのだ。脅迫しても無理なものは無理なので諦めたが、やはり使えないと不便だ。
「困りました」
「私ではお役に立てませんか？」
「僕はルフィアスの親吸血鬼を狩る事にしたので、吸血鬼用の装備を取りに来ました」
「お伝えしておきます」
キルスは土気色の生ける死体を見上げた。
「あの辺りにある物は似たようなのが多くて、僕には見分けがつかないのですが」
キルスはまだそこまで大きな仕事に関係した事はない。本来吸血鬼狩りとは気軽なものではなく、徹底的に下準備をして、何人もの魔術師を揃えて行うものである。
「私には入る事も出来ませんので、お力になれません」

「見分けられませんか？」
キルスが尋ねると、彼は悲しげに首を横に振った。
「私は吸血鬼ではないので、吸血鬼が特に苦手な物など分かりません。リザイアさんのように鈍感な方ならともかく、ああいった狩りの道具は私達にとって、全てが触れるのも恐ろしい凶器です。私に出来るのは、普通の部屋の掃除と、坊ちゃまの蒐集物を磨く事ぐらいです」
キルスは悩んだ。今を逃すと、時期が悪くなって先に延びる。先延ばしすると、ルフィアスのような男は気が抜けてしまうだろう。一週間でも長すぎるぐらいなのだ。
「困りました。見分けられる人は出払っていますし」
「買う余裕はありませんからねぇ」
「そうで……ああっ」
キルスはいいことを思いつき、手を打った。
「借りればいいんですよ！」
「借りる？」
キルスは大きく頷いた。
「ああ、あそこから借りるのですか。それなら確実そうですね」
「ええ。近場だとぼったくられるので、少し離れたところで借りましょう」
「清潔な普通の服を用意いたします」

「お願いします。色は明るめの方がいいですね。あとは湯の準備を。父から連絡があれば知らせてください。もしくは僕に連絡を寄越すようにと」
「かしこまりました」
キルスは杖を置き、交渉が少しでも有利になるよう、他にどうすべきか考えた。
普段は不死者との対話が多いが、人との対話、交渉もキルスは好きだ。考えるだけで、楽しみで仕方がなくなる。

キルスは目的地の前に着いて馬車から降りると、御者に笑みを向けて礼を述べた。
「ありがとうございました」
「お使い、頑張るんだぞ」
キルスの顔が引きつった。お使いというのは子供っぽい響きがある。子供扱いされるのは不服だったが、悪気はないと分かっているので気にしない事にして、目的の場所に向かった。
離れた場所からも見えていた仰々しい二本の尖塔があるこの建造物は、いかにも重厚で、金が掛かっている。
これこそがキルスの目的地、確実に目的の物があると思われる、ダヴィトへ行く途中で寄れ

る中では最も規模の大きい光聖会の大聖堂だ。名前は忘れた。信仰に仰々しいまでの巨大な建造物は必要はないのに、彼らは競うようにこういった立派な聖堂を建てる。それが不思議でならなかった。

しかしこの大聖堂にある聖物は、建物の規模もありさすがに本物だ。量産品ではなく、使徒の作った特別な呪物という意味の、本物の聖物。それを考えると、警備するために立派で大きな建物にする意味はあるのかもしれない。光の使徒の本物の聖物は、物によっては兵器になるのだから。

一般に開放されている礼拝堂に入り、周囲を見回す。この街に来たことはあっても、この中に入るのは初めてだったため、どこに行けばいいのか少し悩んだ。しかしキルスが誰かに声をかける前に、金糸で刺繍された立派な肩掛けを羽織った、小太りの僧がキルスの前に跪いた。この肩掛けは、聖堂の代表者を意味するはずだ。

「これはこれは、使徒様、ようこそおいでくださいました」

キルスはため息をつきそうになった。

今日は指輪を外しているため、見る者が見れば分かってしまうのだ。指輪は力を封じるためだけでなく、このように跪かれないためにも役立っている。聖職者にとって、使徒と親しくなる事こそが出世の最短の道である。買い物をしているだけで跪かれてはたまったものではない。

特にこの大聖堂は、それなりに有名な使徒のために建てられた物だ。そこの聖堂長ともなれ

ば、野心がないはずもない。使徒を敬う気持ちがあるのかどうかも怪しいものだと、キルスは思っている。

「お立ちください。僕はあまり目立ちたくありません」

「ああ、平服でおこしくださったのに、気がつきませんで申し訳ありません」

キルスは死霊術師としての装備は全て宿に置いてきて、術者に見えない他所行きの服を着ている。彼の言う平服とは、使徒のための法衣ではないという意味だと分かっているが、若干腹が立った。

元々少なかった罪悪感も、綺麗さっぱり消えてしまった。

「実は不死者狩りの事で、少し相談があって参りました」

顔を上げた聖堂長の目がぎらついていた。

「ここでは何ですので、こちらへ。ああ、君、使徒様に茶を」

使徒と聞いて寄ってきた内の一人に、聖堂長は命じた。

「はい、かしこまりました」

「お構いなく」

キルスは若い尼に笑みを向けると、彼女は顔を赤らめて静かに一礼して去って行く。

この反応はキルスが使徒だと思っているからなので、複雑な心境だった。

応接間に通されると、キルスは椅子に腰掛けて指を組んで手をテーブルに置いた。

「して、不死者狩りとは？」
「吸血鬼狩りをしたいのですが」
「吸血鬼っ!?」
聖堂長の目がぎらりと輝いた。やはり、出世欲は強いようだ。ここで使徒の手伝いをして、不死者の中でも大物であり滅多に退治という流れにはならない吸血鬼を狩れば、当然注目されるから、食いつかないはずがない。
「大したことではありません。封じて力を削ぎ終えたまま忘れられていた吸血鬼を発見したので、これから滅ぼすのです。何ら危険はありません」
「なるほど。それですと危険はなさそうですな。その段階で、私は何をお手伝いすればよろしいのでしょうか」
危険のない単純作業と聞いて、内心では落ち込んだだろう。このような事で助力したなどと吹聴すれば、どんな使徒だって呆れる。大切なのは実績ではなく使徒の覚えであり、そのような行いをしては逆に出世は遠ざかる。
「道具を貸して欲しいのです」
「道具を？」
吸血鬼狩りの道具は、それなりに素材が高いため、簡単に貸し出せる物ではない。
「はい。吸血鬼に限らず、感染型の不死者狩りは万が一の時のために、過剰なほどの道具を用

意するのが鉄則なので取りに戻ったのですが、不運にも管理している者が出ていて当分戻らないらしく、保管場所が分からなかったのです。万が一、自分達の手違いで逃がして被害を広めてしまっては大変なので、念のために貸して頂ければと思いまして。無理は承知ですが、月の満ち欠けの関係で、今を逃すとしばらく待たなければならなくなります」

簡単に貸し出せる物ではないが、彼にとって敬うべき『使徒様』が頼んでいるのだ。

「ああ、なるほど。あまり使う物ではありませんから、管理者がいないと見つけられないのも仕方がありませんな」

「ええ。困ったものです」

「分かりました。他でもない使徒様の頼みですのでお貸しいたします」

道具を貸すだけなら、格安で使徒に恩を売る事が出来て彼に損はない。

キルスが使徒であることは彼にとって確定事項である。そして光の使徒はよく不死者狩りを頼まれ、この話は有り得るように見えるだろう。

ただ、光の使徒の力を持っているだけの死霊術師だということを告げずに貸してくれと言っているだけ、必要な情報を与えていないだけだ。嘘は一つもついていない。

彼の不幸は、キルスの事を知っているのはごく一部だけだという事だ。光の使徒が闇の女神の信者で、死霊術師をしているなど、大っぴらに言える事ではない。そのせいで、勧誘に来る近所の聖堂以外では知名度は低い。近場なら知っていてもおかしくはないが、ここは距離があ

るから、彼ぐらいの立場なら知らなくて当然なのだ。
「ああ、ついでに聖光水晶（プレス・クオーツ）も分けていただきたいのですが」
「聖光水晶ですか……」
不死者退治で聖光水晶は使い捨てだ。貸すのと違い、おいそれと頷けないだろう。それでも結果的には分けてくれるはずだ。
だが、ここでキルスは眉（まゆ）を寄せて、申し訳なさそうに続ける。
「僕の実家では聖光水晶を使ったばかりで、備蓄がほとんどなかったんです。あまり持ち合わせがないのですが、どれぐらい分けていただけるでしょう」
金を払う意志があると知れば、当然気が緩む。
一度きりの相手なのでタダでふんだくるのも手だが、それではせいぜい一つか二つが限度だろう。
しかし金を払う気があると知れば、当然考えを変える。大きな損をしない程度、格安で譲ってくれるはずだ。
「封じる前はとても強力で恐ろしい吸血鬼だったそうです。封じる事すら困難で、長期間放置せざるをえなかったほど。万が一の事があるので、物は良くなくていいので、数を揃えたいんです。持ち合わせはこれだけなのですが」
キルスは聖光会から普通に買おうと思えば、一つしか買えない金額を差し出した。これでも

庶民にはかなりの大金だ。しかし金を持っている聖光会の高僧にとっては、はした金である。

その事実が、格差が、たまに憎い。

「そうですね……」

聖堂長はじっと金貨を見て悩む。

普通に買おうと思えば一つしか買えない。しかし仕入れ値で考えれば二つ分にはなる。しかし二つでは当たり前すぎて大した恩にはならない。

「ああ、そうだ。後はこれが」

キルスは身につけていた腕輪を外した。これは実家から持ってきた、キルスが作った呪物である。

それを見て、聖堂長は目の色を変えた。

「素晴らしい」

彼はちゃんと見える力のある僧だ。当然、これの価値が分かる。だからこそ、欲が出るのだ。

「分かりました。ちょうど質の良くない使い捨て向きの聖光水晶があるのです。それをお出しいたしましょう」

たまたまであることを強調して、彼は承諾してくれた。

このような事は一度きり。

そう、一度きりだからこそ、成り立つ交渉だ。

「ありがとうございます」
キルスは顔を歪めて笑いたくなるのを堪えて、微笑んだ。
「では、こちらへ。ついでに当大聖堂のご案内を致します」
「本当ですか。僕は歴史のある建造物が好きで、一度ゆっくり見物したいと思っていたんです」
道具を返しに来る時には、彼はきっと真実を知っているだろう。その時にどんな顔をしているのか、想像するだけでわくわくする。
人の下心を裏切るというのは、とても楽しいものなのだ。

キルスが実家に戻ってから、一週間が経ち、この一週間は、ルフィアスにとって忘れられないものとなった。
わずかに切った指からは、赤い血が溢れてくる。血は命の源。街の住人から分けてもらった、大切な糧。
「おまえ、ぶきよーだな」
「ほっといてくれ」

林檎の皮を剥いて指を切ったルフィアスは、リザイアの心ない一言にいたく傷ついた。これも、討ち滅ぼす練習として林檎でも切ってみたらと言ったルグラスが悪い。あと、リザイアを置いていったキルスも悪い。彼はよほど退屈なのか、ルフィアスが何かするたびに何か余計な事を言うのだ。

吸血鬼は血でしか満たされないが、味覚はあるので嗜好品を嗜めるから、林檎を味わう事も出来る。

「ひとには、むいていること、むいてないこと、ある」

「分かっている」

ルフィアスは指先に魔力を込めて傷を癒し、その指先を口に含もうとしたところ、横からリザイアが首を伸ばして指を舐めた。

「やめろ、気色悪い」

「おまえ、うまいな」

「まさか、吸血鬼になってからも捕食対象になるとは……」

血を与えるのは伴侶を得る——吸血鬼化させて同胞とする時だ。

不死者だから何もないが、人間が真似したら大変だ。気を付けねばならない。

もちろんこの程度の血では吸血鬼になどならないはずだ。だが、どれほどの血で吸血鬼になるかの許容量が分からない。危険は少しでも避けるに越したことはない。

「あたま、しびれない。ちんみちがう。とても……びみ！」
「どうせなら美女に言われたいよ」
「おんなきらいなのに？」
「女性は好きだと言っている。ただ、女性を目の前にすると足が竦んで頭が真っ白になるだけだ」
「なんぎ」
リザイアはルフィアスの手から林檎を取り上げて、するすると皮を剥いてしまった。それを食べやすい大きさに切って、皿に載せる。慣れた手つきだ。
「それを人間に喰わせるなよ。私の血が付いている」
「じゃあ、おれたべる。おれ、りんごも、すきだった、きがする」
リザイアは林檎をナイフで刺して持ち上げ、しゃくしゃくと咀嚼した。
「あまい、きがする」
「気でもすればいいさ。何も感じないよりは」
「ありーさにも、たべさせたいな」
「アリーサ？」
「きるすの、いもうと。らきあと、おなじぐらい。ちいさくて、かわいい。いつも、もに、ふくしてる。いいこ」

「喪に服しているのか……」

「みんなまじめ。しりょーじゅつし、へんじん、おもわれてる。ふつうにしていないと、もっとひどくなる。だから、みんな、たいどで、いんしょうをよくしてる」

「……それは、キルスが？」

「きるす、そういうやつ。いつもかんがえてる。まだこどもなのに、むずかしいこと」

子供と一括りにするには大きく、大人と言うにはまだ小さい、大人と並ぶために背伸びをする年頃だ。彼は責任のある仕事をしてそれを誇りに思っているから、精一杯背伸びをしているのだろう。

あの年頃のルフィアスは、普通に青春を謳歌していた。まだ女性が恐ろしいとは思わず、ちやほやされていい気になっていた。青年に近づいた頃、その中から選んだ美しい少女は、ルフィアスの容姿だけではなく、財産――むしろ財産こそが目当てだった。

彼女以外は、今後の収入が減ったとしてもついてきてくれただろう。別に破産したわけでも、借金があったわけでもない。豪遊しなければ十分豊かな生活が出来たのだ。

なのに、そんな女性を選んでしまった。自分の見る目がなかったのだ。

そのことをぐだぐだと悩むうちに歳を取って周囲からも一人前として扱われるようになり、ワイン造りが軌道に乗った頃に、あの女と出会った。

初めは美しいその人に魅了された。夜にしか会えない女を不審に思う事はなく、部屋を訪ね

てきた事に疑問も抱かなかった。

それが、吸血鬼の本来の力だ。

また来て欲しいと思うようになり、身体が弱り、ルグラスが首元の噛み跡に気付いてくれた。

そこで初めて彼女が吸血鬼だと知り、まずは母や弱い者達を避難させた。

ルフィアスが逃げなかったのは、彼女に悪意はなく、ただ血を飲みに来ていただけだと信じていたからだ。ルフィアスは人よりは魔力が高かったので、乙女でなくても美味しかったのだろう。

だからユシェールに、逃げるよう忠告しようと思っていたのだ。

気付かれたことに気付いた彼女は、本性を現して抵抗するルフィアスを押さえつけ、意識が白濁となるまで血を啜り、そしてルフィアスが血を欲するようになるまで、自らの血を飲ませた。

それからの日々は、あまり思い出したくはない。だからもう、彼女を討つことに躊躇いはないはずだ。

ただ、怖いだけだ。

吸血鬼退治といえば、心臓に杭を打ち込むのだ。それを考えると怖い。しかしそれは、乗り越えなければならない恐怖だ。皆のために。支えてくれた人達のために。

その頃に生きていた人々のほとんどは死んでしまったが、その子孫達は、吸血鬼だからと嫌

わずに、普通に接してくれている。
それが彼の救いだった。昔に比べて、弄られる事が多くなった気はするが、それを率先していたのはルグラスだから、若い者達がそれを真似るのも仕方がない。
「きるす、きた」
リザイアは立ち上がり、嬉しそうに言った。
彼は血を届けに子供達が来た時も遊んでやっていた。本当に子供が好きなのだ。
リザイアが予告した通り、しばらくするとキルスは二人がいた談話室に通された。相変わらず怪しい身形である。しかも以前よりも身につけている呪物が増えていた。小さな身体にじゃらじゃらと装身具をつけている。それが不思議と似合っていた。
「きるす、おおきくなったな」
「え、ほんと……なるはずがないでしょう！」
一瞬喜びかけたキルスは、すぐさま我に返り怒鳴りつけた。
彼は背丈を気にしているらしい。この年頃は個人差が大きいため、同年代の少年よりも小柄なのが気になるのだろう。ルフィアスは子供の頃から背が高かったので気になったこともないが、友人はとても気にしていた。
とても懐かしい時代だ。
「けはいが、おおきくなった」

「気配が？　これのせいですね」
キルスは背負っていた荷を下ろした。
「これは光聖会から借りてきた、由緒正しい吸血鬼狩りの道具です」
荷を解き聖化された杭を取り出した。その神聖な気配に、ルフィアスは息を呑む。これはルフィアスにとっても危険な物だ。
「怯える事はありません。これはリザイアが持つ剣と同じ。人に向ければ凶器。しまってあればただの物。人でなくなりただの剣が恐ろしくなくなったお前は、人にとっては凶器となり得る物がそこら中に転がっている事を、ただ忘れているだけです」
その通りだ。か弱いと言われ、皆に守られながらも、夜であればルフィアスはこの地の誰よりも頑丈なのだ。
「よく貸してくれたな」
「指輪を外して吸血鬼狩りをすると言ったら、快く貸してくださいましたよ」
彼はラキアですら使徒だと言ったほど、分かりやすい力を持っている。
「それは……詐欺というのでは？」
「失礼な。ちゃんと本名を名乗ってきました。死霊術師だと名乗らなかっただけで、何一つ嘘はついていません。僕のことを知っている問い合わせ先も教えてきましたよ。忘れなかったら、後でちゃんと返しに行きますし」

「悪魔かお前は」

キルスはルフィアスの言葉は気にせず、リザイアに手に入れた聖光水晶（プレス・クオーツ）を見せた。

「リザイア、良質の聖光水晶を格安で四つも手に入れてきました」

「おお、うまいたそう」

奇妙な言葉を作るリザイアを見て、キルスは苦笑した。

「これは売って、安い粗悪な聖光水晶を買います」

「え？」

リザイアは指をくわえて聖光水晶を見つめた。どうやら美味しそうなこの聖光水晶を食べたいようだ。

「これを食べるなど贅沢（ぜいたく）すぎます」

「つかわない……かえせ、いわれないか？」

「お金を出して買ってきたんです。返せと言われるいわれはありません。対価を受け取った以上、等価だと判断したのでしょう」

リザイアは首を傾（かし）げた。

「僕はちゃんと吸血鬼狩りをしたいから、念のために数が欲しいと言いました。正規の価格で一つは買える金額を出し、どれだけ融通してもらえるかと尋ねました。それはつまり、人々のための施しです。もし悔しがるようなことがあるなら、それは聖職者のくせに下心を出したの

が悪いのです」
「おお。いいかえしにくい」
確かに痛いところを突いている。このようなことを、純粋な目をして首を傾げながら言ったら、言い返しにくいだろう。
彼が使徒であるのは本当で、いつ光聖会に入るか分からないとなれば、泣き寝入りするしかない。
「街の皆は騙すなよ」
「どうでもいい相手との交渉と、末永く付き合いたい方々との交渉を、同じようにするはずがないでしょう。許容範囲内はだいたい分かっています」
相変わらず発想が子供らしくない。
「仕方がないので、一つだけリザイアに渡しておきましょう。こうすれば、ちゃんと吸血鬼狩りに使ったと胸を張って言えます。万が一の時は食べなさい。万が一の時だけですよ」
キルスは魔方陣が刺繍された小さな袋に聖光水晶を入れて、リザイアの首に掛けた。リザイアが痛がらないので、力がもれないような袋なのだろう。その様子を確認してから、キルスはルフィアスに向き直る。
「ルフィアスにはこれを」
キルスは首に掛けていた首飾りを外した。

「これは？」
「魔眼などの支配を打ち消す事が出来ます。親吸血鬼が相手なのでどこまで効果があるか分かりませんが、少しでもよく効くように肌に触れるようにして身につけていてください」
「わ……分かった」
ルフィアスは首飾りを受け取り、憂い顔でそれを見つめた。
怖くないと言えば嘘になる。色々思い出して不安でたまらない。
「早速ですが、狩りは今夜行いましょう」
キルスが言うと、ルフィアスは驚いて顔を上げた。
「今夜？」
「正確に言えば夜のうちに万全の準備をし、明け方に決行します。明日の夜は吸血鬼の力が強まる満月。冬の満月は特に力が強く、半月ほどその余波があります。満月になる前の、最も光が清浄になると言われている日の出の時間に決行するのです」
「そうなのか。日の出の光は直接当たらなくても眩しいと思っていたが……」
そう見えるのは、肉体が滅びるまで永遠に触れる事の叶わない清浄な光に焦がれているのだと、自分の心因的な物だと思い込んでいた。
理由があったと知って、未練がましい己に嫌気がさしていたルフィアスは、心が少し軽くなった。

「お前には辛い時間かもしれませんが、鉱山内なら日光も届かないから、平気でしょう」
「しかし、キルスは長旅で疲れているだろう？」
「僕は若いんです。馬車の中でよく寝て来ましたしね。早めに行動したいのは、死霊達をどけなければ、巻き込んでしまうかもしれないからです。無害な彼らを穏便に除けるには時間がかかるかもしれません。それとも何か不都合があるのですか？」
「ルグラス」
ルフィアスはキルスの後ろにいた執事に目を向けた。
「ご予定はございません」
「危険だからお前は」
「道がお分かりに？」
ルフィアスは沈黙した。あまりに前のことで道が分からない。元々、方向感覚はあまり良い方ではないのだ。
「私は最後まで、お供いたします。それに旦那様は、私が見張っていないとヘタレて手を抜いてしまわれるやもしれません。しっかりと、見届けさせていただきます。そうしなければ、私は死んでも未練で現世に残ってしまうでしょう。私の孫達は昔の私のように可愛いので、心配でなりません」
「まあ、皆可愛いがな。亡くなったお前の妻に似て」

「だからこそ、私も孫達を守らなければなりません」
ルグラスはキルスが持ち込んだ荷を背負った。
「おれがもつ」
「無理です。お前だと持っているだけで腹が減るでしょう。それと、この荷物は街に届けてもらうための物です」
キルスは荷を背負ったルグラスに視線を向けた。
「ルグラスさんには、これを届けて欲しいんです。聖堂で相談し、適切な配布をお願いします」
「ですが、案内は」
「現地の死霊達に聞けばいいのです」
「騙そうとしたりするのでは？」
「これでも専門家なので、大丈夫です。危険な場所はないでしょう？　ガスが溜まっていたとしても、二人は死んでいますし、僕には呪物があります」
キルスは自信たっぷりに言った。ルフィアスがどれだけ言っても聞かないのに、ルグラスは悩みはじめた。人は『専門家』という言葉に弱いのだ。
「それも使うことはないでしょうし、昼間は確認するだけで、夕食の時間には一度戻ります。もし日が暮れても戻ってこなければ、何かあったと思って備えてください。この役目がいない

と、話になりません。それには皆さんに信頼されている方でなければならないので、お願いします」

「……分かりました」

キルスは着いてきたがったルグラスを、あっさりと理詰めで丸め込んでしまった。ルフィアスが説得したなら、丸め込まれるのはルフィアスの方なのに。

子供に負けたという現実に、打ちのめされそうだった。

「馬を僕らが借りても良いですか？」

「どうぞ。私は日頃から鍛えておりますから。聖堂までは近いので、そこからは若い者の手を借りましょう」

「ありがとうございます。では、行きましょう」

有無を言わせず強引に、キルスはルフィアスの手を取った。相変わらず少女のように牙を突き立てたくなるような、白く滑らかな肌だった。

「腕で良いから噛んではだめか？」

「……食事がまだなら待ちますが」

「いや、突然食欲がわいてきただけだ。忘れてくれ」

キルスはくすりと笑い、琥珀色の目を細めてルフィアスを見上げた。

「そういう事は、終わってから言いなさい」

そう言って、少し身を屈めていたルフィアスの額を指で突いた。
「終わったら良いのか？」
「その時は、我慢せずに殴り倒して差し上げます」
可愛らしい見た目に反して、実に乱暴な子だった。

死霊が集まる理由にはいくつかある。
空白地帯であったため、高い場所から低い場所へと水が流れ込むようにして集まってくる場合。
自然環境など土地そのものが大きく変わり、集まりやすい場所になってしまった場合。
何か場を汚す存在がいる場合。
普通聖光水晶（プレスクォーツ）の廃鉱山に集まるのは一つ目だが、今回は三つ目が原因だ。封じられた吸血鬼の怨念（おんねん）が死霊を呼び寄せている。聖光水晶があるからあまり近づけないため、入り口に溜まっている。
キルスの予想通りであり、予想外でもあった。
「まえが、みえない。きるす、うようよいすぎて、まえ、みえない」

死霊密度が高すぎて、ランタンを差し出しても向こう側が見えなかった。
このような力の弱い死霊は透けて見えるので、向こう側が分からないというのは、すさまじい数がここにいるのを意味している。
「霊感がまったくないと、何も見えないのですが……これが見えてしまう弊害ですね」
「キルス、どうするんだ？　光の呪物でどうにかならないのか？」
「僕は死霊術師ですよ。今あるのは大した力もありませんし、何があってもそんな物は使わないので、ルグラスさんに任せた荷物に入れておきました」
ルフィアスの顔が引きつった。
死霊達は悪意を剥き出しに、キルス達を取り囲んだ。肉体を持たない死霊は弱いとされている。だからここまで挑発的なのは珍しい。
「よくこんな場所で胆試しなど……」
「五年ぐらい前に救出に行った時は、もっと控え目だったんだが……最近救出に呼ばれなくなったのは、まさかこれが原因か？」
ルフィアスは死霊達に気味悪がるような目を向けている。
「かもしれませんね。ここまでひどいと入り口で引き返すしかありませんから」
無害な蝙蝠も、一面を覆い尽くす群れになるとさすがに気味が悪いのと同じだ。突撃する馬鹿はいまい。

「なんで、こうなった？」
「何かが原因で死霊達が強くなった、もしくは比較的強い死霊が入ってきた」
「強い死霊？」
「僕らにとっては見分けがつかないぐらいなんですが、たまにある現象です」
理由などどうでもいい。どうせ調べようがないし、吸血鬼さえいなくなれば彼らを引き寄せるものもなくなる。
今すべきはたった一つだ。
「……お前達、静まりなさい。僕は死霊術師のキルス・エルヴァン。お前達、僕の声を聞き静まりなさい」
骨を削り組み立てて作られた杖を掲げると、泳ぎ回るように動いていた死霊達はピタリと止まった。
『ああ、妬ましい』
『若い、綺麗、生きている、苦しくない』
『死ねばいいのに』
『死ねばいい』
『死ね死ね死ね死ねっ』
死霊達は生者を妬み、騒ぎ出し、そして先ほどよりも激しく荒れ狂った。

死ね、妬ましい、憎らしいと上で下で後ろで前で、耳がおかしくなりそうなほど騒ぎ立てる。
「キルスっ、本当に大丈夫なのかっ!?」
ルフィアスがキルスを疑うような目を向けた。
確かに、キルスの死霊術師としての力は心もとない。しかし、この程度のことで実力を疑われるなど、不愉快だった。
「舐めないでいただきたい。この程度のこと、何ほどでもありません！」
キルスはそう言うと、キルスを守るように立っていたリザイアに杖を押し付ける。そして指輪を外した。
抑えられていた力が漲ると、声に力を乗せて、慈しみの心を持って彼らに向き合った。
正しく使えばこの力も悪い物ではない。力加減さえ間違わなければ、清浄な光で彼らを優しく導く事が出来る。
「お前達、僕の話を聞かないというのは、消滅を意味することを覚えておきなさい！」
光の気配を感じ取り、死霊達の動きがぴたりと止まった。その内の何体か、それだけで天に昇って成仏した。
「よし、素直になりましたね。人は生死に関わらず素直が一番です」
キルスは指輪を戻して、呪物を受け取り、もう一度杖に魔力を込める。
「エルスの杖よ、さまよえる魂達を静めたまえ」

杖の核となった先祖の名を持つ杖に願い、彼らにキルスの意志を届ける。
「いや……その杖、使う意味があるのか？」
死霊術を使うキルスに、ルフィアスが問う。
「もちろんあります。死霊術の力が足りない分、こうして意識せざるをえない状況を作るのです。こうすれば杖は正常に動きます」
「だが、自主的に成仏してしまった者がいたぞ。今のは光に怯えて、現世にいたくないとまで思われたという事だろう？」
「きるすこわい。しがみつくやめさせた。えらい？」
勝手な事を言う不死者達を無視して、キルスは落ち着いていそうな老人の死霊を見つめて続ける。
「ご老人、ここに封じられた――」
キルスが見つめていた老人の死霊は、ふっと成仏した。
何もしていないのに、また成仏してしまった。
「くっ……人が話しかけているというのに、なんて失礼な！」
「話しかけるだけで成仏するとは……本当に恐ろしい力だな」
キルスは大きく深呼吸をして、今度は杖に語りかける。手はまだあるのだ。
「お前の力が足りないのです。逃がさないよう、もっとしっかりと呪縛しなさい」



杖がわずかに震えて応えたのを感じると、キルスはもう一度、今度は健常そうな若者の死霊に尋ねた。

「ここに封じられた吸血鬼の元まで案内してください」

『きゅ、きゅうけつき？』

今度こそ、答えた。杖が協力的になって、暫しの間、成仏できないように呪縛してくれたのだ。

「い、今の、杖を脅迫してなかったか？」

「きるすのしりょーじゅつ、きほんてきに、きょーはくして、むりやり、かかりやすくする」

「呪物には意志があると言われているが、まさかこんな方法が……」

「きるす、きかくがい」

キルスはひそひそと囁き合う不死者達を無視して、もう一度問う。

「お前は吸血鬼の居場所を知りませんか？」

『俺はさっき来た。お前知っているか？』

青年は怯えながら別の青年に尋ねた。

『えっと、ここ真っ直ぐ行った方だろ。途中から行けなくなる。俺はもうこれで』

「待ちなさい。お前、ここの気配が強いから古参ですね。案内しなさい。用済みになったら成仏させてあげましょう」

逃げようとした死霊に杖を向けて命じると、彼は慌てた様子で首を横に振った。
『いやいやいや、もういいです。今なら自分で逝ける気がします』
「無事に輪廻に戻りたければ案内しなさい」
『……は、はい』
死霊のくせに泣きそうな情けない顔をして、渋々頷いた。
「余計な事を考えたり、ましてや騙そうなどとしたらどうなるか分かっていますね？」
『は、はひっ』
キルスは指輪をはめた手で杖をしっかりと握り、前に出る。すると鬱陶しいほどいた死霊達は一斉に道を開けてくれた。
「素直でよろしいですね。やはり知性のある存在は素晴らしい」
「ちせいって、きょうはくが、きくもの？」
「黙りなさい。目的のために手段など選べない時というのがあるのです。甘やかすばかりが死霊術ではありません。結果さえ正しければそれで良いのです」
それだけ言うと、震えて姿が希薄になっている若者の死霊の後に続いた。

ここは奇妙な廃鉱山だった。わずかな聖光水晶の気配と、瘴気がせめぎ合っている。明かりを掲げて急ぎながらも慎重な足取りで進むキルスは、絶妙な按排に感心した。これだから放置していたのだ。人間が何かしない限りは、不死者では絶対に出られないだろう。

『あの、もうそろそろ……ここ、こわい……』

「仕方ないですね。成仏していいですよ。安らかに眠り、然るべき時輪廻に戻りなさい」

キルスは呪縛していた死霊を、優しく成仏させてやった。

「……やすらか？」

「黙って明かりを持ちなさい」

キルスは杖を掲げて気配を探る。ここまで来れば、杖が汚れを教えてくれる。

「キルス」

ルフィアスに呼ばれて、振り返る。

「……血の……臭いがっ」

「は？」

「奥から、血の、人間の血の臭いがする」

リザイアの持つランタンに照らされる悲壮な顔を見て、キルスは彼の視線を追う。

「野生動物でもなく人間の血？」

ルフィアスは堪えられなかったのか、突然走り出した。
「リザイア、危険なので止めなさい」
「おう」
リザイアはあっという間に追いつき、ルフィアスを羽交い締めにする。
「僕が先頭です」
「まだ新鮮な臭いなんだっ」
「だとしたらなおさらです。何があるのか分からないのに、吸血鬼が親吸血鬼に突撃するなど愚の極み。僕がお前を追いかけて息を切らしたらどうするのですか。お前には一人で親吸血鬼に対する手立てはないでしょう。人質になって足手まといになりたいのですか」
「っぐ」
「ですが少し急ぎましょう」
キルスは足を速めた。全力で走ってはすぐに体力が尽きてしまうから意味がない。足場も悪く、転んでは痛みで余計に走れなくなる。
何かをしなければならない時、調子をおかしくするような身体の使い方をするのは、術者として最も愚かな行いだ。
逸る気持ちを抑えつけ、冷静に、冷徹に。
感情に左右されれば、足首を掴まれて底なし沼に引きずり込まれる。これはそういう世界だ。

「近い、俺にもわかる」
リザイアが臭いを嗅ぎながら呟いた。前に聖光水晶を食べてから一週間が過ぎ、程よく回復しているのか、血の臭いを嗅いでしっかりとした口調で発言をした。
血に酔って暴れないといいのだが、ここで聖光水晶を喰わせると呆けて戦力にならなくなる。
程よく牙を持っている今が、ちょうど良いのかもしれない。
キルスは用意していた短剣を抜いた。
「それは……」
ルフィアスが呻くように言った。
「対不死者用の武器です。地下だから派手な魔術は使えないので、直接やります。威圧感はあるでしょうが我慢しなさい」
靴紐はしっかりと結んである。マントは邪魔だが、相手が不死者だと対魔装備でなければ危険なため外せない。幼い頃より、武術の心得はある。リザイアと正面から闘うのは無理だが、魅了に頼る吸血鬼ぐらいならわけもない。
視線を上げると、光が見えた。
「ひかりっ、誰かっ、ここにっ」
向こうからもこちらが見えたらしく、若い男の声が響いた。
「ルソっ!?　なぜこんな所に!?」

「待ちなさいと言っているでしょう」
キルスは駆け出そうとしたルフィアスの腰に抱きついて止めた。
「血の臭いがするのであれば、復活している可能性が高い。ルソが人質に取られて、待ち構えている可能性もあります。素人は前に出ないでください。彼を殺したいのですか」
血さえ流れていなければ、このように警戒などしていない。弱った吸血鬼など恐ろしくもない。しかし吸血鬼は、血さえあればすぐに回復してしまう。
キルスは頭が回っていないルフィアスに代わって呼びかける。
「ルソ、そこにいるのはルソですか」
「……た、助けてくれ、あしが、動かないっ」
助けを求める声が聞こえた。ただ転んで動けなくなっている可能性もある。
「そこに女の吸血鬼はいますか？」
「い、いないっ」
「……吸血鬼がいたんですね？」
「いたっ、今はいない。あいつ、あいつっ」
キルスは舌打ちして、駆け出した。
精一杯の用心をしながら、ルソのいる場所に辿り着いた。
他よりも開けた場所だ。地面には封印の痕と、何匹もの干からびた小さな動物の死骸がある。

そして、その片隅に男が倒れていた。
「ああ、ルフィアス様」
俯せに倒れていたルソは、顔を上げて泣きながらルフィアスの名を呼んだ。
「足を怪我しているのですか」
外はまだ日が出ている。吸血鬼では街まで辿り着けないだろう。
だから今は目の前で生きているルソが優先だと判断し、その傍らにしゃがみ込んだ。
「痛みはありますか？」
「足は痛くなくて、腕の方が痛くて。でも……足はぜんぜん動かねぇ」
痛みがなくて、動かない。
キルスはルフィアスを見上げた。彼の悲痛な表情を見ると、治せないと彼が思っているのが分かった。それがルソに伝わり、彼も不安げにルフィアスを見上げた。
「ルフィアス。自分がやるべき事をなさい」
「……」
ルフィアスは応えることも出来ず、立ち尽くしている。
「せっかく生きていてくれたのです。やれることをやりなさい」
「だ、だが……私程度ではとても……」
彼は経験がある分、限界を知っているのだ。限界を知っている者は切り替え——悪く言えば

諦めが早い。
「ルフィアス、僕の血を吸いなさい」
「……は？」
「吸血鬼にとって血は力。僕の血を直接吸えば、いくらか可能性は出てきます。僕の力は破壊にしか使えないろくでもないものですが、お前を通せば彼を助ける力になるかもしれません」
ルフィアスは驚いたようにキルスを見下ろす。
「ただし、癖にならないよう、少しだけです。僕のような者の血は、麻薬のような物らしいですから」
「そういえば、高位の聖職者の血を吸うと力がつくと聞いたことが……」
ルフィアスはキルスの喉を見つめた。
キルスは不安そうにしているルソに視線を向けて、笑みを浮かべた。
「ルソ、この男が馬鹿な真似をしたら叱ってやってくださいね」
「あ、ああ」
キルスは彼が返事をするのを聞いてから、袖捲りをして差し出した。
「噛んでもいいのか？」
「血は新鮮なほど力があります。直接噛めば僕の力を多めに吸収できます」
「そうなのか」

「今まで感じたことはないのですか？」
「最後に噛んだのはずいぶん前だから……」
キルスは目を細めた。
そこまで禁欲生活をしているとは思わなかった。吸血鬼のくせに、その違いに気付かないほど吸血の経験に乏しいなど、他の吸血鬼では考えられない。彼の人徳のなせる偉業だとも言える。
「下手なわけじゃないぞ。痛がられたことはないし、むしろせがまれて困るから噛みたくても知り合いは噛めなくなったんだ」
キルスはため息をついた。
本能に打ち勝つのはいいが、吸血鬼の本能を封じすぎだ。
「新鮮であればあるほど、吸血鬼に力を与えます。直接噛まずに血を飲むと、せっかく血に宿る生気が薄れてしまいます。お前がか弱いのは、噛まずに血だけ飲んでいたからではないですか？」
「そ、そうなのかっ!?」
「仮定の話です。まあいいです。さっさと噛みなさい」
キルスは腕を差し出した。
この青年を無事に帰さなければならない。吸血鬼はどうなったとか、そういった気の重い話



は今だけでも忘れて、治療に集中してもらわねばならない。
ルフィアスはキルスの腕を取り、身を屈めて優しく牙を突き立てた。
職業柄、喰われた経験はあるが、慣れるものではない。
力が吸われるのが分かる。そのついでに、ふわふわする感覚を与えられる。魔力で身を守っているからこの程度だが、それが出来ない者が噛まれれば、ルフィアスが怯えて噛まなくなるほどおかしくなってしまうのかもしれない。
こればかりは、魔力のない者の気持ちは分からない。
浮つきそうな感覚を、自由な方の拳を握りしめて無視をする。
ルフィアスも血に酔っているのか、恍惚としている。
「もういいでしょう。それ以上は中毒になります」
「……ん」
キルスが額を指で弾くと、我に返ったルフィアスは名残惜しそうにキルスの腕から牙を抜いた。
それでもしつこく腕に付いた血を舐め、リザイアに後頭部を殴られる。
「しょうきに、もどれ」
「はっ!? あ、す、すまない。すぐに治すからっ」
ルフィアスは慌てた様子で、呪物を使い傷を治してくれる。

「え……本当に力が上がった」
ルフィアスは驚いたように自分の手を見た。治癒の感覚を確かめられたようだ。
「落ち着きましたか」
「ああ、すまない。しかし、病みつきになりそうだ」
「だから不死者に喰われるのは嫌なんです」
「こんなに美味い血は初めてだったから、仕方がないだろう。聖職者が美味いと襲う連中の気持ちが少しだけ理解出来た。もちろんそんな事をする気はないが」
言いながら、ルフィアスはルソの傍らにしゃがみ込んだ。緊張したように息を吐くと、笑みを浮かべた。
「まずは腕を治すから」
「は、はい」
ルフィアスは胸元の呪物に触れる。
「私の麗しいルシール、私に君の力を貸しておくれ」
ルフィアスは呪物に呼びかけてから、ルソの腕に触れた。するとルソは驚いたように腕を凝視し、手を握ったり開いたりする。
「すげぇ。一瞬で治った」
「よかった。今ならどんな傷でも治せそうな気がする」

ルフィアスは次にルソの腰に触れた。
「ルフィアス様、あの吸血鬼がっ」
「それは後でいいですよ。今は自分の身体のことを考えて、ルフィアスの集中を乱さない方がいい」
痛みがなくなり、何かを訴えようとしたルソを止めた。
「今はまだ日があります。ここを無事に出ることが出来れば、対策が取れます。それさえ間に合えば、吸血鬼など恐ろしいものではありません。日暮れに間に合いそうにない時間までかかるのでしたら、護衛にリザイアを置いて僕が街まで走ります。大丈夫」
キルスが説得すると、ルソは口を閉じた。
二人を安心させるように、言葉を選んで言った。ルソが気にしているのは、街の皆だろうから。
ルフィアスは目を伏せて魔力を呪物に注ぎ込む。
呪物の中心にある青みを帯びた月長石（ムーンストーン）が清浄な輝きを放ち、二人を包み込む。
「……きれいだな」
リザイアは地面に座り、その光を眺めた。先ほどまでは興奮していたが、ルソの無事を理解して、また呆けている。
「月長石は人を癒す神秘の石。月の石。つまり月で魔力が増大する吸血鬼にも優しい石です。

ルシールという女性が呪物化したのでしょう。女性が作り出した呪物は、美男子が大切にしてくれると張り切ります」

「きょうはくする、きるすとは、おおちがい」

言い返そうかとも思ったが、言い合いはルフィアスの邪魔になるため、文句を呑み込み穏やかな口調で続けた。

「とても強い石なので、きっと芯の強い、心優しい方だったのでしょう。医療従事者だったのかもしれません。そういった呪物を作り出すことは、僕には決して出来ません」

「どうして？」

「僕が身につけているだけで、熱か光の力を持つ呪物になります。生涯を掛けてただ一つを作り上げた呪物には届きません」

「いってんものか。キルスもたいせつななにかを、ずっとみにつけていれば？」

「大量破壊兵器を作り出すかもしれないので恐ろしくて出来ません」

「あー、それは……ほどほどがいいな」

リザイアは納得して頷いた。

「ルフィアスはいいな。オレも、こわすしかできない。たすけられるのは、いいな」

「そうですね」

「キルスはえらいな。チカラあわないのに、たすけてる。キョーハクだけど」

「黙りなさい」
「オレ、わすれてる。なにか、たいせつなこと、わすれてる」
リザイアは何か思い出そうとしているのか、不安定な話し方をしだした。
「そうですね。余計な事は言えるのに、大切な事は忘れています。しかしそれは仕方のないことです」
「いし、くわなくてもおもいだせない」
「不死者は死因に関することを忘れる場合が多いのです。自己防衛本能なのでしょう。聖光水晶を食べているのは関係ありません。不死者として成長すれば次第に思い出します。聖光水晶を喰らっていれば、リザイアなら数ヶ月以内には可能かもしれません」
「あれをくってれば、おもいだせるのか？」
「ある意味、荒修行しているようなものですから」
「そっか……」
リザイアは膝を抱えて考え込む。死んだら悩まなくていいと思う者も多いが、心がある限り、死んでも悩み続けなければならない。
「あ、おわった」
リザイアが立ち上がって言った。
光が収まると、ルフィアスは後ろに倒れかけてリザイアに支えられた。顔色は変わらないが、

負担が大きかったようだ。
「足がすげぇ痛い……」
ルソは顔を顰めて、まだ完治していない足を見ていた。
ルフィアスに血を吸わせたかいはあったようだ。
「何も感じないよりはいいでしょう。痛みがあるということは治れば動かせるかもしれません。感謝しなさい」
「そ、そうか……」
「背負われることは出来ますか？　痛みが強いのなら、結界を張ってから後で担架を持って迎えに来ます」
「た、たぶん大丈夫っ」
ルソは置いていかれるのが嫌だったのか、脂汗をかきながらも上半身を起こす。
「それよりもっ、アレフとギーリルを」
「あの二人が、一緒にいたのかっ!?」
ルフィアスがルソに詰め寄るように前のめりになった。
「俺が……俺が悪いんです。またあいつら、賭け事のことで喧嘩してっ、あんたがおばさんと鉱山の話をしてるの聞いてたから、一緒に遊んで、ついでに小金にでもなれば仲直りするんじゃないかって、俺が、誘って……俺だけはこれがあるから、痛めつけられただけでっ。こい

つもちゃんと違和感を教えてくれたのに、それを聖光水晶が近いんじゃないかって勘違いして……」

ルソは聖光水晶と交換した耳飾りの呪物に触れて荒い息を吐き、また涙をこぼした。

「後悔は後でなさい。二人はどうしたんですか」

「あ、あの女に何かされて……吸血鬼にされてっ、連れて行かれたんだっ」

ルフィアスの顔が強張った。

「わ、私が……」

「だから後悔は後でなさいと言っているんです」

キルスはルフィアスの言葉を遮った。

「だがっ」

「おまえも吸血鬼でしょう。吸血鬼になる事が大変なのは分かっていますが、二人はお前と同じように存在しているんです。それを言うなら、分別のつかない若者に呪物を甘い認識で渡してしまった僕も同罪です」

小さな子供でもないから、冒険はしないと思っていた。大人を動かすのは金だ。一攫千金という言葉は、若い彼らには魅力的だったようだ。分別のつく年齢のニーゼですら考えたのだから、もっと皆に対してもきつく言うべきだったのだ。

「吸血鬼にされてしまったのなら仕方がありません。とにかく彼らを助けましょう。聞く限り

では、美男子でもない男なんてゴミクズ扱いしそうじゃないですか」
失礼だが、二人の容姿は美男子と言うほどではなかった。
「そ、そうだ。あの女は自分の好みに合わない男など、使い捨てにするっ」
ルフィアスは立ち上がり、ルソに手を貸そうとした。
「リザイアが背負います。ルソ、この葉は苦いですが、痛み止めの効果があります。噛んでください」
「あ、ありがとう」
キルスは用意していた痛み止めを手渡し、次に袖を捲り、ルフィアスに命じた。
「ルフィアスは薬が効くまでの間に、もう一度血を吸いなさい」
「そんな時間はっ」
「ただでさえ弱いのに、ふらふらしていては足手まといです」
「わ、分かった」
焦りは禁物だ。
こういう時に焦っては、ろくなことにならないのを、経験上、いやというほど知っている。

死霊達がたむろっている場所まで来ると、キルスは怯える彼らに尋ねた。
「誰か、女と男二人が通ったのを見ませんでしたか？」
『あ、あっち』
怯えながら印がつけられた出口がある道を指さした。
「あれ、来たときよりもなんか減ってる？」
「キルスが怖くて成仏したのだろう」
死霊が少ないことに疑問を抱いたルソに、ルフィアスが簡潔に答えた。
それからさらに戻り、出口までやって来た。
「そこの死霊、女と男二人が来ませんでしたか？」
『そ、そこから出ていったよっ』
と、ふくよかな中年の女の死霊は日差しの注ぐ外を指さした。
鉱山の出口は日を遮る物は何もない。
「ユシェールが外に出た!?　いつ!?」
『あんた達が来る、ちょっと前だよ』
「なぜその時に言わないんだ!?」
『知らないよ。聞かれなかったからね』
キルスは舌打ちした。死霊達が出来るのは、人を騙す事だけだ。黙っているなど容易だろう。

「ほとんど何も身につけていないのにどうやって!?　アレフとギーリルは!?　何かすっぽりと隠れるような物を持ち込んだのか!?」

ルフィアスは半狂乱になって頭をかき乱した。

『女が男を日よけにして木陰まで移動していた』

皆は絶句した。

キルスは予想すらしていなかった自体に、一瞬、頭が真っ白になった。キルスでこれだけ衝撃を受けたのだから、ルフィアスとルソはしばらく立ち直れないだろう。

「その男二人は……どうなったのですか」

『灰になって、服まで取られたよ。美人は本当に恐ろしいね』

ルフィアスが倒れかけて、リザイアが片手で受け止めた。

キルスは外へ出ると、少し離れた木陰の寸前、靴が片方落ちているのを見つけた。

その奥にはもう片方。

「う、うそ……だろ……」

リザイアの背でそれを見たルソが、震える声を絞り出すように言った。眠くなるはずだが、揺れと痛みのせいか彼の意識はずっとはっきりしていた。

「手駒（てごま）として少しは使うと思っていたのに……」

ここまであっさりと捨てるとは思ってもいなかった。人を物のように扱うという意味を、理

解出来ていなかった。キルスにとって、物は大切に使う物だ。しかし彼女にとって、そのように使うのは一部の特別な物だけで、それ以外は使い捨てなのだ。

キルスは荷の重い展開に、唇を噛みしめた。

ここまで悪質な不死者は初めてだった。

悪意の塊で、全てを殺すというのなら理解出来る。

しかし、理性があって、なおかつここまでするような不死者は、今まで若輩のキルスにあてがわれるようなことはなかった。世間からも大人として認められる年齢になってから、一族の古強者と一緒に当たるような、最悪の不死者だ。

せめて父がいればと、どうしようもない事を考える。もしもの事など、考えるだけ無駄だ。手伝いを頼もうにも、父へ連絡する術がない。

だから今は一人で考えるしかない。キルス以外は皆素人なのだ。キルスが考えて、適切な手を打たなければならない。これ以上の被害が出ないように。

頭の中ですべきことを整理して、キルスは振り返った。

「ルフィアス、僕を街まで。リザイア、ルソは怪我人なので無理のないように来なさい。僕らは急ぎますが、お前は遅れても構いません。ああ、ルソを噛まないように」

「はらへってるけど、かまないぞ」

「少し早いですが、もし駄目だと思ったら聖光水晶を食べなさい」

キルスは息を吐き、馬に駆け寄り、手綱に結びつけていた小さなお守り袋を外した。
「この子達にお守りを付けておいて良かった」
万が一、この馬達を潰されていたら街まで駆けつけるのが遅れるところだった。日暮れ前に準備をしなければならない。時間はいくらあっても足りない。
これを付けているとルフィアスがこの馬達に近寄りにくくなるため、荷に詰め込んだ。
振り返りルフィアスを見ると、彼は未だに靴を見ている。フードで顔は見えないが、本当の死人のような表情をしているに違いない。
無理もないが、今はそのように呆けられては困る。
「ルフィアス！」
キルスは声に力を乗せてルフィアスを呼びつけた。
どうすれば彼が動いてくれるか、強い言葉を探した。思い浮かんだ言葉は、劇薬だった。しかし今は中途半端な慰めの言葉より、劇薬なぐらいでちょうどいい。
「お前の迷いが二人を殺したのです」
今彼が、自分で自分を呪っているだろう言葉を投げかけると、ルフィアスは顔を上げた。
日差しがフードの下に届いたのか、慌てて俯き、フードを深く被り直す。
「相手が自分を魅了した女だからなどというくだらない理由で約束の時が来ても連絡しなかった、それはおまえの責任です。そして吸血鬼の事を知らなかったのは、間違いなく当家の責任

です。不用意に力のある呪物を渡したのは、僕の責任です。分別のない行動を取ったのは、彼ら自身の責任です」

誰か一人が悪いわけではない。全員が悪いと言えば悪いし、誰も悪くないと言えば悪くない。

「おまえは何年存在しているのです。僕の何倍この世にいるのです。若輩の僕に任せて、おまえは呆けているつもりですか。おまえは何のために存在するのですか。長く生き、最も権力があり、最も責任のあるお前が、こんな場所で立ち止まって自己憐憫に浸ってどうするんですか！」

一気に捲し立てると、ルフィアスはフードの下で顔を上げた。

「僕だって本当はこんな凶悪で底意地の悪い女になど関わりたくありません。こんなのは、僕らの仕事ではなく、光聖会のように凶悪な組織が片をつけるべき案件です。僕だって大人達に任せて、性根の腐った吸血鬼が恐ろしいと、震えていたいぐらいです！」

「キルス……」

「ですが、どうにか出来るのは僕らだけでしょう。今動かなければ、誰かが、何人かは確実に死にます。こんな哀れな最期……許せません」

急に、涙が出そうになった。泣いている暇などないのに。

「人の死は、魂は、尊いものです。そうでなければならないのです。不死者の魂は、肉体があれば強固ですが、肉体がなくなってしまえば、とても儚いものです。しかも吸血鬼に成り立て

で、一度も血を吸ったことがない、一番弱々しい……」

ルフィアスのか弱さなど比べものにならないほど、弱いはずだ。

「魂が見当たりません。成仏したか、形すら保てないほど弱っているのであれば、まだいいのです。どうなったか分からないんです。どうなったか……」

もしもの事を考える。肉体の死よりも重い魂の死。

「僕は魂の消滅が、この夜で一番恐ろしい。普通の人間や肉体のあるお前は、これをずれていると感じるでしょうが、最も恐ろしいのは魂が傷つき消えてしまうことです。魂とは、存在自体です。肉体がなくとも、魂があれば対話できます。しかし、それすら出来なくなるのです」

他人であってもそのような目に遭うのは悲しくて怖いから、魂が最悪の道を辿らないように、必要であれば手を貸すのだ。

「僕だって本当は今すぐに魂を探して、安心したいんです。だが何度も言いました。後悔は後でなさいと。後で出来る事は、後でする。出来る事がある時は、冷徹だと言われようとも冷静に対処しなさい」

不死者と向き合う時は、子供らしくないと言われる。実際のところはただ切り替えが早いだけだ。アリーサは子供らしく人形遊びもするし、格好いい男の子を目の前にすれば恥ずかしがる。しかし死霊の前に立つ時は、慈悲を持ちながらも感情を出さないようにという教えを忠実に守っている。

そうしなければ、自分にとっても相手にとっても、不幸な結末になるからだ。

「あの女がこの世にいては、あの二人の魂は家に帰ることも出来ません。お前はあの二人の魂の安息すら奪うのですか」

「安息……」

ルフィアスは大きく息を吸うと、突然、堰を切ったように動き出した。

キルスの腰を持ち、軽々と馬に乗せた。

「急ごう」

一切の言い訳をせず、ルフィアスも馬に乗り、手綱を握った。

街に着くと、若干様子がおかしいのに気付いた。

いくら非道な吸血鬼でも、まさか真っ昼間から街を襲い、それがすぐに発覚するようなことはないはずだ。人間二人分の血があれば、当分は潜伏することも出来る。もしも知能があるなら、警戒が強ければ何も出来ないだろう。

ルグラスが何かしたのかと考えていると、広場の前を通りかかり、人が集まっているのが見えた。ルフィアスは手綱を引いて馬を止める。

「ああ、旦那様。今からそちらに向かおうかと」
中心にいたルグラスが馬上の二人を見て言った。
「ど……どうした？」
「若者が三人、廃鉱の方に向かって行って、帰っていないそうなのです。その内の一人が、聖光水晶（プレスクォーツ）と呪物を交換したルソでして」
「それは……」
ルフィアスが言い淀（よど）み、代わりにキルスが口を開こうとした。
「いい。私が言う」
そう言うと、ルフィアスは馬から降りた。キルスもそれに続いて馬から降り、街の人々を見回した。
「ルソは保護した。怪我をしていたから、ゆっくりとこちらに向かっている」
「他に二人いるはずなのですが」
「封印していた私の親吸血鬼を復活させ、吸血鬼にされ……日よけにされて灰になったらしい」
「なっ……」
人々がざわめき、太った女性がわっと泣き出した。彼らの身内だろう。
ルフィアスは目を伏せ、息を吐く。

「この周囲にはここにしか街がない。逃げた吸血鬼は、近日中には誰かを襲おうとするだろう」

「そんなっ」

人々がざわめいた。きっと幼い頃から話を聞いているはずだ。女吸血鬼がどれほど残忍であるか。実際よりも過剰に語られているかもしれない。

「ルグラスから聞いているだろうが、元々、封印して弱ったところを退治するという話だった。その関係で鉱山の話をしている時に、鉱山に聖光水晶が残っているという話だけを聞いてしまったらしい」

人々がざわめく。

「早急に手を打たなかった私の責任だ」

「そんな、ルフィアス様のせいじゃっ」

ルグラスの側にいたラキアが声を上げた。

「あの吸血鬼は……恐ろしく凶悪だ。被害者が出ないように、私が責任を持って狩る」

「ルフィアス様が!?　どうやって!?」

街の人々がざわめくと、ルフィアスは助けを求めるように振り返った。少し見直したのだが、なんとも情けない表情を見て、キルスはため息をついた。

本格的な吸血鬼狩りを、吸血鬼本人が知らないのだ。知らなければ逃げようがないのだが、

彼ならそのような道を人々が選んだのなら、潔く甘んじるのかもしれない。
　仕方がないから、話を引き継ぐ事にした。人々を鼓舞しやすいよう、こっそりと神封じの指輪を半分外して、指の第一関節ぐらいに引っかけ、拳で握り込む。こうすれば、完全に力は封じられず、さして怪しまれる事なく力を出せる。
「皆さん、僕は死霊術師のキルス・エルヴァン。亡き大祖父に代わり、吸血鬼退治の指導を行います。相手は虐殺を繰り返し、追ってきた僧侶達でも退治出来ず、不意を突いてようやく封印出来た大物吸血鬼です。犠牲者を増やさないためには、皆さんの協力が不可欠です」
　まずはルフィアスを見てその親吸血鬼を侮る者がいないように、相手の力が強いのだと念を押した。
「何十年と封印され、弱りながらも近づいてきた人間を的確に操り、封印を解かせてしまったほどの吸血鬼です。そんな吸血鬼の力が弱いはずがありません。その上、残虐極まりない。そんな吸血鬼に、再びこの街は狙われています」
　彼らは再びざわめいた。
　一番お手軽に人を団結させるのは、危機感、恐怖だ。
　そしてキルスが声に力を乗せれば、不思議と人々の胸に響く。
「一番大切なのは、身を守ることです。日がある内に聖光水晶を持っていない家の子供と女性、聖光水晶があっても吸血鬼が好みそうな美男子は聖堂に隠れさせてください。聖光水晶もない

個人宅は格好の標的になります。招き入れられなければ入れないというのは迷信です。弱い吸血鬼にしか効きません。ルフィアスですら招き入れられなくても入れるでしょう」

皆は顔を見合わせて頷いた。

「なんの守りにもならないな」

「うちの孫は美男子だわ。保護しないと」

「いや、お前んところの孫はまだ五歳だろ」

ルフィアスを気に入っていたことから察するに、普通に大人の男が好きなのだろう。たまたま目の前にいたら喰われるだろうが、わざわざ喰いにはいかないだろう。

「ただし、聖光水晶があればその力は格段に強まりますから、自分から戸口を開かなければ安全です。聖光水晶のない家の方は、聖堂に行くか、持っている方に借りてください」

キルスは皆が熱心に聞いているのを見て、さらに続ける。

「ここにいる女性はその事を皆に伝え、面喰いが好みそうな美男子を保護してください。彼らも男性なので仇を討ちたがるかもしれませんが、彼らが一番危険です。退治に参加しようとしたら止めてください」

「あ、あたしみんなに伝えて、美男子の保護してくるっ」

ラキアと数人の女性は、指名される前に走っていった。

「力と体力に自信のある男性には、もしもの時のために用意しておいた吸血鬼用の武器を渡し

ます」
「キルス、そこまではっ」
「黙りなさい、ルフィアス。これはお前一人の問題ではありません。皆で解決しなければならない問題です。そうでしょう、皆さん。これはあの女に殺された若者二人だけではなく、あなた方の祖先の仇でもあります」
キルスの声に、自然と力がこもっていく。徐々に力を強め、人々の意識をキルスの言葉に向けさせる。
「あの女はルフィアスだけを狙ってきたわけではありません。この地は他の人里と少し距離があり、助けが入りにくい。そして美しい者が多いことでも有名だそうですね」
主にルフィアス一人で押し上げている評判だが、実際に顔立ちの整った者は多かった。
「あの吸血鬼は、全て計算してこの地を狙ったのかっ!?」
ルグラスと同年代の老人が、怒りに震えた声を上げた。
「相手の身になって考えれば分かるでしょう。助けが来にくいという好条件を、考えていないはずがない。人質を取って、出入りする業者を誤魔化すだけでいいのですから」
皆は頷いた。
「じゃあ、また別の奴に狙われる可能性もあるのか？」
「今は仮にも不死者の中でも高位の存在であり、親吸血鬼を殺したと思われているルフィアス

がいるから、他の凶悪な存在に狙われる事はありません」
「ルフィアス様にそんな効果がっ!?」
彼らは驚いて顔を見合わせた。なぜかルフィアス自身さえも驚いている。
「そういった噂には敏感な僕が、ここに来るまでただ封印していただけだったというのは知らなかったので、間違いなく効果があったでしょう。が、いつその化けの皮が剥がれて狙われるか分かりません」
「そ、そうだよな。ルフィアス様に未だそんな効果があったのが奇跡的だもんな」
「ルフィアスのせいで、美形の街として知れ渡っています。ワインのラベルにまで使っているなら、確実に。その場合、やって来るのは化け物とは限りません。美しい女性や子供を狙った、誘拐犯である可能性もあります。今は吸血鬼が守っている美女達ということで、手を出すのは恐ろしいと思われているでしょうが」
キルスは皆の顔を見回した。
皆は真剣に聞いている。
現在の身の危険と、これからのあるかもしれない身の危険を吹き込み、今まではルフィアスが役に立っていたという点をすり込んだ。
キルスはまだ少年であるが、労働力としては一人前とみなされる年頃だ。だから専門家として認められ、皆は縋るように話を聞いてくれる。いつものように声に少し光の力を込めれば、

より信じられやすくなるのだ。
　迷惑な力だが、あるものは使うというのがキルスの信条だ。
「皆で吸血鬼を狩りましょう。そして、ルフィアスを正真正銘、親殺しの吸血鬼に仕立てましょう」
「親殺しの吸血鬼？」
「吸血鬼の子は親の力を吸収できます。人間の親殺しは罪深いですが、無理やり吸血鬼にされた吸血鬼の親殺しは正当な権利です。今までこの容姿を悪用しなかった慈悲深い彼なら、力を得ようが悪用する事はありません。正真正銘、街の守りとなりましょう。そうすれば、きっとアレフとギーリルの魂は安心して帰ってこられます」
　皆に分かりやすい答えを与えた。すると彼らは頷き合う。
「そうか、それだ！」
「迷惑を掛けた奴の力をぶんどるのか」
「これで旦那がか弱くない、世間から隠さなくていい立派な吸血鬼に……！」
　残念な絶世の美男子が、その妖しさに見合う力を手に入れる。
　それは不安でいて、見てみたい気を起こさせる誘惑だ。
「あの二人は、本当に殺されて……」
　親しかったのか、中年の女性が震える声で尋ねた。

「あの女の日よけにされ、灰になったそうです。ルソは呪物を身につけていたため噛まれませんでしたが、腹いせに大怪我を負わされていました。ルフィアスがいなければ死んでいたか、よくても歩けなくなっていたでしょう」

生き残ってしまったルソは、生き残ってしまった罪悪感を抱えなければならず、死んだ方がよかったと思う事もあるだろう。

だから彼にも救いが必要だ。少なくとも、自分を許してやれる要素が。

「あの二人の魂が見つかりません。おそらく肉体を失った時の恐怖で、隠れてしまっています。せめて二人に安息を与えたいのですが、あの女がここにいる限り、二人の魂はさ迷うことでしょう。惨い殺され方をして、魂まで安らげないなど救いがありません。僕が死霊術師でも、怯えて隠れている魂を慰めることは出来ません。最悪の場合、何時までも逃げていれば、弱った魂は輪廻に戻れず消滅してしまうかもしれません。素人には理解出来ないでしょうが、これは最悪の事態です」

「さ、最悪なのか？」

「この世から消えます。生まれ変われなくなります。来世で会えるという希望すらなくなります。死んでも魂があればどれだけ弱い死霊でも、死霊術を使い会話できますが、それすら出来ません。彼らを救うには、吸血鬼を退治するしかありません。そうすれば、僕の口を通して彼らの言葉を皆さんに伝える事も出来ます」

正確に言えば、魂が消えたらどうなるか分からない。生まれ変われるという希望があるから死を受け入れられるが、そこで終わりならば人の死に対する拒絶はもっと強くなるだろう。

「きるす、るふぃあす」

広場の前に、ルソを連れたリザイアが戻ってきた。

「ルソっ」

「ちかよるな。ケガしてる。いたみどめ、のんだ。けどイタイ」

ルソにしがみつこうとした女を手で制する。

「あし、いたい。びょういんに、はこんで」

「誰か、担架を」

「運び込むのなら聖堂に」

キルスが言うと、ルソは首を横に振った。

「俺も、あの女を！　そうでないと俺は……俺はっ」

自分が許せないのだろう。

「分かりました」

「い、いいのか？」

「あなたは呪物を身につけているので狙われません。手配が終わったら、ルフィアスに治療を再開してもらいましょう。自分で移動できるようになったら、聖堂を守っていただけますか。

聖堂で狙われやすい人や、家の守りに不安のある人達を保護するんです。呪物を持っているルソなら、見張りに最適です。誰かがやらなければならない事です。引き受けてくれますか？」

「わ、分かった。やる」

ルソは真剣な表情で頷いた。歩き回らない役目だから、彼にも出来るだろう。

「俺達はどうすればいいんだ。どうやったらあの女をぶっ殺せるんだ？」

廃鉱に乗り込む気だったのか、斧を肩に担いだ男が尋ねた。

「ルグラスさんが配ったこれなら、どうにかなるのか？　もらった呪物は使えるか？」

別の男、酒場の店主のクラインが尋ねた。彼の手には、キルスが用意した戦鎚がある。これのせいで重かったのだが、役に立ちそうだった。

片側が平たく片側が尖っていて、鈍器としても、杭のように打ち付けて使うことも出来る。

「その戦鎚は使えます。普通の武器では魔力が尽きるまではすぐに治ってしまいますが、それで傷つければ簡単には治りません。尖っている部分を心臓に打ち込めば死にます」

人々は驚いたように戦鎚を持つ人々を見た。

「外の巡回をしてくださる方は、必ずその戦鎚か、聖光水晶と泥を落とした金属の武器を身につけていてください。聖光水晶は本来、然るべき加工をしてこそ力を発揮しますが、一部の組織がその技術を独占しているので、この街には武器になるような聖光水晶はありません。肉体を持つ吸血鬼から身を守る力もありません。ですが聖光水晶を手にして金属で殴れば聖化した

道具ほどではありませんが、すぐには治りにくい傷をつけられます」

キルスは出来るだけ理解しやすいよう、理解を間違えないように、詳しく説明した。

「治りにくいって事は、つまり袋叩きにしちまえばいいってことだな」

「そうです。治りかけたら殴り直し、顔に丈夫な袋を被せ、手足を拘束するのが望ましいです。噛まれただけでは吸血鬼になったりしませんが、回復してしまうので気をつけてください。何か質問は？」

キルスが尋ねると、大柄な男が身を乗り出した。

「聖光水晶はただ握っていればいいのか？」

「直接肌に触れていればいいです。何かで括りつければ、両手が自由になります」

次に別の小太りの男が、人々の後ろの方で手を上げた。

「金属って、鍬でも良いのか？」

「そうです。元々不死者は金属が苦手です。特に苦手なことで有名なのは銀ですが、それ以外の金属でも力があります。純度の高い金属がより効果的ですから、洗ってください。さらに聖水で清めると効果的です」

「聖光水晶を投げてもだめなんですか？」

「話の中でよくありますが、あれはコツがあります。魔力を感じられなければ出来ません。あれは聖光水晶を使い捨てにする、光聖会のような組織が使う手段です。聖光水晶は肌身離さず

持っていてください」

皆はキルスの言葉を聞いて頷いた。

武器にはならないただのお守りであった聖光水晶も、使い方によっては武器になると知り、彼らはさらに考え、相談し始めた。

「普通の吸血鬼はルフィアスのように非力ではありません。二人の青年の血を屠り、かなりの力を取り戻したことでしょう。見た目に惑わされないでください。女といえども皆さんよりも遥かに怪力です。片手で人を持ちあげる事も出来るでしょう。ですから、決して一対一にならないようにしてください。発見したら即座に合図を出して、人を集めてください。常に連絡を取り合うのが肝心です」

今思いつく忠告はこれぐらいだった。

「これ以上は一人の犠牲者も出してはなりません。犠牲者が出れば吸血鬼はより力を得て、皆さんの悲しみは、より深いものとなりましょう。それを阻止する事こそが、他の皆を守る事に繋がります。それを努々忘れないで、無茶をしないでください。いいですね」

皆は頷いた。

日は傾いている。いくらもしないうちに、日が暮れるだろう。

人々は興奮している。武器を手に取り、一丸となって吸血鬼狩りをしようとしている。

「武器とする金属は、聖堂で清めてもらうと効果的ですから。そこで巡回のルートや班などを

決めましょう。とりあえずは、一夜乗り切ることを目標にします」
キルスは皆を見回しながら、杖を掲げた。
「皆で救いのない死を迎えた青年達の仇を討ちましょう！」
「おおっ」
何人かが、バラバラに声を上げた。
大切なのは一致団結。冷静さは必要だ。しかし集団の熱気も必要だ。
「一切の容赦も慈悲も必要ありません！　残虐な女吸血鬼ユシェールに、槌を持って杭を叩き込みなさい！」
「おおっ！」
少し揃った。
「強欲ババアに、その醜い本性に相応しい末路を！」
「おおっ」
手にした戦槌を、斧を、鍬を掲げて声を揃えた。
「四肢を磔にし、その身をお前達の主に差し出しなさい！　さすればその邪悪な力は、吸血鬼でありながら癒しの呪物に認められた、お前達の慈悲深きルフィアスのものとなるでしょう！」
「ルフィアス様に……」

「そう、ルフィアスの力に。僕ら一族は責任を持って、これからも彼を支えていきます。このダヴィトの街のさらなる発展を祈って」

「ダヴィトのために！」

「ルフィアス様万歳！」

人々は熱気のこもった声を上げる。

当のルフィアスは先ほどまでは流れに呑まれていたが、自分の名を皆に叫ばれ、困惑の色を浮かべた。普通なら、ここで彼がさらに皆を鼓舞する場面なのだが、ルフィアスなので期待するだけ無駄である。

反対に、街の皆は程よい具合に熱くなってくれた。聖光水晶を持たせるから、熱気のために暴走する者はいないはずだ。困るのは落ち着きすぎて『女をよってたかって袋叩きにするなんて』と思う者が出てくる事だ。

だから民衆が人の姿をした上位の存在に対して一丸となるには、これぐらい煽った方がいい。

4章　吸血鬼狩り

今夜は満月だった。月の光は街を照らし、夜目の利く者にとってはその光だけで昼間のように見渡す事が可能だ。運がいい事に、満月でも特に力が満ちている季節に当たったらしい。

「ああ、なんて運がいいのかしら」

この光を浴びているだけで、力が満ちてくる。しばらくはこの光を浴びた恩恵は続くだろう。

彼女の復活を、満月が祝福してくれているようだった。満月は、いつでも彼女の味方だ。

満月に照らされた美しい街並みは、封じられる前とあまり変わらない。

機嫌良く、賑やかな街の夜を眺めながら、彼女は首を傾げた。

「あれに何の意味があるのかしら」

熱の入った警戒をしている人間達を見下ろし、彼女は馬鹿にするように呟いた。

数人がまとまって、もしも襲われた時はまずは笛を鳴らして、別の物が声で場所を知らせるらしい。

森の中で適当に捕まえた蝙蝠を使って偵察して、この街全体で警戒しているのは分かっている。その警戒経路も、どれぐらいおきに巡回が来るかも、彼らは万全に策を練りすぎて、逆に

分かりやすくなっていた。頑張って犠牲者を出さないように規律を守り、それがかえって分かりやすくなるとは、本末転倒だ。

人間の知恵は、邪魔だ。知恵があるから分かりやすく、そして裏切る。知恵がありすぎる生き物は、裏切ろうと虎視眈々と狙っているから信用できない。人間などよりも動物の方がよほど信頼できる。

あの美しく儚げで、優しくて、臆病だった青年も、結局は裏切った。

彼だけは大切にしてあげていたのに裏切った。あんなに大切にしたのは初めてだったのに、裏切られた。

重く息苦しい闇の中で、力が全て抜けてしまう忌まわしい封印の中で、月日も分からぬほど無理やり眠らされた。瘴気につられて迷い込んでくる動物が、その身をもって彼女の意識を浮上させてくれなければ、あそこから抜け出すことは出来なかっただろう。

憎らしい。それでも、あの美しい青年にまた会いたいと思った。

彼の美しい顔が、辛そうに歪むのが好きだった。

どんな命乞いをするのか、考えるだけでぞくぞくした。それでも実行に移さなかったのは、彼があまりにも美しかったからだ。

壊したいと思うと同時に、永遠に飾っておきたいと思った。それほど美しかった。あれだけ美しいのに、あれほど自分に対する自信がないのがおかしかった。

彼をあんな風にした女がいると思うと、八つ裂きにしたかった。彼を傷つけていいのは自分だけだ。なのに一番影響を与えているのは、その女だと思うと、いても立ってもいられなくなった。どこにいるか分かっていれば、実行していただろう。

だからその分、愛してあげた。

彼が泣かないように、彼の知り合いだけは壊さなかった。泣いて縋られるのも好きだったが、泣き続けられるのはあまりよろしくなかった。男のくせに、泣いても綺麗なのには嫉妬すら覚えた。

あの幸せがずっと続くとは思っていなかったが、彼に裏切られるとは思っていなかった。信じられなかった。幼かったから人間のまま成長するのを待っていた、いつも反抗的な目を向けていたルグラスならともかく、あの気の小さなルフィアスが、血の繋がりを押さえつけてまで騙すなど。

悲しげに、自分一人で満足してくれていればと言ったのを、はっきりと覚えている。

だから決めていた。いつの事だか分からないほど前から、決めていた。

外に出たら、全部壊してしまおうと。

封印を解いてくれた馬鹿な男はあまり好みではなかった。一番マシだった男は、厄介な呪物を身につけていた。日よけにした男達に聞いたところ、街には若い光の使徒がルフィアスを訪ねて来ているらしい。赤毛のとても可愛らしい男の子だと噂になっているという。

使い魔で得た情報だと、死霊術師もいるらしくて厄介だが、彼らは所詮、対話を好む平和的な術者だ。街の住人に知恵を授けているらしいが、聖化された戦鎚程度で何が出来るというのだろう。あんな物は、当たらなければ意味がない。魅了が効かないだろう死霊術師は厄介だが、他人を使ってくれたのが幸いだ。人が多ければ多いほど盾になる。

魅了の力が強いからこそ、彼女は後れを取らなかった。元々魔力が強く、抵抗力が高かったルフィアスだから逆らえたのだ。

「ルフィアスは最後ね」

絶望の淵に立つ彼を見てみたい。徹底的に追い込んで、徹底的に逆らう気力もなくなるようにしてしまおう。

だから、街の住民をルフィアスの前で殺す事にした。きっと泣きじゃくるだろう。茫然として、立ち上がる気力もなくなるに違いない。

涙も枯れて壊れた姿を堪能した後は、いつものように日で焼こう。

あの綺麗な顔が焼けただれ、灰になる姿が見たいのだ。

それとも、封じてしまった方がいいのかもしれない。彼はとても寂しがり屋だ。光が好きで、触れれば焼けてしまうのに、窓を塞ぐことなくカーテンで遮光するだけですませていた。窓から日が入るのを見て、嬉しそうにしていた。

そんな彼が、闇の中でずっと一人。

どちらでもきっと楽しいだろう。

その時、聖堂から人が出てくると蝙蝠が知らせる声が聞こえた。聖堂には、美男子と女子供が集められているらしい。

今日は無理をするつもりはない。せっかくの満月だ。出来るだけじっとして、その魔力の恩恵を受けるのが最良だ。

彼らは無理をして出てきて欲しいようだが、これほど警戒されている時に、無理やり民家に押し入るような馬鹿な真似はしない。ここには集められた美男子がどれほどの物か確認しに来たのだ。朝になって帰る時には、きっと油断しているから、離れた所から顔を確認する事は出来る。

そして警戒することに飽きて、人々の気が緩んだ頃に彼らをいただく。手駒を増やして、好みの男や可愛い顔の男の子以外は皆殺しにするのだ。

きっとルフィアスが泣いてくれる。その涙こそが、一番楽しみなごちそうだ。

無理はしないと言っても、わざわざ外に出てきたのを食べてしまうぐらいなら、いいだろう。人間には生理的欲求があるから、誰か一人ぐらい我慢できずに出てきてくれる事を願っていたのだが、思惑通りだ。目につかない場所を噛み、魔眼で魅了して手駒にすれば動きやすくなる。美男子であれば最高だが、乙女であれば女でもごちそうだ。可愛い声で鳴いてくれるのなら、女の子も悪くない。どんな風にいたぶろうか。

ユシェールは蝙蝠の教えた場所に音もなく移動すると、闇の中で際立つ、強烈な光の気配を感じた。

光の使徒だと、直感した。

離れていても分かる、その力の強さに戦慄した。この血を吸えばどれだけ力となるだろう。力は垂れ流されていて、とても訓練を受けた使徒には見えない。まだ幼いらしいから見習いなのだろう。この地で崇める神は、大地神に連なる神で、光の力などありがたがられないから、ろくな訓練を受けていないのだ。

「なんて運がいいのかしら」

訓練を受けた使徒であれば逃げ出すしかないが、まるで襲ってくれとばかりの極上の餌だ。

そろそろと近づいて、姿が見える位置まで移動した。彼は不慣れな場所だからか、燭台を片手に迷っているようだった。

長い髪を背に流した、整った顔立ちの男の子だった。少年だからこその、柔らかな丸みを帯びた頬。困ったような表情は、嗜虐心を掻き立てられる。ルフィアスの人とは思えない美貌とは比べようがないが、満足出来る可愛らしさだ。

ユシェールは少年よりも青年の方が好みだが、ルグラスと違ってそれなりに育っている。汚れなき少年を快楽の虜にするのは好きだった。羞恥に歪み、乞うて鳴く姿を想像すると、楽しくて仕方がない。

力も込みなら、ルフィアスを超える逸材だ。
出来ればもう少し育つまで待ちたいところだが、欲をかいてはこの極上の獲物を取り逃がす。
ルフィアスとは違い、酸いも甘いも知らぬ真っ白な状態なのだ。容易く溺れさせられる。
ルフィアスとも、もっと早く出会っていれば良かったのだ。
他の女のことなど知らない少年を、自分だけを見るように育てれば、ルフィアス以上のお気に入りになるかもしれない。
使徒の血は甘美で、他とは比べものにならないほど力がつくと聞いた事がある。あの力を見る限り、信憑性は高い。今の自分に、これほど相応しい少年は他にいない。
この幸運に、深く感謝した。
「きみ」
ユシェールが呼びかけると、少年は周囲を見回した。そして、姿を現したユシェールと目を合わせた。
目が合えばそれで終わりだ。吸血鬼の視線には魔力がある。視線を合わせれば、人間達は魔眼に魅入られる。警戒されていれば効かないが、少年は無防備に見つめ返してくれた。
目が合ってしばしの後、少年は愛らしい顔に笑みを浮かべた。
「こんばんは」
声変わりが来る前の、少し高めの声だった。

集められている女だと思っているのか、ちゃんと魅入られているのか分からない反応だ。
「きみ、こんな時間にこんな所で何をしているの？」
「ちょっと……」
彼は恥ずかしそうに俯いた。ユシェールはくすりと笑って手招きした。
「おいで」
呼びかけると、彼はマントをかき寄せて、警戒心の欠片すら見せずに小走りでやって来る。
揺れる髪が光の魔力をまき散らして幻想的だった。
大地神の信者なら、光の力など邪魔でしかないだろう。だからろくな訓練を受けず、装身具を呪物にして生活しているのだ。それで生活出来てしまうから、必要はないとでも思っているのだろう。
そう、必要ない。あの血と、可愛らしい顔と、可愛らしく囀る声だけあればいい。
廃鉱の男は呪物を身につけていたから諦めたが、それは力を無駄に使いたくなかったからだ。この少年を手に入れられるなら、力を使うのは無駄ではない。この血さえ飲めば、すぐに力は回復するはずだから。
少年はユシェールの前までやってくると、いきなり手を握ろうとしてきた。
「っ」
少年の前で、ユシェールの姿が霧散する。

「幻影かっ」
可愛らしく抜けた表情をしていた少年が色をなした。険しい顔立ちで周囲を探り、ユシェールが本当に立っている場所に目を向け、にやりと笑って駆け出した。
その豹変振りに面食らい、ユシェールは動揺した。
（罠っ!?）
ここに来ると予想していたのだ。あの会話は、ユシェールを誘導させるためにしていたのだ。
そして使徒は自分を囮にしたのだ。
あれは自分の価値を理解して、それを利用できる者の目だ。
純粋そうに見えたのに、また騙された。
「くっ」
牙を剥ける光の使徒は危険すぎる。
ユシェールは後ろに下がろうとした。
「リザイアっ」
使徒の声がしたとほとんど同時に、背後に何かが落ちる音がした。
そして、右手にある物置から強い光を掲げて、男が数人出てきた。左手には聖堂。屋根の上は、見張り台に誰かがいる。
囲まれた。

女は苦虫を噛み潰したような表情でキルスを睨んできた。
美しい女だ。歳の頃は二十歳ほどだろう。腰までの金髪に、青い瞳。どこから拾ってきたのか分からない黒い布を体に巻き付けただけだが、その肢体の曲線が分かり妖艶だ。
吸血鬼に血を与えられる一番の理由が『美しい』からなので、当然と言えば当然だった。
ルグラスを先頭に、倉庫などに隠れていた男達が、光の呪物や火を点したランタンを手に出てきて、武器を構える。完全に包囲したのを確認すると、キルスは堪えきれずに高笑った。
「くくく、ははははっ、のこのこ出てくるなんて、なんて浅はかな女でしょう」
彼女が来た道は、この中で最も戦闘力の高いリザイアが封じ、屋根の上には、鐘塔に隠れていた近隣で狩りをしている親子が持ち場についた。皆が口を揃えて推薦したほどの腕前で、二人には聖化した矢を持たせている。
ユシェールはじりじりと、敵のいない聖堂の方へ下がる。
「ああ、おかしい。吸血鬼を相手にしているのに、聞き耳を立てられていないと思う方がどうかしています。これだけ集めておけば見に来るとは思いましたが、ここまで簡単に出てきてくれるとは思いもしませんでしたよ」

おかしくて喉が震える。

本当に簡単だった。聖堂の敷地内は、吸血鬼の使い魔では入ってこられない。見るだけならともかく、音を聞くのは不可能だ。そこで本当の作戦を話して、集められた者達も女子供達も納得した。彼女達は自分達を餌にすることで、安全且つ仇討ちに参加出来ると、喜んだぐらいだ。

これで出てこなかったとしても、女子供と美男子を守れて良かったねですむ。聖堂には念のために借りてきた聖具を使い、キルスが結界を張ったため、わざわざ戸を開けるような事をしなければ入れない。街のどこよりも安全なのには違いないのだ。

作戦が上手くいくのは、本当に小気味よい。

「この髪、便利なんですよ。魔力を制御しやすいように伸ばしているんですが、縛らないと未熟な使徒に見えるらしいんですよ」

キルスは背中に流した赤毛に触れて、わざと魔力を放出してみせる。髪が静電気を帯びたように浮き上がり、わずかに発光した。

いつものように結んでいれば落ち着いているし、髪をとけば放出できる。たまにこのように餌として利用する事もできる。死霊術師としては未熟でも、使いようによっては一族の役に立つ事もできるのだ。

光の気配には、不死者にとっては誘惑に勝てない魅力があるらしい。

「……末恐ろしいガキだな、おい」

誰かが呟いたが、キルスは気にしない。

マントの下に隠していた短剣を抜いた。いつもの杖は巻き込んだら可哀想なので置いてきた。

死霊術師の杖は優しく対処する場合に使う物であって、実力行使するための物ではない。

同じ意味で、ルフィアスには事が収まるまでは近づかないようにと言い含めてある。

自分の力は嫌いだし、なくなったらいいとも思って色々と相殺する方法を模索しているが、ある物を全否定して使わないほど子供ではない。

説明している間に、全員がユシェールを囲むような配置についた。

彼女にも理解出来るだろう。こちらがどれだけ装備を調えているか。

追い込まれ、顔を引きつらせて、聖堂の壁際まで下がる。

「さて」

キルスは立ち位置を変えながら、ゆっくりと前に進んだ。

最初の接触で触れられればそれで終わったのだが、ここまでは想定内だ。

あとは動けないように磔にして、か弱いルフィアスでもどうにかなるようにしなくてはならない。

都合の良い事に、ユシェールは光の使徒であるキルスに視線を向けている。反対側にいるのが、もっと恐ろしい男だとは思っていない。

リザイアに押さえ込むよう命じようとした時、カタッと小さな音が聞こえた。普段なら気にもしないその小さな音は、夜の静寂の中では、よく響いた。
聖堂の、跳ね上げ式の木の窓が、わずかに開いていた。
「ばかっ」
少女の声が響いた。
誰が。
そう思うより前に、窓が跳ね上がり、その奥にいた誰かが引きずり出された。
「ぐぅ」
引きずり出された少女――ルグラスの孫娘のラキアは、苦しげに呻いた。
光を掲げて見れば、ユシェールに首を掴まれていた。
「ラキアっ」
戦鎚を片手に、ルグラスが悲痛な声で孫娘の名を呼んだ。
「あら、その気配、ルグラスじゃない？　ずいぶんと老いたわね。昔は可愛かったのに」
人質を取って気を大きくしたユシェールは、ルグラスを見てせせら笑った。
「じゃあこの子は身内の子かしら。昔のお前に似ているわね。お前の事は、ルフィアスの次に気に入っていたから、この子もきっと美味しいのでしょうね」
そうだろう。ラキアは獲物として、この街の中では当たりの部類だろう。彼女は一目でキル

スが使徒だと見抜いた。力を見るには、それなりの力が必要だ。

「ラキアっ」

「近づくとこの子の可愛い顔に傷がつくわよ。ルフィアスにも治せないぐらい、抉り取ってあげる。私、女の顔なんてどうでもいいし。傷って、欠損した部分を元に戻すのは大変なのよ。ルフィアスには無理ねぇ」

ユシェールはラキアの頬に触れ、爪を滑らせた。赤い線が走り、ゆっくりと血が滲む。

正しい判断だろう。

涙を目の端に浮かべて、息を止めて身を竦める少女の姿を見て、近づける者はいない。

この街の目標は、被害者を出さない事。ラキアが女の子である事。皆が素人である事。それを分かっていて、手を出しにくい状況を作っている。

殺しては人質の意味がなくなるのだ。

「相も変わらず……」

「お前に言われる筋合いはないわ。あら、そこにいるのはルフィアスじゃない」

ラキアが人質に取られて、隠れていたルフィアスが出てきた。ルフィアスだけではない。フライパンや角材を手にした、保護していた女達、美男子達まで出てきた。

ユシェールは横目でルフィアスを見て、ため息をつく。

「ああ、本当にお前は美しいわ。こんなに恨んでいるのに、どうでもよくなってしまいそうな

ほどよ」
「その子を離せ」
ルフィアスは真っ直ぐユシェールを睨みつけていた。
「……ずいぶんと気が強くなったものね。昔ならもっとおどおどしていたのに」
「民を守るのは私の義務だ」
ユシェールは目を細め、手薄に見えるリザイアの方へジリジリと進んだ。屋根の上からは、狙えない場所をゆっくりと。
逃がすことは出来ない。しかし、ラキアに何かあってもならない。
ユシェールの片手はラキアの頬に、片手はラキアの首にかかっている。本来の吸血鬼の力で間違って首に力を入れられたら、少女の華奢な首など簡単に折れてしまうだろう。
今のままでは、下手に何かすると傷どころか間違って殺されてしまう。
キルスはどう攻めるか考えた。
「……近づかないでって言ってるの」
ユシェールの言葉で、誰かが動いているのに気付いた。
静かに、また一歩。
「あ……うあああぁ」
突然、苦しむように呻いたリザイアは、剣を手にしたまま両手で頭を抱える。

動いていたのは彼だ。明らかに、暴走しかけている。
「まずい、なんでこんな時にっ」
リザイアはユシェールを挟んで向こう側にいる。キルスが持っている聖光水晶（プレス・クオーツ）を渡すことも出来ない。刺激しすぎてはラキアが危ない。
「何、この出来損ないの下等な不死者」
ユシェールは不快をあらわに、ちらりとリザイアを見た。
キルスは悩み、リザイアに声をかける。
「リザイア、早く食べて安定しなさい」
リザイアは頭を押さえながら、荒い息をついてキルスを睨みつけた。
「きる……す」
「胸の袋の中にあるでしょう」
リザイアは首に掛けていた胸の袋の紐（ひも）を引きちぎり、中から聖光水晶を取り出した。
明らかに様子がおかしく、邪魔をすれば我を忘れて襲いかかれるのは目に見えているからか、ユシェールもリザイアに指示を出しても妨害しようとはしなかった。
少しでもリザイアに理性があれば、ラキアを盾にしても、ラキアよりも頭一つ分以上背の高いユシェールを狙うだろうから。
リザイアが聖光水晶を握りしめ、焼いた鉄に水を注いだような音が立った。

「あぁ……キルス、俺……」
言葉がはっきりしてきている。
「落ち着きなさい。お前の理性はまだ持つはずです」
リザイアはキルスを見て、次にユシェールを見て、そしてラキアを見た。手と足と唇は震えているが、いつもと違い、視線がしっかりしていた。
（ひょっとして、暴走じゃない？）
キルスが判断に悩んだ時、リザイアは再び苦しげに顔を歪めた。
「俺……俺はぁあああああああああっ」
リザイアは天に吠えるように叫ぶと、唐突に手にしていた聖光水晶に魔力を込め始めた。
そして、殺意のこもった、しかし理性のある目でユシェールを睨んだ。
「子供に手を出すな、この外道が」
リザイアは急に静かにそう言うと、ユシェールに向かって聖光水晶を投げつけた。ユシェールはラキアの頬に当てていた手でそれを叩き落とそうと振り下ろす。
その手が当たったその瞬間、光が弾けた。
「ぎゃあぁっ」
聖光水晶の性質の中には、強い魔力を込めた直後に物理的な衝撃を受けると爆発するように力をまき散らす、というものがある。その力そのものは人間には目くらましとなる程度の害し

かない。むしろ、害のある物から身を守る力だ。
光聖会でもよく使われる——潤沢な資金がある光聖会だからこそ出来る手だ。
リザイアはそんな聖光水晶の使い方を知っていた。
光が収まるまでは一瞬だが、眩んだ目が見えるようになるまでに、しばらくかかった。
だからどうなったのか理解したのは、事が終わってからだった。
ユシェールの右腕から右頬が焼け焦げたようになって、左腕は二の腕から先が切断されて、なくなっていた。
そしてきょとんとしているラキアは、いつの間にかルグラスの腕の中にいた。
リザイアは切り落としたらしい腕を口にくわえて、油断なく切っ先をユシェールに向けていた。
「……あああああっ」
ユシェールはリザイアが咥える自分の腕を見て、声を上げた。
「私の腕っ」
リザイアは咥えていた腕を首を振って捨てた。
「腕ぐらいが何だ。お前がしてきたのはこの程度ではないはずだろう」
口に付いた血を拭い、嫌悪感に満ちた表情を浮かべていた。
「俺は不死者は嫌いだ。卑しい自分にも、浅ましいお前にも、嫌気がする。特にお前は許せな



い」

聖光水晶まで喰らった彼が、いつ人を襲うかもしれない自分の存在を許せるはずがない。それでも彼はこうならなければならないほどの、その肉体にしがみつかなければならない事情があった。

悲しい事だ。

しかし悲しいからと止まることは出来ない。問題が解決したのなら、続けなければならない。

「そうです。おまえは他人から日の下を歩く権利を奪い、従属させ、飽きたら命じて光を遮る物のない場所に立たせ、日光で焼いたのでしょう」

人々に、怒りの持続を。

立場が逆転して哀れな姿となった彼女が、今まで何をしてきたのかを、人々とルフィアスに思い出させなければならない。話す価値もない不死者に、同情などは無用だ。一度下したその評価は、決して覆らない。心が揺らぐことがあったとすれば、それは相手の策略だ。それに人々が捕らわれてはならない。

「今のは太陽の光にも等しい力を、一瞬浴びただけ。腕一本切られて喰われただけ。たったそれだけです。おまえがしてきた残虐な行いに比べれば、優しいものではありませんか」

キルスが言うと、皆は頷いた。

「まったくですな。あなたの為したことに比べれば、リザイア殿のした事は実に紳士的だっ

た」

ルグラスは孫娘の頭を強く抱き、見えないように、聞こえないように庇っていた。その子を駆け寄ってきた女性に任せると、背筋を真っ直ぐにして戦鎚を構え、ユシェールを見据える。

「キルス様、この女をルフィアス様に捧げるには、いかようにすればよろしいのですかな」

「なにをっ」

思いもしなかったのか、ルグラスの言葉を聞いて、ユシェールは動揺した。ただ灰にされるだけだとでも思っていたのか。

「では、動けなくして差し上げましょう。か弱いルフィアスでも、安全に接近できるように」

「な、何をする気よっ、やめてよっ」

ユシェールは目に力を込め、声に力を込めて言った。

「また無駄なことを。見れば分かるように、僕らは対吸血鬼用の装備を身につけています。おまえごときの魔眼など効きません」

キルスはくつくつと笑い、一歩近づいた。

「人にはない力を得て、何か勘違いしたのでしょうかね」

人質をなくしたユシェールは、じりじりと後ずさった。リザイアが道を塞いでいた場所が空いていたが、そこには既に人がいた。

「坊ちゃん、俺が」

「このような状態でも危険ですから安易に近づかないでください」
前に出ようとした屈強な男を手で制した。
「じゃあこうすればいい」
屋根の上から猟師の息子が飛び降りて、何かを投げた。それはユシェールの足に絡みつき、彼女は後ろに倒れ、ついた手は土塊が崩れるようにして砕けた。
「なっ、なにこれっ」
彼女は自分の足に巻き付いた狩猟用に使われる微塵より、腕を気にした。気にすべきは、逃げる術であるはずだ。力に溺れ、正しい生き抜き方を知らないのか、忘れてしまったのか。
「お前が出来損ないと言ったリザイアが、人を喰らうのを抑えるために喰っている、ただの聖光水晶の力ですよ」
それなりに力のある吸血鬼でもこうなるのだから、週に一度喰らっている異常さを再認識した。
「僕から見れば、彼こそ奇跡のような不死者です。今まで見たどの不死者よりも高潔で力強い」
キルスは倒れたユシェールの肩を踏み、短剣を握りしめた。
「それに比べて、おまえは腐った性根以外は実に平凡です」
「いや、やめっ」

余計な命乞いを口に出来ないように、喉を地面に縫い付ける。
耳障りな音を発したが、言葉にはならない。
「お前は美しい男達を囲って、自分がそれに並んで見劣りしないほど美しいとでも思っていたのですか？　自分が強いとでも？　自分が万能だとでも？　お前はルフィアスの美しさの足下にも及ばず、力では僕らの足下にも及ばない。世の理に逆らい存在するお前達が、太陽如きに焼かれるお前達が、生者の群れに敵うはずがないでしょう」
涙を流して見上げてくる。この涙に騙される人間が、命を落とすのだ。
「それを理解できなかったお前は、遅かれ早かれこうなっていたのです。このように絶望の下に動けないようにされれば、一時でも愛した彼らと少しは共感出来るでしょう。卑しいお前には、実に相応しい幸せな最期ではありませんか」
不死者では、この剣を自力で抜くのは不可能だ。抜くための両腕もない。
キルスは皆を振り返る。
「さあ生者達、不幸にも命を奪われた若者達の仇を討ちましょう。皆の愛すべきルフィアスから光を奪った、思い上がりの吸血鬼を動けないようにしました。ルフィアスを従属の呪いから解き放つために、心臓を抜き出し差し出します。さすればルフィアスは解放され、より一層の力をつけて、お前達を子々孫々見守り、この町をさらに発展させる事でしょう」
キルスが言うと、アレフの父親が進み出た。

「俺がやる。あんなんでも、可愛い、大切な息子だったんだ」
聖堂から出てきた、ギーリルの母親が進み出た。
「あたしも、息子の仇を」
「女性には難しいかもしれませんよ」
「うちは肉屋だよ。誰よりも上手くできるさ」
頼もしい限りだ。
「俺も」
一番後ろにいたルソが前に出た。ルフィアスの治癒を受けて、歩けるまでに回復した。彼も餌の一つだったのだが、危険な目に遭わせなくてすんだ。
「俺にも、やらせてくれ」
ただ、彼で釣れなかったため、仇討ちをした気にはなれないようだ。
「俺のせいで、俺が二人を……」
「それは違います。何度も言いましたが、自分を責めてはいけません。ルソが自分を責め続けていたら、二人も心配して、魂も浮かばれませんよ」
キルスはルソの肩に手を置いた。
「心配？」
「友人が自分を責めていたら、心配します。ルソが二人の死を悼むように、彼らも残された者

がいつまでも自分達の事で悲しんでいては、悪いと思ってしまうのです。ルソが彼らの立場なら、恨むよりも心配するでしょう?」

彼は思い悩んだ。本当にそうなのか、二人の魂を見せてやらない限りは信じられないだろう。

「ルソ」

自分を責めるルソに、ルフィアスが声をかけた。

「私がやる。ルソや皆が手を汚す事はない」

「そんな、ルフィアス様にそんな事させられません」

「ユシェールは私の物だ」

珍しく、大胆に言い切った。そして妖(あや)しく目を輝かせ、ゆっくりとルソを見つめ、次に親達を見つめた。

「私に、譲ってくれないか?」

「はい。ルフィアス様の御心のままに」

魔眼に魅入られた彼らは、素直に引いた。

どうやらルフィアスは、他人のためにならちゃんと力を使えるようだ。魔眼の力は魔力以上に、持って生まれた容姿に左右されると言われている。ルフィアスほどの美貌なら、本人がその気になれば、このように容易く人を操れるのだ。呪物を身につけているルソにまで効いているから、彼の魔眼は大したものだ。

「そうですね。本来ならこの女の髪の毛一本、爪の一枚、血の一滴まで、ルフィアスの物です。珍しく本人がやる気になっているのなら、本人に任せましょう」

正気に戻った時、彼らが納得しやすいように言葉を添えた。

「やり方は分かりますか？」

「ああ、分かる。不思議と、どうすればいいのか分かるんだ。わざわざ取り出さなくてもいい。本能に刻み込まれているのだろうか」

ルフィアスは必死で足を上下させるユシェールを見た。焼けただれた顔は戻らない。通常の火傷（やけど）なら、魔力をめぐらせれば見る見るうちに元の綺麗な顔になる。しかし聖光水晶で出来た傷は、この通りだ。

「思い出は美化されるというが、本当だな」

ルフィアスは醜くもがく親吸血鬼を見て、ため息をついた。

「思い出の中の君は、もっと美しく、恐ろしいほど強く、少し優しかった」

「それが魔眼の力です。僕が見た限りルフィアスは自分のためには一度も使っていません。リザイアに襲われた時も、僕の血を狙った時も。だからお前は自分が生まれ持った物と、皆の努力で現存しながら伝説となりました」

ルフィアスは頷いた。

「確かに、私の方が美しい。皆が褒めてくれる私の美しさの方が上だ」

「きっとお前なら同じようにされていても、さぞ美しい事でしょう」
流す涙一つ違うだろう。この女は泥水のような涙。ルフィアスは貴石のような涙だろう。どれだけ薄汚れても、泥に塗れようとも、美しいに違いない。
「それは嫌だな。そうならないよう、気をつけよう」
「そうですね。しかしそれは、とても簡単な事です。皆に嫌われなければいいだけですから」
ルフィアスはユシェールを見下ろし、笑みを浮かべた。
二人の違いは明確だ。そのような事には決してならない。
「キルス、聖堂に入ろう」
リザイアがキルスの肩に手を置いた。
「こういうのは少し時間がかかるから、ルグラスが見ていればいいよ。そうすればルフィアスは頑張れる」
リザイアは目を細めて、笑みを浮かべた。これが本来の彼なのだろう。
「俺はもうすぐ元に戻る。終わるまでは待てない。その前に話をしたい」
「思い出したんですか？」
「少しだけ」
彼にとって、一番大切な何かを思い出したようだ。
「分かりました。ルソも聖堂に入りましょう。これ以上無理をすると、生きているあなたの家

族と友人達が心配してしまいます」
キルスは土気色のルソの手を引いた。今起きているだけでも、辛いだろう。
「でも……」
「ルソが戻らないと、外に出てきた女性や子供達も戻ってくれません。子供には刺激が強いので、一緒に戻ってくれますか？」
ルソはしばし迷って周囲を見回した。心配そうに見つめる妹と目が合うと、彼女は何度も頷いて、ルソに駆け寄った。
「お兄ちゃん、休もう」
怪我を心配しているのか、飛びつくのを躊躇い、兄を支えるように腰に抱きついた。
「分かった」
ルソはゆっくりと頷いた。
可愛い妹の心配する顔は、兄の熱を冷ます特効薬になったようだ。

「ユシェール」
ルフィアスは女の傍らに膝をつき、焼け焦げ、血と泥で薄汚れた女の顔を覗き込む。

自分の心の呪縛が解けて、現実が目の前にある。
以前の自分であれば、もっと動揺して、胸が痛んでいただろう。ウジウジと悩んで、先延ばしにしていただろう。
不思議と、そんな気持ちにはならなかった。
ただ、哀れだと思った。
「美しい思い出の中で終わってくれていればよかったのに」
以前は目を伏せると人間だった時、二人きりで語り合った楽しい日々を思い出せたが、今はもう霞がかってしまった。
キルスが貸してくれた呪物を、首から下げているだけなのに、たったそれだけで何も思い出せなくなった。
キルスの言う通り、魔眼の力だったのだろう。そんな物に縋り付いて、手を拱いていた自分の不甲斐なさを恥じた。
「吸血鬼というのは、自分で思っていたよりも、人の心を縛るものなのだな」
「はい、旦那様」
ルグラスは子供の頃、ユシェールに対して誰よりも刺々しい態度を取っていた。それは魔眼の力に抗していた証だ。抗していたということは、彼にも効いていたのだ。
「私は旦那様がこの力を利用しているのを見たのは、女性から逃げるために使用して以来、お

よそ三十年ぶりでございますが」
「それは言うな」
「旦那様はもう少しご自身の力を使いこなした方がようございます」
「……そうだろうか」
自分で使ってみて、悪い事にしか使えない物ではないと理解した。
しかし目が覚めてみると、自分が何をされていたのかよく分かり、気分のいいものではないのを知った。
皆はキルスに乗せられて、仇討ちをしようとしていたが、それで一時的に気は晴れるだろうが、これは人殺しのようなものだ。自分がすべき事なのに、彼らにそんなことはさせられない。
そう思って止めてしまったが、仇討ちが出来なくて一生後悔するかもしれないという、後悔が胸の中にある。
だからルソをキルスが連れていってくれて助かった。
「その力は外敵に向ければ、血を流す事がなくなりましょう。賭け事をやめろというにしても、素直にいう事を聞いてくれるでしょう。悪さに利用しなければ、けっして悪い力ではありません。振るう者によって、大きく意味の違ってくる力です」
それを使いこなせると思うのは、思い上がりだと思っていた。どうしても必要な時だけ、もしくは咄嗟に使ってしまうような自体が起こった時にだけ、自分に許していた。

「きっと無欲な旦那様が掛ける呪縛であれば、皆も快いものと感じます。人に好意を持つのは、元来、とても楽しいものでございます」

人を好きになる。それは人として当然の事だ。誰も何も好きではないなど、寂しい人生だ。恋であれ、友情であれ。恋はともかく、ルフィアスは皆の事を愛しているし、古い友人も新しい友人もいる。

「そうだな。私はルグラスが好きで、この街が好きだ。皆と話しているのは、とても楽しいな」

だから誰かが死んでも、生きていかなければならない恐怖にも耐えられる。

キルスも死霊術師の基本は対話だと言っていた。生きていても死んでいても、一人はとても寂しい。

寂しさを理解しているから、エルヴァンの死霊術師達は対話したがるのかもしれない。そして生者にその言葉を伝えて、双方を喜ばせたいと思うのだろう。声も届かない者達の橋渡しをするのは、やりがいがありそうだ。

「ユシェールには、どうして理解してもらえなかったのだろう。穏やかに対話するのは、これほど楽しいのに」

「楽しいの方向性が違ったのでしょう。私達の間には、乗り越えようのない壁がございます」

「そうか。それは、寂しいな」

「寂しいから求めていたのでしょう。一人でいるほどつまらない事はございません」
ルフィアスはユシェールを見つめた。喉に突き刺さった剣で、声を発することも出来ない。
「キルスは生意気だが……気を回しすぎだな」
油断して誰かが噛まれるのを防ぐため、そして命乞いを封じるためにこうしたのだ。命乞いを聞いたら、ルフィアスの心が鈍ると。
「はい。旦那様のためにそこまでなさったのです。平気なふりをしておりましたが、わずかに顔が引きつっておりました。心臓を差し出させようとしていたのも、皆に退治させたという連帯感を持たせるためでしょう。旦那様一人でうじうじさせないために。リザイア殿は、だからこの場から彼を連れ出したのでしょう。大人が頼りにならない分、彼は何もかも完璧に遂行しようと頑張ってしまうでしょうから」
ルグラスの忌憚のない言い方にルフィアスが笑うと、他の者達も笑った。
「大人がしっかりしていないから、子供に無理をさせてしまうんだな」
昔、ルグラスもそうだった。大人がしっかりしていないから、今のキルスよりも幼かった彼は、一人でユシェールに抗していた。
「私はいつも、強い子供に救われるな」
つくづく、駄目な大人だ。
どうすればいいのか分からずに、キルスに頼りすぎてしまっていた。彼は道具と知恵を授け

てくれただけで、十分だったのだ。彼がした事をやらなければならないのはルフィアスだったのに、ほとんどやらせてしまった。

「今度こそ、この手で終わらせよう」

「はい」

早くこうするべきだった。そうしなかったのは、ルフィアスの弱さだ。

「ユシェール、長く苦しませてすまなかった」

長年閉じ込めて、結果的にこのように醜い姿で磔にしてしまった。

「最後まで美しい君でいて欲しかったけれど……」

おかげで視界は晴れたが、この胸の中にあるのは哀れみだけで、寂しくもある。

恋の終わりは寂しいものだ。

「さようなら、ユシェール」

胸の間、吸血鬼の力そのものである心臓の上に口付け、彼女が灰になるまでその力を啜った。

聖堂の中では、保護されたラキアと、彼女が庇った小さな子供が抱き合っていた。

わんわん泣いて謝る少年を、ラキアが慰めている。それをさらに大人の女達が抱き締めて泣

いている。
誰かが騒いで泣いてくれると冷静になれるものだが、それにしても強い子だ。
「よかった。今度は守れた」
リザイアは安堵の表情を浮かべて呟いた。
「前は守れなかったのですか？」
「ああ、守れなかった。死んではいけなかったのに、判断を間違えた。俺が間違えて死んだから、あの子達は救われなかった」
彼の子供に対する拘り方は異様で、死因に子供が大きく関わっていると思っていた。
「キルス、まだ幼いお前にこんな事を頼むのは心が痛むが、今の俺にはキルスしかいないから聞いて欲しい」
「幼いというほど幼くはありません。僕は人より少し成長期が遅いだけです」
「そうだな。何年かすれば、きっと大きくなるな」
リザイアはキルスの頭をくしゃくしゃと撫でる。結んでいないので、髪はきっとひどく絡んでいるに違いない。
「キルス、俺が忘れないうちに聞いてくれ」
「もちろん、一言ももらさず聞いて差し上げますから、もう撫でるのはやめなさい」
リザイアは頷いて、ちらりと子供達を見た。聖堂は有事の避難場所を兼ねているとはいえ、

思ったよりも集まっていた。
外では怖いことが行われているから、彼らの事も考えなければならない。
「俺は、子供に殺されたんだ。誘拐された子供を人質に取られて、その妹に刺されて死んだんだ」
リザイアは悔しげに拳を握りしめた。
「人身売買組織だ。隠れ家の場所を聞き出した時、俺は……」
リザイアの眼球がぶれた。彼が許せないのは、失敗した自分自身だ。自分に対する怒りで、冷静さを失いかけている。
「後悔はいくらでも後でしなさい。場所はどこですか」
キルスが声をかけると、彼は辛そうに頷いて続けた。
「俺がアリーサに拾われた場所から南にある街だ。そこの一番大きな酒場の地下。ごめん……それしか思い出せない。街の名前も、店の名前も。思い出そうとすると、頭が……」
リザイアは頭を押さえて苦しげに言う。
彼はいつも耐えている。それは常に子供のためだった。助けられなかった事、子供に自分を殺させてしまった事、それらは彼にとって自分が死ぬよりも辛く悲しい事だったのだろう。
このような不死者がいるから、一族は今の家業を続けている。
死は辛いものだ。だがそれを乗り越えて次に進めない死は良くない死だ。

だがこれで、彼の心残りはなくなるのだろう。

「それだけ分かれば十分ですよ。もう無理をして思い出そうとしなくても大丈夫です。父に頼んで使い魔に偵察に行かせて場所を特定した後、光聖会にでも情報を高く売っておきましょう」

キルスはリザイアを安心させるために、笑みを浮かべた。

「光聖会がそんなことをしてくれるんですか？」

妹にしがみつかれて困っている様子だったルソが、妹の気を逸らすように尋ねた。

「もちろんです。なにせ犯罪組織の中でも、人身売買と言えば世間からの嫌悪感が大きく、儲けが大きい。つまり人々から感謝されつつ、新たな信者を得つつ、隠し財産を押収するまたとない機会ですから！」

「……そ、そうなのか。金なのか」

ルソは幻滅したように言った。

キルスはリザイアを安心させるように続ける。

「人身売買組織の隠れ家の情報となれば、きっと目の色を変えて動いてくれるでしょう。組織とは僕に上手く使われるために存在しているのです」

「お前は本当にちゃっかりしているな」

リザイアはくすりと笑い、そして腹を押さえて言った。

「はらへった」
「は？」
唐突な言葉に、キルスは驚いてリザイアを見上げた。
「はらへった。話してたら、また腹が空いてきた。さっきメシを投げて壊したから、明日食べようと思ってたメシがなくなった」
キルスは額を手で押さえた。
死霊ならこれで成仏するが、彼は生ける死体（リビングデッド）だ。彼らの円満な成仏というのは、肉体という縛りがあるためとても難しい。まだ解決はしていないから、肉体を捨てる気にはならないのかもしれない。
「仕方がないですね。特別ですよ」
皆の前で暴走してはたまらないので、渋々予備の聖光水晶をリザイアに渡した。

ルフィアスは吸血鬼になってから初めて、心の底から晴れやかな気持ちになっていた。

長年の悩みの種がなくなり、死者二人の魂は無事で、親子対面を果たした後に、キルスが以前の脅迫のような気配を一切感じない、穏やかな成仏をさせてくれた。完璧にこなしたから、誰一人彼の事を脅迫の死霊術師だなどとは言わなかった。それが若干腑に落ちない。

人身売買組織とやらの物取りも大詰めで、キルスは吸血鬼退治の道具を返しに行くという名目で、不安定なリザイアの代わりにその様子を見に行った。

リザイアも聖光水晶を食べて大人しい。最近は子供達とよく遊んで幸せそうだ。最近はよくチーズも食べる。腹は満たされないが心が満たされるらしい。

心穏やかな日々を過ごし、あとは結果が出るのを待つだけ。

彼の成仏の日も近いだろう。捕食者との同居ももうすぐ終わりだ。

「ああ、清々しい陽気だな。今なら太陽の下に出ても平気な気がする」

「きがするだけー」

グラス片手に窓辺近くで外を見ていると、リザイアはあの夜の鋭い眼差しが嘘のようにまた

呆けた顔で言う。
「旦那様は力をつけていい気になっているのでしょう」
「ちからに、おぼれる、よくないぞ」
「言われなくても分かっている」
太陽の下に出たいという願望を、そんな風に否定されると落ち込んでしまう。
「リザイアはいいな。太陽の下に出られて」
「ふつうの、めしがある、うらやましい」
「お前も血で少しは紛れないか？　肉は簡単に分け与えられないが血なら簡単に手に入るぞ」
「ち、しょうきにもどれる、きがする。けど、べつのもの、こわれて、とめられなくなる……きがする」
「気がするか……」
気がするというのは、信憑性がある。思い込みという時も多いが、本能が正しい答えを導き出す事も多い。不死者の場合は、特にその本能が強い。
「そだ。るふぃあす、まがん、つかえるようになったか？」
「なんだ、唐突に」
「こども、みんな、きにしてる。わくわく？」
魔眼の力に怯えられているのではないらしく、ほっとした。

「まだ試していない」
「お一人の時に鏡に向かって練習されております」
「ルグラス、なぜ知っている？」
「旦那様の行動を予想するのは容易でございます」
ルフィアスは自分を知り尽くした執事の言葉に肩を落とした。
彼には一生敵わないだろう。
「じぶんに、ほれたら、どうする？」
「そんなわけがない。発動しているか気になっただけだ」
ルフィアスはいじけながらワイングラスの血を飲んだ。今日の血は健康的な少年の物だ。葡萄園で長年働いている夫婦の息子の血だろう。
「力を得たのは実感できるが、暴力は苦手だから宝の持ち腐れだな。良かったのは少し腕力が上がったぐらいだな」
「びんのふた、じりきで、あけられる。おめでとう」
相変わらず、さらりと嫌味を言う男だ。
ルフィアスはユシェールの力を吸収して強くなったが、ユシェールよりも弱かった。比べられるのは身体能力だけだが、腕力で負けているのは明らかだ。彼女は林檎を片手で潰すどころか、胡桃を指で割っていた。もちろんルフィアスには林檎すら握り潰せない。

「大した進歩でございます。瓶の蓋も開けられない吸血鬼など、少々体裁が……」
「ほっといてくれ」
皆に弄られ、ルフィアスはため息をついた。
だが、これはこれで心地よい。誰にも相手をされなくなるほど、恐ろしい事はない。恐ろしいと言われる事なく、このように構われるのは、心地よい。
「あ、きるす」
リザイアは立ち上がって窓を開けた。
「きるす、きるすっ」
「すぐに行きますから、連呼しないでください」
外からキルスの呆れ声が返ってきた。
「きるす、おかえり」
「ただいま。他人の家ですが」
「きるす、げんきか？」
「疲れましたが、元気ですよ。騒がしくしないで、黙って座って待っていなさい」
「わかった。おれ、すわってまつ」
彼は窓から離れ、幸せそうに微笑みながら椅子に座る。彼にとって、キルスは特別なようだ。
「ははは、まるでお座りと言われた犬のようですな。旦那様に対しては時折狼のような目つ

きをなさいますが」

ルグラスは楽しげに笑った。

「おれ、いぬ？　おおかみ？」

「今日も冷えますからね。私は温かい物を用意して参ります」

ルグラスは深く追及される前に、そう言って部屋を出て行った。ルフィアスも椅子に腰掛ける。リザイアはキルスが出て行ってから、ずっとそわそわして待っていた。キルスを慕っているのもあるが、不死者になってまで救いたがった子供達がどうなったか、ずっと不安にしていたのだ。

しばらくすると、キルスが戻ってきた。彼は外したマントを空いていた椅子の背に掛ける。

「で、どうだった？」

ルフィアスはグラスを置いて、待ちきれないがキルスの言いつけを守り、急かさずに待つリザイアに代わって尋ねた。

「捕り物は成功しました。誘拐された子は親元に返し、親に売られた子は光聖会で面倒を見ます。食べるのには困らないでしょうから安心なさい」

キルスは次に手袋を外してテーブルに置いた。

「というか、リザイア一人で既に組織は半壊してましたけどね」

「は？　一人で組織を半壊っ!?」

ルフィアスはいつものように呆けているリザイアを見た。彼にそのような事が出来るのが信じられなかった。

子供を人質に取られて、子供に刺されて死んでしまうような男が、組織を半壊していたなどとは、信じられるはずがない。

「やたらと強いとは思っていたのですが、生前から僕の予想より遥かに強かったようですね。犯罪者は容赦なく殺して、本当に後一歩のところで、誘拐犯達が自棄になって子供を盾にしたら効果があって、あっさり殺せてしまったようです」

ルフィアスはリザイアを見て、ある意味彼らしいと納得した。

子供のために死んで、子供のために不死者になって、子供のために極端な存在の仕方をしているのだ。

「リザイアを殺した女の子達も保護しました」

「ほんとうかっ!?」

椅子に座っていたリザイアは、立ち上がってキルスに詰め寄った。

「もちろんです。ごめんなさいって、泣いていましたよ。刺されたショックで記憶を失って休んでいるから、僕が代わりに来たと説明しておきました」

つまり不死者になっているとは言っていないのだ。

「ありがとう。きるすは、きがきくな」

「自分が人を殺したなんて、知らない方がいい事ですからね。嘘はついていませんし」
「そうだな」
そう言うと、リザイアはキルスを抱き締めた。
「ありがとう」
キルスは苦笑して、リザイアの背に手を回して軽く叩いた。
「どういたしまして。おかげで聖光水晶と僕好みの曰く付きをくすね……分け前としていただけました。見てください、この宝石の禍々しい輝きを！　身につける者をことごとく死に追いやっているそうです。素晴らしいでしょう」
照れ隠しなのだろうが、相変わらず抜け目ない。彼が持っている限りは、その宝石は二度と人を殺さないだろう。それどころか徐々に浄化されるに違いない。
「ところでリザイア、肉体を離れようとか、そういう感じはしますか？」
リザイアはキルスから身を離し、首を傾げた。
「ぜんぜん」
それを聞いて、キルスの表情が険しくなった。
「え、ぜんぜん？」
「とてもおだやか。たのしい」
「え、楽しい？　成仏したいなぁって思わないんですか？」

「まったく。あした、かくれんぼ、やくそくした。あそぶの、たのしい。みんな、かわいい」
その言葉を聞くとキルスはその場に崩れ落ち、傍らの椅子に縋りついて泣きそうな顔をした。
「終わったと、思ったのに……」
「がんばれー」
リザイアは、無責任にキルスを励ました。すると彼は低く笑って肩を震わせた。
「くくく……頑張りますよ。ええ、頑張りますよ。可愛い妹にも頼まれましたからね」
キルスは袖で顔をごしごしとこすって顔を上げた。
「ありーさ、おれに、やさしくしてくれた。きるす、おれをしょうきでいさせてくれた。おれ、もう、ありーさと、きるすのもの。きるすにすてられたら、いきていけない」
「何を言っているんです。お前はもう死んでいます」
「ああ、そうだった！」
呆れ果てたのか、キルスは這いずるように椅子に座わろうとし、リザイアがひょいと抱き上げる。
「こらっ」
リザイアは自分の膝にキルスを乗せて、椅子に座った。くしゃくしゃと頭を撫でられ、キルスは諦めたように体の力を抜く。せっかく編んであった三つ編みも、結び直さなくてはならないだろう。

「……ひょっとしたら、本当に子供がいて、それが心残りなのかもしれません」
上機嫌で自分を子供扱いするリザイアを見て、キルスは呟いた。
「大きなキルスを可愛がっているから、弟とか妹かもしれないぞ」
リザイアはまだ二十歳そこそこの青年だ。子供がいたとしても、小さな子だろう。その子供が誘拐されていたのなら、まだ終わっていないと言うはずだ。しかし彼は脳天気にしている。今回の事とは関係ない所に、まだ心残りがあると考えた方が自然だ。
「そうですね。やはり、身元を割り出さなければ終わらないと……まあ、覚悟していたことですが」
最悪の場合は、それでも終わらない。
「大変だな」
「まあ、これだけの剣士です。目立たないはずがないので、そのうち見つかるでしょう」
「そうだな」
顔立ちも整っており、目立たないはずがなかった。
「まだしばらく、この街で生活しなければならないようです」
「い、居座る気かっ!?」
「手に入れた聖光水晶にも限りがありますからね。大丈夫です。力の強い不死者なら数年で落ち着きます。これだけ協力的なら、きっと大丈夫です！」



キルスは精一杯前向きに考えているようだ。一人で組織を半壊させるような男が相手では仕方がない。頭の足りない現状でも手に余っているのだ。希望のある将来を考えたいのは、当然の事だろう。

しかし、ユシェールの事で助けてもらったが、リザイアの非常食代わりにされるのは、割に合わない。

その時ふと、ルフィアスは良い事を思いついた。

「キルス」

「何ですか」

「お願いがあるんだ」

ルフィアスは力を込めてキルスを見つめた。彼は穏やかに微笑んでいる。いける気がした。

「家賃代りにまた血を分けてくれないか？」

「いやです」

穏やかな微笑みのまま即答されてしまった。

「その程度の魔眼で、この僕を服従させようというのが間違いです」

「気付いていたのか。魔眼が発動しているのか、よく分からなくって」

「それで一番かかりにくい僕にかけてどうするんですか。近所のお子様で試しなさい。解除できなかったら、返しそびれた呪物を貸します。むしろ返せと言われなかったので、きっと僕の

物にした方がいいという神の思し召しでしょう。たまには神も役に立つものです」
「……」
担当者が哀れだが、あると便利なので口に出来なかった。
「本当に、お前は分かりやすいですね。よくもまあ、貴族のくせにそんな分かりやすくて生きていられましたね」
「旦那様はその分かりやすさも愛されておりますので、守ってくれる方はたくさんおられます」
いつの間にかルグラスがドアの所に立っていた。
「確かに守ってやらないと、という気にはさせますね」
キルスは苦笑しながら言う。
まだ少年のキルスにまで、他の者達と同じような事を言われてしまった。
「やはり近寄りがたい人外の美貌と、中身の親しみやすい人間らしさの落差が良いのでしょう。落差が大きいほど、人の心は落ちやすいと申しますし」
「しかし、あまりにも簡単にボロが出すぎでしょう」
「初対面の相手には、それらしく振る舞えるように指導しております。常に演技がかっているぐらいが、麗しい旦那様にはちょうど良いのですが……」
「三歩も歩いたら忘れそうですね」

「なぜか中身はヘタレでございますもので、初対面の方には強がれても、慣れてくると……」
「否定しろよ」
「旦那様は、一晩で呼び捨てにされるほどのダメ男でございます」
否定出来ずに言葉に詰まる。
「そうだ、ルフィアス！　良い事を思いつきました！」
突然、キルスがリザイアの膝の上で、顔を輝かせ言った。なぜかあまり良い予感がせず、ルフィアスは思わず身構えた。
「な、なんだ？」
「リザイアを魔眼で魅了してください」
ルフィアスは目を見張った。
「きるす、おれ、おとこ、しゅみちがう」
リザイアの言葉に、それは自分の言葉だと思った。
「分かっています」
「きるすはかわいいけど、おとこはいや」
「僕も男です！」
リザイアは首を傾げた。完全に子供扱いしているようだ。
「私も出来れば女性を相手に……」

ルフィアスは乙女ならともかく、捕食者を魅了するなど恐ろしくて出来やしない。
「女性を相手に、出来るんですか？」
「出来ないから君で試したんだ」
「即答ですね」
リザイアよりも、女性を魅了する方が恐ろしい事に自分でも気付いて、我が事ながら愕然とした。
「リ、リザイアで練習するなら、キルスで練習する方が」
「だから、お前ごとき顔だけ吸血鬼が、多少力を得たところで、僕相手にどうやって？　異性ならともかく、同性では意図的に掛かってやる事すら難しいですよ。だいたいその力は惚れさせるものではありません。従属させる、お願いを聞いてもらいやすくする力です」
「そうなんだが……」
ユシェールの事があるから、この力に対してはつい警戒してしまう。かかりそうもないキルスだから、逆に安心出来るのだ。
「リザイアで成功したら、良い事ずくめではありませんか」
「確かにそうなんだが……」
非常食として見られなくなる。
「聖光水晶を求める期間を一日延ばせるだけでも助かります」

「えー。おれ、はらへった」
「黙りなさい。お前の意見は聞いていません」
「はらへった」
「あと一日持つでしょう」
「はらへった」
「あぁ……何だか僕も腹が減りました」
キルスは疲れた様子で腹をさすった。
「では、報告がてら外食にでも参りましょう。どうなったか、皆が気にしております」
ルグラスが提案すると、キルスは驚いたように顔を上げた。
「気にしてるんですか？」
「当たり前だ。ユシェールの事が下火になれば、解決していない事件が話題になるのは当然だろう。ラキアとルソも必要ないのにお前が帰ってきていないか見に来るぐらいだ」
ルフィアスが言うと、キルスはため息をついた。
「そういった交流も大切ですね。めでたい話題でもありますし、仕方がないですね」
キルスは自分を拘束しているリザイアの手を叩いて立たせ、脱いだばかりのマントを羽織り直し、骨の杖を手にした。
「ルフィアス、ごちそうになります」

猫を被った笑みを浮かべて言った。

「……まあ、いいが」

世話もしたが、世話になったのも確かだ。

その後、彼が深夜まで何度も同じ話をする事になるのが予想できたが、ルフィアスは黙っておくことにした。

あとがき

私は昔から死霊術師という題材が大好きでした。
いつか主役で書きたいと思っていたのですが、なにぶん主人公にするには、今まで以上に、どうしようもないぐらいニッチな職業です。
普通にゾンビとかスケルトンを作って操らせていては、ボツになるだろうと悩んでいました。しかも書くとしたら少女小説です。グロとかレーベル的にダメ絶対。
どう料理したらいいのかと悩んでいましたが、魔道士の研究日誌1巻の著者稿をチェックしていた時に、現実逃避で思い付きました。
ド天然の話を何度も読み返す内、ひどいキャラの話を書きたくなり、設定が降ってきました。
私がお気に入りの設定を一番思い付きやすいのは、現実逃避している時です。

対話したり保護したりする事で、何とか主人公っぽくなりましたが、性格は上から

目線の女王様です。他は犬と、伝説のイケメンなのに被害者です。

実は最初は主人公を女の子にしようかと思っていました。女王様系の女の子が大好物なので。しかし話の流れ的に恋愛要素など入る余地もなく、女の子だとそういう方面を期待されてしまうので、いっそ男の子にしてしまおうと、こうなりました。女王様な男の子も大好物なので。

そしてヒーロー的なポジションにいるのが屍喰鬼（グール）。死んでるだけではなく、実害のある屍喰鬼（グール）です。不死者が嫌いな不死者です。

少女小説の端くれなのでリビングデットと書いて、さらに呆けさせて無理やりマイルドにしてみましたが、脳内ではもっと豹変が激しい、陰のある男だったのに、気付いたら大型犬みたいになってました。不思議です。首輪がトドメです。イラストのラフを見て、自分で提案したんですが。

ダメ元で提案したのですが、本当に実現して、鎖までつけてくださるとは思っていませんでした。なんておいしいのでしょう。おか様、ありがとうございます。

ルフィアスは比較的普通なはずですが、性格のせいで男なのに私が書いたどのヒロインよりもヒロインをしている気がします。ドS女王様と犬系ドSとドS執事に囲まれていたせいで、慈悲深い薄幸の美男子なのに、ドMに見える残念吸血鬼。

設定だけ並べると、少女小説で出してもらったのが信じられないイロモノぶり。ま

さか本当にこんなイロモノを出していただけるとは、有り難い事です。
設定が少女小説っぽくないので、イラストレーターさんを選ぶのも難航しました。
イラストを描いて下さった、おかざきおか様、本当にありがとうございます。
キルスやラキアが可愛くて可愛くて。

まだ行が余っているので宣伝です。
春頃に『魔道士の研究日誌3巻』が発売予定です。次で完結です。
恋とはなんぞと悩みつつ、ゾーク研究所に行って研究発表をします。
ド天然なピュアマッドエンジニアのリゼットも、とうとう恋心を理解する……といいですね。

この本の発売翌月には、レジーナブックスさんから『詐騎士5巻』も発売予定です。
聖騎士になった聖女様命の主人公が、聖女様のために暴走する話です。
こちらもよろしくお願いします。

一迅社文庫アイリス

不死者と踊れ
それは由緒正しきご職業

2013年2月1日　初版発行

著　者■かいとーこ

発行者■杉野庸介

発行所■株式会社一迅社
〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
電話03-5312-7432(編集)
電話03-5312-6150(販売)

印刷所・製本■大日本印刷株式会社

ＤＴＰ■株式会社三協美術

装　幀■清水香苗(CoCo.Design)

落丁・乱丁本は株式会社一迅社販売部までお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者などの第三者に依頼してスキャンやデジタル化をすることは、個人や家庭内の利用に限るものであっても著作権法上認められておりません。

ISBN978-4-7580-4406-6
ⓒかいとーこ／一迅社2013　Printed in JAPAN

●この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには関係ありません。

この本を読んでのご意見
ご感想などをお寄せください。

おたよりの宛て先

〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
株式会社一迅社　ノベル編集部
かいとーこ 先生・おかざきおか 先生

第2回 New-Generation アイリス少女小説大賞

作品募集のお知らせ

一迅社文庫アイリスは、10代中心の少女に向けたエンターテイメント作品を募集します。
ファンタジー、時代風小説、ミステリー、SF、百合など、
皆様からの新しい感性と意欲に溢れた作品をお待ちしています!

応募要項

応募資格 年齢・性別・プロアマ不問。作品は未発表のものに限ります。

表彰・賞金

金賞 賞金100万円+受賞作刊行

銀賞 賞金20万円+受賞作刊行

銅賞 賞金5万円+担当編集付き

選考 プロの作家と一迅社文庫編集部が作品を審査します。

応募規定

- A4用紙タテ組の42字×34行の書式で、70枚以上115枚以内
(400字詰原稿用紙換算で、250枚以上400枚以内)。
- 応募の際には原稿用紙のほか、必ず ①作品タイトル ②作品ジャンル(ファンタジー、百合など)
③作品テーマ ④郵便番号・住所 ⑤氏名 ⑥ペンネーム ⑦電話番号 ⑧年齢 ⑨職業(学年)
⑩作歴(投稿歴・受賞歴) ⑪メールアドレス(所持している方に限り) ⑫あらすじ(800文字程度) を
明記した別紙を同封してください。

※あらすじは、登場人物や作品の内容がネタバレも含めて最後までわかるように書いてください。
※作品タイトル、氏名、ペンネームには、必ずふりがなを付けてください。

権利他 金賞・銀賞作品は一迅社より刊行します。
その作品の出版権・上映権・上演権・映像権などの諸権利はすべて一迅社に帰属し、出版に際しては
当社規定の印税、または原稿使用料をお支払いします。

第2回 New-Generationアイリス少女小説大賞締め切り

2013年8月31日(当日消印有効)

原稿送付先 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-10 成信ビル8F
株式会社一迅社　ノベル編集部「第2回New-Generationアイリス少女小説大賞」係

※応募原稿は返却致しません。必要な方は、コピーを取ってからご応募ください　※他社との二重応募は不可とします。
※選考に関するお問い合わせご質問には一切応じかねます。　※受賞作品については、小社発行物・媒体にて発表いたします。
※応募の際に頂いた名前や住所などの個人情報は、この募集に関する用途以外では使用致しません。

◆ 本大賞について、詳細などは随時小社サイトや文庫新刊にて告知していきます。◆

9784758044066

ISBN978-4-7580-4406-6
C0193 ¥590E

1920193005905

定価：本体590円 十税
発行　一迅社
一迅社文庫アイリス



呪われた物が好きな、自称・死霊術師の少年キルス。ある日、溺愛する妹が奇妙なモノを拾ってきてしまった。それは、聖光水晶（プレス・クオーツ）を食べないと暴走する、不死者の青年リザイア。キルスは彼を成仏させられず、世話をすることに!?　けれど、高価な食糧を買う資金はない。そこでキルスが目をつけたのは、吸血鬼が領主をしている街。その近くに、聖光水晶が眠る廃鉱山があるというのだが――。
腹グロ少年と贅沢な不死者のダークコメディ。

不死者と踊れ それは由緒正しきご職業